
俺と野球と奇跡 (パワポケ 1 0)

yoriduki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と野球と奇跡 （パワポケ10）

【Nコード】

N9481X

【作者名】

yoriduki

【あらすじ】

親に流されるままに親切高校に入学することになった俺。

中学の時から続けていた野球部に入り、仲間とともに甲子園を目指して

日々練習していた。

だが、その前には中学校の時の「俺にとってのライバル」が立ちはだかる…

稚拙な文章だけど、よかったから見てください！

一日か二日に一話更新しようと思ってますが、そろそろテストが近いし、受験もあるので、更新スピードが遅れるかもしれないのでよろしく願います。

第1話 「一体俺はどうなっていく？」（前書き）

この作品は、ほとんどパワポケ10成分で構成されています。
嫌な人は見ないでください。

第1話 「一体俺はどうなっていく?」

「はぁ、今日の練習も疲れたな…」

「そうでやんすね…」

そういつて、俺と親友の荷田君は最近住み始めた学校の寮へ戻って行った。

そして寮の部屋に着くと、

「おい、お前ら帰るのが遅い! さっさとポテチ買ってこい!」

「え…」

先輩たちがいた。

俺達一年生はいつもこのような先輩の雑務を過ごしながら生活している日々だ。

とりあえずなぜこのような生活をしているか教えておこつ。

2週間ほど前……

「そろそろ俺も高校どこいくか決めないとなあ…」

「なら、この親切高校ってところはどうかしら？」

親切？変な名前だなあと、思いながら、もういちど母に尋ねた。

「それってどんな高校？」

「なんでも野球が強い全寮制の高校らしいわよ」

「俺野球は中学でやめるって言わなかった？」

「あれ、そうだったかしら、まあいいじゃない」

野球、野球か…

少し考え、俺は言った。

「うん、もう一度俺野球をやるよ」

そう、中学の時に、倒せなかったアイツを倒したくて…

「それじゃあ、母さん行ってくるよ」

「いつてらっしゃい」

「この高校バスでしかこれないんだな、しかも片道一時間だし…」

「本当に不便でやんすねえ。バスの本数も少ないでやんすし」

「え？君は？」

「おいら荷田でやんす。中学の時あんたの学校とも戦ったことあるでやんすよ」

「荷田…あ、思い出したぞ、あの時のキャッチャーか。俺は西園寺卓弥だ。よろしく」

「よろしくでやんす。そういえば、西園寺君も野球部に入るんでやんすか？」

「…ああ、もちろん」

そんな話をしてる間に俺たちは学校についた。

「えー、これから校長先生の話だ。よく聞くように！」

「この親切高校では全寮制が（ry

だから、これから君たちは外に出る必要がないのです。なぜなら、ここには

君たちに必要なすべてがそろっているのですから」

ガコン！

え…今の音って何？まさか…門が閉まった音？俺これからやっていけるかなあ…

球児移動中…

「俺が野球部の監督の車坂だ。ここでは親切なんて関係なしにビシバシやっていく。」

そのつもりだからしっかり覚悟しておけ！」

おい、親切はどこいった。責任問題とかいいのか。

そして今。

さっきの寮の部屋で毎日同室の先輩たちにしごかれている。

荷田君がいるから俺一人だけしごかれてるわけじゃないからまだマシだけど…

ちなみに同室の先輩は飯占^{いいじめ}キャプテンと北乃先輩だ。

俺、本当にこれからやっていけるのかなあ…

第1話 「一体俺はどうなっていく？」（後書き）

yoridukiです。初投稿なので、間違った言葉、文脈などがあつたら指摘お願いします。

第2話 「ペラって薄っぺらくて、価値が低い感じするよね」

あれはいつだったか。きっと中3の春だったはず。

公式の大会で上位に入り、次の大会であたった相手がアイツだった。アイツは俺と同じ投手で、4番だった。

俺はアイツからヒットを打てず、逆にホームランを打たれて1 - 0で負けた。

そんな夢を見て俺は起きた。

「西園寺君、早く起きないと遅刻するでやんすよ!」

「え… あ、ああ、もうこんな時間か!」

急いで制服に着替えて寮を出る。なんとか朝のチャイムには、間に合った。

…にしても懐かしい夢を見たな、俺。

そういえば1時間目はなんだったかな…

そう思っただけ時間割を見ると、

「HRホームルーム何するんでやんすかね?」

丁度隣から聞かれた。

「いや、なんで俺に聞くんだよ…」

「知ってそうでやんすから」

なんだそれ。

「今から校内で使う紙幣を渡す」

担任の大河内先生はそう言って、ペラとよばれる紙幣を渡してきた。

「先生、この学校でお金は使わないはずじゃ？」

「まあ待て田島、今から説明するから。」

まず、これはこの学校で使うお金だ。購買で使ったり、100ペラ
だせば一日間

だけだが、外に出ることができる。肝心のためる方法としては、ボ
ランテアを

することだ。ボラ（ry）をしたら学校側からペラが支払われる。こ
の200ペラ

はお試し用だな。言っとくが、ペラを取引したりするのは御法度だ
からな、解っ

たな？西園寺」

「なんで俺に言うんですか！」

「お前入試の時点数低かっただろ」

「なら、越後だって」

「あいつも確かに点数が低かったが、今寝てるだろ」

ぐう。

ま、まあ 西園寺 は 200 ペラ を 手に入れた！

「西園寺君は何に使うでやんすか？」

「そうだなあ…」

帰る途中に荷田君が聞いてきた。でもなあ…

「まあ今の所はためておくよ。何があるか解らないからね。」

「それが無難でやんすね」

「じゃ、まあ部屋でも入って話でもしようか」

ガチャ

「おうお前ら！今日ペラ配布されたよな？100ペラよこせ！」

「……」

「あ、どうした？まさかもう使ってたやしねえよな？」

「いや、その…」

しょうがないから北乃先輩に100ペラ渡した。
すると隣の荷田君が話しかけてきた。

「…ホントに使うことになったでやんすね」

「言わないでくれ…」

越後アイツ大変だろうな、先輩三人いたし。

適当に手を合わせておくか。

あー、もうずっとボランティアしといてやろうか。

「そういえば、ここって男子校だと思ってたら森の奥に女子寮があるんでやんすね！」

「普通に平地でつながってるだろ、警備員さんがいるけどな」

「え、そうだったんでやんすか！」

「だからといって行くのはやめとけよ」

「なんででやんすか？」

「あそこには警備犬や警備員さんがいっぱいいるからな。怒られに行くなら止めはしないけどな」

「そ、そうなんでやんすか…」

「ほら分かったら俺のパンツでも洗濯しとけ！」

森か…そのまま壁をよじ登って外にも出れそうだな。

警備に見つからなかったらの話だけど。

第3話 「森の中の巨大女」

「はぁ…疲れた…」

「昨日は部活のテスト、昨日は先輩のマッサージでもつくたくただった。」

「屋上にでも行って休むかな…」

「てくてくと屋上に向かって歩き出す。
そこでふいに足をとめた。」

「音楽室から音？一体誰が…」

「まさか幽霊とも考えたけど、それはないだろうな。
とりあえず少し見てみるか…ん？」

「あれ、田島じゃないか」

「お、西園寺、どうしたんだ？」

「お前こそ何やってんだよ、ピアノなんか弾いて」

「俺今度ピアノのコンクールに出るんだよ。だから練習してんだ」

「そうなのか、がんばれよ」

「おう。今度またよかったら聴いてくれよ」

「ああ」

「そして音楽室を出る。」

「あの暗い顔の田島がピアノ？」

「プッw」

聞こえてたらしく、あとで殴られた。

「うーん、いい風！屋上は気持ちいいな！」

ここからだ和学校のいろんな場所が良く見えるな。確かに向こうの方には女子寮があるな。

遠くて女子の姿は確認できないけど。

「それにこの森って相当広いんだな…ん？あそこ今何か動かなかったか？」

少し行ってみよう」

「はあはあっ！屋上からあの場所まで相当遠いな！途中で警備員さんに見つかりそうになったし……！」

犬があそこにいる…！ヤバい、万事休すかって、あれ？

「何かから逃げてないかあれ？」

もう少し近づいてみると、今度はパンツと音がした。

「な、何なんだ？いったい何が…」

さらに近付くと、いきなり木の陰から女の子が出てきた。

「うわっ！」

互いに叫んだ。女の子はともかく俺が叫んだ理由？そんなの簡単だ。相手が185cmあれば誰でもビビるだろう。

「あ、あんたウチの学校の男子…？」

「あ、うん。君は？」

「私もこの生徒。大江 おおえ 和那 かずな っていうんや。よろしくな」

「俺は西園寺。よろしく」

「それはそうと、なんでここにおるんや？ここは生徒禁止の場所やのに…」

「うっ！」

た、確かに…

俺が屋上にいて見たものなんて知らなさそうだけど…いや、もしかしてこの子か？

「俺は…少し用事で」

「用事いー？こんなところにか？まさか女子寮目当て…」

「ち、違うつてば！そういう君はどうなんだ？」

「う、うち？あの…武術やってて」

「武術？あのバンツていつてたやつ？それなら学校でやればいいじゃないか」

「ウチ身体が大きいやろ？だから、身体振りまわすだけでも迷惑やねん」

「柔道とか空手とかつて、そんな身体激しく動かしたか？」

「いや…うちやってるの槍術やから」

「やり？なんでやりなんか…もつと剣道とかにすればいいのに」

「ああ？剣？いいか槍っていうのはな、もともと…」

30分経過

「つていうことなんやぞ、分かったか！」

「わ、分かりました…」

まさかこんなところで槍の話を長々と聞くことになるとは…
犬が来てたらどうしてたん…あれ？

30分もいたのに一向に犬がこないな、どうしたんだ？

「なあ」

「なに？」

「なんでこここんなに犬がこないんだ？」

「警備犬のこと？」

「ああ」

「そ、それは…ふ、普段一緒に遊んでるんやけど…き、今日は来てないみ、みたいやな」

うつわー、急に挙動不審になった。

まさかあいつ、いっつもあの犬を撃退してるのか…

しかもそれを「遊び」と…これから逆らわないでおこう…

「さあ次はあんたの用事やな」

「え？言わないといけないの？」

「当たり前やろ…あ、もしかしてホントに女子寮目当て？」

「だから違うつて！俺は屋上から森を見てて、人影が見えたから来たんだよ」

「人影…まさかオバケ！？」

「いや、ちがうだろ」

「あれ、オバケ信じてへんの？」

「まあな」

「ちなみにそれってどこらへんで動いたん？」

「ええつと…屋上で見たのがあそこだから…もつとあっちの方かな」

「ええつ本当に！？やっぱりオバケやん！」

「え、君じゃないの？」

「私はずっとここにいたで？」

じゃああれはこの子じゃないのか…まさかオバケじゃないよな？

俺の後ろでオバケが嫌いなのか、頭を抱えながら「うあー」って大江が叫んでいるが。

これは今度また調べる必要があるかな…

「西園寺君ホントにどこ行っただやんすか！洗濯ものを一人でやる羽目になっただやんす…」

「いいからさっさと手を動かせ！」

「わーすいません！でやんす」

荷田君は今日もしごかれている。

第4話 「チームメイトと緑の髪の子」

前にあった森の事がどうしても気になるのでまた屋上に行くことにした。

まあ会えるかどうかは分からないけど…

それにしても、

「因数分解って何なんだよ。なんで勝手に分解するんだよ。自然のままにしておけよ。」

だから数学は嫌いなんだって…ん？」

ガサガサッ

「やっぱり森の方で誰かがいるな。しかも…先生じゃなく女の子っぽいし」

場所を考えると大江ではないことが分かった。

残念ながら今日は部活があるからグラウンドにいかないと行けないんだけど。

「今度こそ尻尾をつかんでやるぞ」

そう思って俺はグラウンドに向かった。

練習の休憩時間に部屋に入るとそこにはチームメイトの官取がいた。

「官取、何してんだそんなところで？」

俺が話しかけると、

「いや、家のコックが持ってきてくれた飴をなめてたんだ」

「家のコック？お前って金持ちだったんだ」

「ああ、うん…まあね。そうだ、君もいるかい？」

「ああ、それじゃあ貰おうかな」

そういつて俺は官取から飴を一粒貰った。

特に普通の飴と変わりはないんだけどなあ…

おいしいのかな？

そう思って食べてみても特に普通に売られている飴と特に差異はなかった。

「ふーん、結構普通の飴と変わりはないんだな」

「そう？これ1粒1万円の飴んだけど…君には合わなかったかな…」

「い、1万円！？そう言われるとなんか急においしく感じられるよ」

うな…」

「ハハハ、調子がいい奴め」

「もし時間があったら今度官取の家に連れてってくれよ」

「まあ考えておくよ」

「おい、監督から集合かったぞ」

チームメイトの越後がやってきた。

「ああ、わかった、いまいくよ」

集合された理由は単なるノックをするためだった。

「おい、西園寺、そっちいったぞー！」

「こんなの取れないって！ああ、奥の茂みの方に行っちゃったよ…」

…先輩のノック強

すぎるんだよなあ……先輩！茂みの方に行ってしまったので取ってきます！」

「さっさと取ってこいよ！」

そういった会話をしてから俺は茂みの方に向かっていった。

そっして茂みに入った所で、俺は一人の女の子の声を聞いた。

「いったー…なんで急にボールが」

ボール？もしかして野球のボールか？いや待て、そもそもなぜここに女生徒？

ボールを探すついでに探してみるか。

ガサガサ。

するとそこにはボールを持った、緑色の髪の子がいた。

「あっ、やっぱり女の子だ！なんでここにいるんだよ…それにその手に持ってるのは

野球部のボールじゃないか！」

「あつやばい！見つかったよ！どうしよう…そ、そうだこのボールで！

テヤッ！」

「ちょ、おま、この近距離で全力でボールを投げるなあ！うわああっ！」

「あっ、またまたヤバイです！ボールで気絶させちゃいました！よし、逃げよう！」

あいつ、一体何なんだ…

「西園寺君、遅いでやんすよ！先輩がカンカンに怒ってるでやんす…って

どうしたでやんす、何があったでやんすか！」

「うーん…」

そのまま俺は保健室に行った。

桧垣先生に診てもらったところ、幸い打ち身程度だったようで、特に何もなかった。

なんでこうなったか聞かれたが、女生徒のことを言ったらややこしくなるから

言わなかった。

「にしても無事でよかったですねえ。」

「あ、はい、桧垣先生」

「そうだ、ちよつと飲んでほしい薬品があるんですが」

「なんですか？危ない薬品とかじゃないですよね…」

「何、単なる精神安定剤ですよ。少し効果を確かめたくて」

「まあいいですけど」

そして先生から渡された薬を飲んだ。

むう、特に何も変化はないけど…

まさかこれで超能力者とかにいきなりなったりしないかな？

「じゃあ俺はこれで失礼します」

ボタン

「彼は違ったようですね…」

保健室で何か聞こえたような気がしたけど、気にしないことにした。それより、あの女は一体何者だったんだろう？今度大江にでも聞い

てみようかな…

第5話 「夏の公式試合」

「いてて…」

先日のボールの痛みがまだ少し残ってる。

「あんな普通近距離でボールを投げるか？それよりあいつはあそこで何をしようとしてたんだ？」

まあ気にしてもしょうがないと思い、荷田君と二人で昼食を取りに食堂へ向かった。

こここの食堂のごはん上手いんだよな。

ただ、あの食堂のおばちゃんたまに無理やり食わせてくるけど。それでもやっぱりうまいもんはうまい。

「お、岩田と田島じゃないか」

「お前らも昼飯か？西園寺と荷田」

「むしろこの時間に食堂に来て他にすることがあるのか？」

「それもそうか」

他にも適当に話をしながら昼食を貰いに行く。

ちなみにここはセルフです。

「あとはお茶と箸をとって…これでよしと」

岩田の横に座る。

ふと、岩田のほうを向いてみると、そこには大量のごはんとおかずがあった。

いやいや待てよ、それ5人前はあるぞ!?

…こいつの腹の中ブラックホールにでもなってるんじゃないか。

「あれ、どうしたんだ? ご飯食わないのか?」

「あ、ああ。今から食べるよ」

一緒に食べてると、岩田が立ったので何かと思って見てみると、お
かわりしにいつてた。

(まだ食うのかよ!)

心の中で思った。こんな漫画みたいに食うやついるんだな…と。

「俺、すごい量たべるだろ?」

「そんなに食って昼から動けるのか?」

「うん。普段からこんなものだからね。けど、こんなに食っていつ
か身長が5m越したら

どうしよう…」

「ないない、ないからそんなの」

少し戦慄した。

もしそんな奴がいたら野球じゃなくボクサーとかになれよ。
ケンカだったら絶対まけないだろうなあ…

「ホントに? 身長めちゃくちゃでっかくなったりしない?」

「ああ、そんなことないからどんどん食え」

「うん」

遠くから聞いてた田島と荷田は思った。

「なんかアホっぽい会話だな……」

「そうでやんすね……」

「おい、全員集合！今から明日の試合のオーダーを発表する！」

「はい、監督！」

あ、そういえば明日は公式の試合だっけ。

まあどうせ一年生の俺たちは、あったとしてもベンチ入りがいいとこだろうけど。

そうこうしてる間に監督が選手を読み上げた。

「……！今読み上げたメンバーがスタメンだ！今からベンチ入りを

発表する！」

「来た…！入ってくれよ！」

「入ってくれ、でやんす！」

「…番！…！…番！…！」

くっ、なかなかよばれない…

「18番！越後！20番！田島！以上がベンチだ」

「なっ…」

「越後と田島に先を越されたでやんす！？」

「悪いな、西園寺。勉強では負けてても野球では負けないぜ！」

「そうはいつでも俺たちは18番と20番、なかなかでる機会はな
いと思うけどね」

「それでもベンチ入りはやっぱりすごいよ。次は俺たちも入ってや
る！」

「そうでやんす！」

もっと練習しなくちゃな…！

翌日。

「地方大会一回戦」

「俺たちはベンチに入っていないけど、一生懸命観客席で応援するぞ！」

「やんす！」

カキーン！カキーン！カキーン！

へえ、先輩達けっこうやるなあ…

「先輩達けっこうやるでやんすね！」

「え、あ、うん。そうだな」

俺の心の中でも覗いたのか？

そうこうしてる間に決着はついた。勿論こっちの圧勝だ。

「へえ、高校になったら地元の新聞記者もくるんだな」

「美人の女性に質問されてるでやんす！先輩たち羨ましいでやんす！」

「そこかよ」

取材が終わった先輩たちがこっちへ来た。

「ようお前ら」

「あ、キャプテン」

「しつかり俺たちのプレーを見ていたか？」

「もちろんです！」

（言わないと殴られるしな…）

「そうか。だけど応援が小さかったな。学校へ戻ったら即反省会だな」

スタスタ…

「…最悪でやんすね」

「…うん」

さらにその翌日。

俺の高校の野球人生はここから始まったのかも知れない。

く地方大会二回戦く

「よし！今日戦う相手は分かってるな？キャプテン」

「ウス、監督！」

「今日の相手はあの星英高校だ。去年にとんでもない投手が入部したが、

スピードが早いだけで、変化球は対して曲がらない。ビビらずバットを短く持って

行け！」

「ウス！」

観客席にて。

「おい、あれ天道じゃないか!？」

「ホントか!？官取!」

「ああ、西園寺。あれは天道だよ」

「地元にこんな奴がいたなんて…最悪でやんす」

「確かに…あんな奴がいたら俺たち甲子園に行けないかもな」

「うん…」

「何言ってるんだ、荷田、官取、岩田!」

「な、なんでやんすか!？」

「あいつは俺たちが三年間戦ってく相手だろ?弱気になってどうする!」

「そうだよなあ…うん、西園寺の言う通りだ」

(天道…中学では負けたが、高校ではお前を倒して見せる!)

「よし、打つぞ…相手はただの一年だ、ビビることはない」

「あ、飯占キャプテンが打つでやんすよ!」

「がんばれキャプテン!」

ビュッ！
ズバーン！

「な、なんて早さだ、152km！？こんなの打てるわけねえ…」

結果 親切0 - 2星英

星英ベンチにて

「おい、天道。お前5本もヒット打たれてるじゃないか」
「すみません監督」

「これからは頼むぞ。この学校のエースを背負ってくんだからな！」
「はい！」

「おい…お前ら。今日の試合。あれは一体何なんだ？」

「……………」

「おい、西園寺。お前から野球を抜いたら何が残る？…答えろ！」

「え、ええと…ごみであります！」

「よし、よくわかってるじゃねえか！なら、1、2年はグラウンド50周してこい！」

「はい！」

「3年はこれで引退だ。あとで締め言葉を頼む」

「はい」

「これで、飯占キャプテンともおさらばでやんすね」

「ああ、そうだな」

毎日殴られてたからなあ…やっと解放されると思うと涙がでてくるよ…

さて、次のキャプテンは誰になるのかね？

第6話 「真キャプテンは…」

「全員集合！」

監督の指示のもと、練習をしてた部員が一斉に集まる。

今日はあの負けた試合の日の後だ。

ついに次期キャプテンとか決まったのかな？

まさかいきなり俺とかじゃないよな？

「…西園寺君、それはないでやんすよ」

「か、顔に出てた！？」

「むしろ聞いて下さいって言うてるくらいの顔だったでやんす」

そ、そうか。俺ってそんなに顔に出やすいタイプだったのか。

「あ、監督の話が始まるぞ！」

「…話を逸らしたでやんすね」

うるせい。

「二年生はこれから甲子園を目指して頑張れ。俺たちは引退するが応援してるからな。」

一年はあの天道と三年間戦うことになる。苦しいだろうが負けるな。短い間だったが、いままで楽しかったぞ」

飯占元キャプテンが引退の言葉を告げた。
…中々いいことをいうなあ。

そして、それに次期キャプテンの基宗が答えた。

「はい！先輩の意思をしつかりと継ぎ、頑張ります！」
「よし、いい返事だ。…後は任せたぞ」

そういつて三年生は引退していった。

「よし、それじゃあ各自練習に戻れ！」
「ウス！」

各自練習に戻る。
それじゃ俺も練習に…ってん？

「どうしたんですか？基宗キャプテン？」
「いや、何。さっき監督にな、『キャプテンになったなら、新人の育成もやれ』と
言われてな。まずお前から育成もしようと思ってな」
「はあ…」

一体なんで俺なんだ？もしかして見込みがあるのか！？

…んな訳ないな。単に目についたからなんだろう。

「よし、じゃ始めるとするか」

「え、今からですか!？」

「ああ」

今から何するつもりだよ…監督に言われたのさっきじゃなかったのか？

キャプテンどんどん用具持ってきてるし…

あの人前からやりたくてウズウズしてたんだろうなあ。

うん、そうにちがいない。

きつとゲームにしたらマッドサインティストになるだろうな。

「どうした？始めるぞ」

「あ、はい」

「今からバットとグローブを渡す。俺がボールを投げるから赤い玉だったら打て。」

白い球なら捕るんだ」

「わかりました」

さて、と…あれは…白！

↓ 打つ

捕る

「おい、白の時はとるんだ!」

「す、すいません！」

さあ、気を取り直して……赤！

打つ

↓捕る

「おい、赤の時は打つんだ！」

「す、すいません！」

その後も何回か続いた。

「結果は……三十球中十八球！まだまだ練習をする必要があるな」

「今度は別のメニューをするんですか？」

「ああ、そうだな」

「後……ひとつ質問していいですか？」

「なんだ？」

「これ……役に立つんですか？試合中にバットとグローブ同時に持つこと無いですし……」

「……」

沈黙が続く。

まさか…この人なんにも考えてなかったのか！？

「西園寺」

「は、はい？」

「それを決めるのは俺じゃない。いつかはこれがきつと役に立つ日が来るだろう。」

だから今日の感覚を忘れるんじゃないぞ」

「は、はあ…」

「それじゃあな」

スタスタ…

本当になんにも考えてなかったようだ。

しょうがない、俺もそろそろ寮に戻ろっかな…ん？あれは？

ブンッ！ブンッ！

「ん？どうした？西園寺。俺の素振りなんか見て楽しいのか？」

「いや、そういう訳じゃないけど。もうそろそろ練習の時間終わいだぞ、越後」

「俺はもう少し練習するぜ。早く上手になりたいからな。どうだ？一緒にやらないか？」

「うーん…」

正直疲れてるけど…こっぴつところで頑張ってるからこいつは野球うまいのかな。

「俺もやらせてもらっつよ。早く上手になりたいからな。」
「やれやれだぜ」

「なんで俺今やれやれって言われたんだ？」

「まあ、いいからやろうぜ」

なんなんだか…

今、俺はマウンドに立っている。

俺は球を投げる。越後がバットを振る。そのバットは球の少し下を
行き、空を振った。

なぜこういうことになってるかという、始まりは越後のこの言葉
だった。

「俺と一打席勝負しないか？」

この言葉に俺はYESと答え、コイツと勝負することになった。
俺は二球目を投げる。球は大きく外にいった。

（やっぱりこれくらいじゃ振ってくれないか…）

俺の持ち球は140km前半のストレートとスライダー、決め球のカーブだ。

正直に言つと、中学の時に他の学校から推薦が来ていて、投球には自信がある。

推薦蹴つて、この親切学校にはいったんだけど。

1ストライク1ボール…

俺は三球目を投げる。今までのストレートとは違い、少しスピードを緩めたカーブだ。

「くっ…」

越後はタイミングがずれたようで、またもバットは空を振った。

「さすがだな、西園寺！けど！勝つのは俺だ！」

四球目、五球目と投げる、が全てストライクゾーンには入らなかった。

2ストライク3ボール…！

「これでラストだな…越後！」

投げる。もちろん、ど真ん中直球だ。越後はそれを捉えた。

が、当たり所が悪かったようだ。

打った球は真上に飛んで、落ちてきた。

「キャッチャーフライ（捕飛）だな。この勝負はお前の勝ちか…やれやれだぜ。俺ももっと練習しなくちな」

「勝ったからボテチくらいは奢ってくれよ？」

「う…やれやれだぜ」

購買に行ったらポテチが売り切れてた。

越後が代わりに買ってきたお菓子は非常に辛いお菓子だった。

あいつは目をつぶって買ってたから選んで買ったわけじゃ無いんだが…

俺が辛いのが苦手と知っていたのか？嫌がらせだろこれ…

あのお菓子は岩田にあげた。そしたらいきなり一気食いました。すげえ。

第7話 「緑の髪の女の子」トラブルメーカー？」

今、俺は屋上に向かって歩いている。

あそこは人が来ないし、風も気持ちいいし、休むのにうってつけなんだよなあ。

今日は基宗さんがキャプテンになってから数日後だ。

「はあ…疲れた……ん？前も言ってなかったか？」

そして、ここに来てまずやることは一つ。あの人影いたりしないかな…と見ることだ。

「いたよ！」

あの森の人影は緑色の髪の女子だったのか…
ん、どんだん森の奥に進んでいくな。今日は練習休みだし…ついていってみるか。

「では、いつてきますよ」

ガチャガチャ、ボタン

ふうん。この森の奥に旧校舎があったのか。

アイツはこの旧校舎の裏にある扉を通して出て行っちゃったけど…

「たぶんこれ、外につながってるだろうなあ…確かめてみるか」

扉のドアノブに手をかけて、回す。

あ、あれ？回らないぞ？

「これ、カギかかっている！？」

え、じゃあアイツどうやってここ通ったんだ？

まさか、この学校の理事長の娘で、このカギを持っていたとか…
いや、それだったら正門からでるか。

「どうしようか…」

けどまあ、アイツも長くても3時間くらいで帰ってくるよな。

個人的にはボールの恨みもあるから、この扉を開かないようにして
封印して

やりたいけど…

それじゃこの扉をどうやって開けたとか聞けないし、何だか面白そうだ。

「ふいゝ、疲れたよゝ。今回はちょっと遠出だったから、帰ってくるのにもひと苦労ですよ。けど今回は大量に買ってきました！これならしばらく町にいかなくてもいいでしょう！」

「おい……」

「え、え、誰！？」

「いったい何時間待ったと思ってる！もう夕方だぞ。帰ってくるのが遅いんじゃないか？」

「……」

「にしても、このドアの鍵をお前なんで持ってるんだ？そこらへん……ん？」

「これとこの荷物を持って、そこに立って」

「こ、こっか？」

カシャリ

カメラで撮られた。

「え？」

「はい、証拠写真。これであなとも共犯者ですよ」

ちよ、おま！？しかもドアの位置がいつの間にか俺の後ろに！？

「私の写真は無いのでむしろ首謀者として扱われるかも」

「ひ、ひでえ」

「では、手に持ったものを返してちょ」

「は、はい」

「私は高^{たかしな}科 奈^{なあ}桜。皆からはナオって呼ばれてます。あなたは？」

「西園寺…」

「西園寺君ですね、覚えましたよ！よろしくね！」

「あ、ああ」

「じゃあ、失礼しまっす！」

スタスタ…

も、もしかして俺はとんでもないやつと知り合いになってしまった
んではないのか？

よろしくって、何なんだ？何をだ？

……………

「もついい、帰ろっ…」

「はあ……」

「どうしたんでやんすか？」

「いや、少し前になんかともないやつと知り合いになってしまったんだ」

「それって誰でやんす？越後でやんすか？」

「いや、越後もともないけど、越後じゃないよ」

「ま、いいかでやんす。それじゃあ先にグラウンドに行ってるでやんすよ」

「ああ」

ホントにあいつはなんだったんだ？今度また問いたださなくちゃならないな。

会えただけど。

「西園寺、先に行ってるぜ！」

「ああ、越後」

「西園寺、先に行つとくぞ！」

「ああ、田島」

なんでみんな俺に声をかけるんだ？

「西園寺君！先に行つてますよ！」

「分かった、つてちよつと待て！」

ガシッ

「アウツ！」

「高科、なんでお前がここにいるんだ？」

「ここは廊下ですよ。生徒がいても問題はありませんです」

「いや、問題だらけだからな。女子生徒がここにいるのはおかしいからな」

「いやゝ、堂々としてればバレないもんだねえゝ」

なんでこいつバレないんだ？

「それはそうと、なんでここにいるんだ？」

「男子校舎の中は女子生徒も興味津津ですからね。そんな彼女達に真実を提供するため、

正々堂々こつそり忍びこんでるわけですよ」

「正々堂々と、こつそりつて言葉は普通同時に使わないからな」

「それで、西園寺君は私の味方ですか？それとも敵ですか？

いや、敵にきまつてるだろ。

「俺がトラブルメーカーの味方をしたところで何か俺に得があるのか？」

「むむっ敵なんだ！ならばここはあなたにも共犯になってもらう必要があります！」

はっ？

ガシッ！

「おい、俺は練習があるんだ！離せ！」

「いえいえ、こんな面白い事は他人と共有しなくてはいいけませんから」

「お前は何をいつているんだ！？」

スタタタタタ…

やばい、練習に遅れてしまう…あ、あれは大河内先生！

「おい、お前ら廊下を走る…女子生徒？そこの二人止まれ！」

スタタタタタ…

「そんなこと言われて止まる西園寺ではないのですよ！」

「俺の名前を出すな！」

「なに、西園寺だと！」

「違います、先生誤解です！」

本気でやばいと思いながら高科を見ると…ワックスを持っていた。

「ワックスアタック！」

「うわ、こいつワックスぶちまけやがった！」

「ぐわっ！」

ツルッ！

「せ、先生えー！」

「あははははははは！」

「笑ってる場合じゃない！俺を巻き添えにするな！」

「あははははははは！次行ってみよー！」

「行くなあー！」

もちろんこの後怒られました。なぜか俺だけ。高科は逃げ切った。
くそ…あいつめ…今度会ったら覚えてろよ！

第8話 「どうも場所がころころ変わるから題名付けにくい」

「おい、西園寺」

「はい、何ですか監督？」

「少し他の学校に行って偵察にいつてくれ」

「はい、分かりました。」

ということで、俺は今、荷田君と他の学校の偵察に行っている。
もちろん偵察というのは、相手の野球部のエースとかの弱点を探ったりすることだ。

「ホントにバスで片道1時間は長いでやんすね」

「ここって交通は不便だよな」

どうでもいい話をしながら他の学校を見学しに行く。
にしても久しぶりに外に出て見たら全く知らない製品とかニュースが流れてる。

…たったの数カ月で町って変わるんだなあ。

「おお、これは最新版のアニメのフィギュアでやんす！早速買っでやんす！」

「…」

荷田君は楽しそうだ。

近くの栽培高校や、タクシー高校などの情報を分析する。

けっこうめんどくさいな。

にしてもタクシー高校か。レーシングの授業とかあるみたいだけど、なんか楽しそうだな。

「おいらもやってみたいでやんす！」

どうやらやっぱり俺は考えてることが顔に出やすいようだ。
…いや、むしろあっちの洞察眼がおかしいのか？

「とりあえず一通りの学校の偵察終わったな」

「おいら、少し買いたいものがあるから少し寄っていいでやんすか？」

「だめだよ、一本バスに乗るのが遅れたら次のバスまで時間かかるから」

「仕方ないでやんすね…ん？奥から来るのは…天道じゃないでやんすか？」

確かに天道だ。しかも彼女を連れている。なんともムカツクやつだ。

「…よう」

「うん？誰、君たち？」

「…お前の敵だ。前戦った親切高校の生徒だよ」

「覚えてないなあ。最近結構試合したし」

「俺は試合に出てなかったからな。俺は西園寺 卓弥だ、覚えておけ！」

「そんなライバル宣言されても。俺そういう事何回もされてるからいちいち覚えられないんだよ。」

「ねえ、天道君。もういきましょ？」

「ああ、そうだな若菜。それじゃまたいつか、新月高校の人！」

スタスタ…

「…新月高校じゃなくて親切高校でやんす。隣にいたのは彼女でやんすよね？羨ましいでやんす…」

「あいつ、甲子園に出るのにデートとほいい御身分だな」

「ホントでやんす！」

そうして、俺達はまた歩き出す。

まあ、そうしてバスに乗ったんだけど…

「なんでお前がここにいるんだよ！」
「まあまあ、いいじゃないですか。ナオっちも少し外に出てたんですよ」

高科の奴と一緒に乗ってやがった。

「そういえば、お前ってなんであそこの鍵を持ってるんだ？」

「あそこってあの旧校舎の扉のことですか？」

「うん。やっぱりあそこ旧校舎だったのか…」

「まあ旧校舎のことはまた次回話すとしてですね、あの扉はナオっちが偶然見つけた物なんです。」

「偶然？」

こ、こいつ偶然であんな扉を見つけたのか。なんとも運がいい奴…あれ？それでもあの鍵のことは説明がつかないぞ？

「うん。あの扉は偶然見つけたんですよ。扉の鍵が腐ってて普通に通れたので、
ナオっちが新しく鍵をつけなおしました。」

「つけないおした？」

「そうです。自作ですよ？『工作が上手いんだな、ナオ』って言うてくれてもいいですよ」

「言つつもりはないが、つまりあの扉は高科専用ってことなんだな？」

「相棒が使いたいたっていうなら貸してあげてもいいですよ」
「誰が相棒だ…」

勝手にこんなトラブルメーカーの相棒にされてたまるか。

「まあ確かに使ったら退部にされそうですね！」

「なぜ喜びながら言う？そういえばお前は何部なんだ？」

「私ですか？私は新聞部です」

新聞？ここって運動部じゃないといけないはずじゃ…
そのことを指摘すると、

「そんなことはどうにだってなるんですよ！」

堂々と言われた。

まあ、そつこつ言ってるうちについたので、高科と別れた。

数日後。

「夏の甲子園一回戦、星英高校勝ちました！」

テレビです。

「ちつ、やっぱあいつ強えな」

「そりゃそうでやんす。あつちは超高校生球のピッチャーでやんすからね」

官取と荷田が話す。

あいつ…そのまま甲子園優勝とかしないよな？

「そういえば高科、お前天道相手にライバル宣言したんだろ？」

「え、田島、誰からそれを？」

「おいらでやんす！」

荷田君……口軽いな。

「当たり前だろ！あつちが超高校生だからと言って、相手は同じ人間なんだ。戦う前から」

ビビってどうする!」

「…すげえなお前。けど、お前の言うことはもっともだ。よし、俺も今日から

天道のライバルだ!」

「俺も俺も!」

「田島に越後…」

(なんか俺が天道に認められたライバルってことになってるけど…まあいいか)

部屋にて。

「ハア」

「どうしたの、荷田君?」

「いや、一回外に出るといろいろと買いたいものが増えるでやんす」
「例えば?」

「この本を見てくれでやんす」

そっいつて本を見せられた。

「あ、これは知ってるぞ！ガンダーロボだろ？あれ、けど、なんか少しちがくないか？」

「これはガンダーロボはガンダーロボでやんすけど、ダイナミックガンダーロボなんで

やんす！」

「だ、だいなみつくガンダーロボ？」

「そうでやんす！普通のガンダーロボと違ってまず~~~~」

「わ、分かったから！ほ、他には？他には欲しいものないの？」

「うーん、後欲しいものでやんすか…あ、ウダマニユラでやんす！」

「ウダマニユラ？」

なんだそれ。それは始めて聞いたぞ？

「ウダマニユラっていうのは、~~~~~」

「も、もう分かった、分かったから勘弁してくれ！」

「なんだ、もういいんでやんすか？こっからが楽しいところなのに

…」

「お、俺は別に楽しくないんだが…」

「そうでやんすか？まあもうちょっとくらい話につきあってくれ、でやんす」

「へ！？」

ダレカタステクレー！！！！

第9話 「大江と神条」

特にやることがないから森をうろついてみることにした。

ホントはここで自主練習とかやるべきなんだろうけど、なんかやる気になれないしなあ。

「うん、空気がおいしい」

学校の中といえ、ここは森。

空気がおいしいことに変わりはない。

最近は高科のやつに振りまわされていたからな。

「あいつ狙ってやってるんじゃないか？」

気のせいだろうとは思っけど数が数。

バスの中で会えば、男子校舎の中でも会う。

あれ以外にもなぜかあいつは野球部の部室で会ったりした。

しかも今の所100%の確率で最後に大河内先生が来ることになる。

「トラブルメーカーが自分でトラブルを引き寄せてどうするんだか」

そういえばここら辺って大江のいた場所の近くだったな。

ちょっと寄ってみてもいいかな…いるかどうか分からないけど。

テクテク…

「？」

おかしい、急に警備犬がなくなつたぞ？

「キャウン、キャウン！」

！

犬の鳴き声だ！

何事かと思い、鳴き声のした所に向かうと、

「おまえ新入りやろ？まだウチに向かつてくるのは100年早いわ
！」

犬の足を持っている大江と、足を持たれて空中で宙ぶらりんになつ
てる犬がいた。

そして大江と目があった。

「……」

「……」

「キャウン！」

どうしよう。

ものすごく気まずい。こんな時どうすればいいんだ？

親や学校からこんな時どうしろと習わなかったぞ。

おい、学校。これからちゃんとこつという時の対応法を教えろ。

「や、やあ大江。ご機嫌麗しゅう…」

「あ、あはは…」

「キャウン！」

「と、とりあえずその犬を、離したら、どう、ですか？」

なんか敬語になってしまった。

「あ、う、うん」

パッ

急いで犬が逃げる。さすがにあれは警備犬も逃げるな…

「お前、普段からこんなことしてるのか？」

「いや、そういうわけじゃないんやけど…」

「ふーん…」

「そ、それはそうと、今日はここに何しに来たん？まさかウチに会いに来てくれたん？」

「まあそういうことにしておくよ」

「あはは、嘘でもいつてくれるとうれしいなあ。けど、そんなこと言ったら彼女悲しむで？」

「俺彼女いないんだけど」

いたら他の人に自慢してるし。

「えーっ、いないん？なんだ、いると思ったわ」

「どこをどうみてそう思ったんだ？」

「いや、なんとなくやけど…なんかいそうやったから」

彼女いない歴〃年齢ツス。

「で、ここにきてくれたのはいいけど、なにもすることないで？」

「いや、単に空気とか吸いに來ただけだから」

「あ、そうなん？まあ確かに空気はおいしいけど…警備員さんとか見つかるリスクとか

考えてないん？」

「そいう訳じゃないんだけどな」

まあ確かにここにくるまでに何回も見つかりかけたけど。

「それに、ウチ、実はな。いつもここに來てることばれてて、た
まに自治会が
やってくんねん」

「自治会？」

「あれ、あんた知らんのか？」

「教室にいるときはほとんど寝てて聞いてないんだ」

「まあ、簡単にいうと、風紀の取り締まりっちゅーことやな」

そんなのがいたのか。

「そいつらは普段白い制服着てるから…分かった？」

ああ、あいつらか。あのいちいちいろんなことに注意してくる奴ら

か。

あいつらうざくて一回けりたくなっただけど…そういうことか。
ん？あれも自治会の奴らかな？

「なあ、大江？」

「ん、なんや？」

「あれ自治会じゃないのか？」

「ん…！あれ紫杏やないか！あんた、あっちで隠れとき！」

「お、おう」

急いで隠れる。紫杏？いったいどんなやつなんだ？

スタスタ…

「や、やあ紫杏」

「またいるのかカズ。あんまりここに来るなといってるだろう」

あいつカズって呼ばれているんだな。

「でも校舎で身体振りまわしたら怒られるし…」

「それは絶対やらないといけないのか？」

「いや、そうじゃないんやけどさ…」

「まあいい。それよりさつき男子生徒がここにまぎれていなかったか？」

「い、いや、気のせいちゃうん？」

「そうか、それならいいんだ。それじゃあ私はもういくぞ。あと、
その男子生徒。」

お前もあんまりここに来るんじゃない。たまたま見逃してるが、次
はないぞ」

バレてんのかい。

「紫杏行つたからもう出てきてもいいと思うで？」

「…見つかったたからあんまし意味無いと思うけどな」

「けど顔はハッキリと見られてないから、まだいいんじゃない？」

そ、そういうものか？ハッキリ見られなかったらセーフって…

「とりあえずあの紫杏ってやつは何者なんだ？」

「紫杏のこと？アイツは生徒会のトップやつとるんや。男女で校舎が別れてるから、

女子の生徒会トップってことになるな。ウチらと同じ一年や。あ、
そういえばアンタに

まだ私のこと一年って言ってなかったっけ？」

そういえば言ってなかったな。雰囲気でだいたい分かったけど。

この身長を生かしてバスケットかバレーすればいいのに。

いや、すでにもう勧誘されて入ってるか？

「それで、本名は神奈^{しんじょう} 紫杏^{しあん}。私の数少ない友達や」

「お前あんな堅物そうなのが友達なのか。見た目でいったらアイツの方が友達少なさそ

うな気がするけどな！」

「それ、私の前で言うか？実はウチ、そんな氣い長い方じゃないね

んで？」

「す、すまん」

こええ、こええよ。武術やってて185cm、そんな奴の脅しは怖すぎる。

「まあええけどな。紫杏が生徒会に入った時、作業をするときに力仕事をする人がいないのに気づいたらしいんや。それまでは先生がやっててくれたらしいんやけど、それじゃダメだと紫杏が言ったらしくて、私が手伝うことになったんや」

「その時に仲良くなった、って事だな」

「いや、その前から森で知り合ってたはいた」

「で、生徒会の関係で仲良くなった、と」

「そういうこと」

森での出会いから発達した友情：なんだそりや。

「あと、お前ってそんなに友達少ないの？こうして話してる分にはそんな友達が少ないように思えないんだが」

「いやあ、この身長といつもはっちゃけてるせいかな、あんまり女子とは仲良うなくて。」

でも、男子とはホントは話すの苦手なんや」

そうなのか？こうして話していると普通に見えるんだが…

実はホントの一番の友達は警備犬…ゲフンゲフン、こんなこと考えてるのがバレたら

大変なことになりそうだからやめておこう。

「で、なんで男子が苦手なんだ？」

「え…それ言わなくちゃあかん？」

「いや、別に言いたくなかったらいいんだけどな。ただの好奇心だよ」

「好奇心は猫を殺すって言葉、知らんの？」

「そこで使う言葉なのか、それ！？」

え、なに、俺殺されるの？ゆっくりしんでいってね、ってことなの！？俺！？

「まあそれは冗談としてな」

「冗談にしてはタチが悪いぞ…」

「ならアメリカンジョーク」

「言葉を換えても意味が変わらなかつたら一緒だろ！」

「まあええからええから。実はウチ、昔武装した高校生数人に襲われたことがあるんや。」

生意気だからって。それで大怪我して、一年間入院。これでも、あんたより一年上なんやで？」

「そ、そんなことがあったのか…」

きつと中学生で女不良集団のトップとかだったんだろうな。うん、そうにちがいない。

「あ、いつとくけどウチが小6の頃の話やからな？」

「…」

ちよ、ちよっとこいつに対する考え方を改めないといけないようだ。そんなに怖いやつだったのか。まあ…普通に話してる時はただの面

白いやつなんだけど。

「あ、それじゃあウチ桧垣先生に呼ばれてたから行くわ」

「え、桧垣先生って男子の方の先生なのか？」

「さすがに先生は男女共通やから…」

「そうだったのか…」

「それじゃあ、ウチもついてくわ」

「ああ」

桧垣先生ねえ…ん？なんで怪我もしてない大江が呼ばれるんだ？
やっぱり超能力者…そんなことはないな。

第10話 「記者」

今日も森にやってきた。

昨日、大江と別れるときに「明日はウチここにおらんで」と、言っていたので、

俺が森をうろつく理由は別にある。

それじゃあなんで俺が森をうろついているのか。

もちろん女子寮…ではなく、外に出るためだ。中じゃ暇なので。

テクテク…

獣道を歩く。しばらく歩くと、壁が見えた。

「うわ、やっぱり高いか…」

壁にたどりついた俺は、その壁を見上げた。

うん、やっぱり高いな。3mは軽くあるかな？

…え？なんで高科の作った扉を使わないか、だって？

や、なんか女子が作った物を使ったら男子として負けかなと。

やっぱり自分の力でやらなくちゃね。

で、まあ本題に戻るけど、ロープとかいろいろ持ってきたから、なんとか登れそうだけど…

ああ、なんとかいけそうだ。

……

「おお、外に出れたぞ！」

まあ実際こんなことしなくても偵察とかで外出はできるけど。
今回は完璧フリーだからな。

おっと、大声を出したらせつかく出れたのに警備員さんに見つかってしまふな。

一応、周りを見て…

「……………」

「……………」

やばい。外国人っぽい方にめちゃくちや見られてる。

俺英語の成績1なんだけど。ちなみに学年最下位から2番目。最下位は越後。

「…もしもし、アナタ、この学校の生徒ですか？」

「あ、はい…」

よかった、日本語喋れるんだ。しかも発音も上手いし。

「Wow！これはラッキーです。私、フリーの記者で、竹内ミナ、います。」

この学校を調べたくて、ここに来たんですが…入らせてくれなくて困ってたんです。

…協力してくれますか？」

こゝ、こういう時協力しなかったらマズくなるような…
けど、こういうときって法律的に大丈夫なのか？

「車で町まで送ってあげますよ？」

「よろこんで」

移動手段は必要だもんね。

え、法律？なにそれ、おいしいの？

「それじゃあこの車に乗って下さい」

「はい」

「とりあえず、名前を聞かせてくれますか？」

「名前？まさか直接本に載せたりしませんよね？」

「まさか。呼ぶ時にアナタ、じゃ困るからですよ」

「別に俺はそれでいいですが…それに、もしミーナさんが悪い人だ
つたら」

「私、悪い人にみえますか？」

いや、全く見えないけど。むしろ天然って感じがするな。いや、猫を被ってるだけとか？

「まあ、いいか。俺は西園寺 卓弥。親切高校一年です」

「それじゃあ一つだけ質問します。…あ、簡単な質問ですよ？」

「え、一つ？」

「ハイ」

一体この人は何しに来たんだ？…たったのひとつで意味あるのかな？それに俺が答えられるかどうか分からないのに。

「この学校をどう思いますか？」

ずいぶんとアバウトだな。

「ずいぶんとアバウトですね」

おっと、声に出してしまった。

「なら、もう少し具体的に。この学校での生活は楽しいですか？もし、困ってることが

あったら聞かせて下さい」

田島の暗い顔や、越後のあた…ゲフンゲフン、うん、学校のことだつたな。

「特には無いですけど…」

「本当にですか？」

な、なんかこう、本当に？って言われたら怖いな。

「い、いや…あ、そうだ！交通の便が悪いのと、情報が外から中々入ってこないことが
ちよつと」

「それだけですか？」

ま、まだ！？

「ま、まあこれくらいです」

「そうですか、ご協力感謝します」

「そ、それだけでいいんですか？」

「ハイ」

なんだ、もっと学校の細かいところまで聞かれると思ったんだけど。

「そういえば、なんでこの親切高校のことを取材してるんですか？」

「取材、とは違うんですけれど、実は事件がありまして」

「じ、事件！？」

そんなのあったっけ？

もしあったら、俺ら知らされてるんじゃないのか？

「まあ、時間が少ないので細かいことは言えませんが…この学校、
おかしい、思いま
せんか？」

「え、どこが？」

特に不自由はないんだが。あ、男子寮と女子寮が別々になると

ことか？

「気づきませんか…さっき、情報量が少ない、言っていましたよね？」

「あ、はい」

「実は情報が外に来るのも少ないんです。確かに、学校のホームページや、政府に送っている情報は正しいんですが…必要最低限のものしか送ってないんです」

そ、それって…どういうことだ？

分数のかけ算が理解できない俺にとって、これは理解しにくいぞ。

「だから私が一部調べたんですが、この学校、内部におかしい空間があるんですよ。」

しかも、普通は行けないような所に。」

「……」

「しかもこの学校、町と遠いせいであまり政府は関与せず、ヘリや船までこれるよう

海岸も近くにあったりする。最近はおオガミとジャジメントという会社が戦争とか

しています、この学校はそれに関与してる可能性があるんです」

えつと…どういうことだ？

「そののせいかどうかは分かりませんが、実は5年前位にここで行方不明者がでてるん

です。できればその人たちのリストとかも欲しいんですけど…西園寺さん、頼めますか？

そういう所には間違いなくそういったリストがあるんです」

「お、俺！？…はい、出来る限りのことならまあ手伝います」

なんの話がよく聞いてなかったが。

「そうですか。おっとそろそろここらへんでおろしておきましょう。それじゃ、

また後日そちらへ伺います」

「分かりました」

そう言つて、俺は車を降りた。

…何の話か分からないけど、まあここ最近の生徒のリストをもらえばいいんだな？

ま、それより今は、

「遊ぶぞー！ーっ！！」

寮に帰った後、たまたまゲットしたガンダーロボのフィギュアを荷田君にあげたら
めちゃくちゃ喜んでた。お礼に200ペラくれた。そんなにいいも

の
だ
っ
た
の
か
な
？

補足1

（補足）

きつと原作とは違うかもしれないけど、そこはあしからず。

野球部関係

主人公…野球の腕はそこそこあるヤツ。ただ、高校に入ってからゲームをする人の手腕しだい。とにかく頭が悪い。高校生で因数分解が出来ない。

荷田君…野球部の中では頭がいい方。学年でみると平均的。メガネをかけていて、主人公とても仲がいい。あと忘れてはいけないうのが非常にマニア。

越後……野球部の中で一番バカ。学年でも一番バカ。どうやって入試に合格したかは謎。なぜか野球のルールは細かいとこまで覚えている。野球センスは素晴らしい。やれやれだぜ が口癖。

田島……顔が暗い。頭はいい。野球は上手い。…それくらいしか印象がないなあ。

岩田……いつも腹をすかせている、大きくて馬鹿なヤツ。食べ物をくれる人には誰にでもついていく。パワーがあるから野球では頼りになる。

官取……嘘つき。学力は普通。いかげん学力で判断するのやめようかな。嘘つきというか、ほら吹き。ただ、努力家ではあるので実力はある。ていうか一粒一万円の飴ってなんなんだよ…

北乃……先輩1。実家は相当金持ち。ゲーム中ではいろいろ邪魔してくる。布団には落書きするわ、缶を投げってくるわ…、とにかくうざい。

基宗……先輩2。主人公で色々実験してくる。ほんとやめてほしいぜ…

飯占……先輩3。元キャプテン。名前が「いいじめ」だからどんな性格かは解るはず。

補足2

補足2

第九話までの出てきたキャラまとめ。

主人公…補足1を読め

荷田…補足1を読め

越後…補足1（ry

岩田…（ry

田島、かんど（ry

先輩方（ry

大河内先生…30代後半くらいの熱血教師。主人公たちのことをよく見てくれる人気のある教師。主人公たちの担任でもある。

車坂監督…→と同じくらいの年なのに、こっちは40後半に見えるルックス。老けてる。相当熱血。

母…主人公の母。…それ以外に説明欲しい？

桧垣先生…変な髪の水の形をした変人。全てを科学的にみる。恋も

科学的に調べた。他にもいろいろやったがまだ言うことができない。

大江 和那…槍が大好きで、ケンカしたら大の男3人くらいには勝てる。3年生には身長が伸びて、190になっちゃうよ。ちなみにパワポケ10以降の作品では普通の軍隊にに勝てるほど強くなっている。

神条 紫杏…頭も賢く、判断力もあるが、予想外の事態には弱い。このようなことから大物になるのだが…俺の作品ではどうなることやら。登場回数がふえたらいいね。しあーんで調べると結構件数がある。

高科 奈桜…スーパートラブルメーカー。自分でトラブルを作り、引き寄せる。常に落ち着きが無く、好奇心を携帯してる。緑色の髪だが、パワポケでは普通。結構俺の好きなキャラ。こいつの登場回数は増えるだろう。にしても名前読みづらいよね。最初何て読むかわからなかった。

食堂のおばちゃん…登場回数はたぶんこの作品では1回だけ。

天道…超高校生級の最強ピッチャー。最高球速Max162キロ。それ、日本最高記録じゃないの？監督は変化球は曲がない、とか言っても、3球種も投げれるから。そもそも打撃センスだけでもヤバイから。本名は天道^{テンドウ}翔馬^{ショウマ}。

→の彼女…本名は御室^{みむろ}若菜^{わかな}。かなりの美形。今の所はこの説明だけでいいや。

第11話 「俺と悪夢の練習」

とりあえず、ミーナさんは生徒のリストがほしいって言ってたけど…
一体どうしたらいいか俺には見当がつかないな。
校長にでも頼んでみるか？まあ無理だろうけど。

「おい、西園寺。練習行こうぜ」

「ああ分かった。今行くよ」

またあとで考えるか。別に今じゃなくてもいいわけだし。

「あの…」

「ん、何だ？」

「またあの練習をやるんですか？」

「いや、やる内容は別だ」

また俺はキャプテンと一緒に練習をする羽目になっている。

……今度はちゃんと考えているよな？

「今回は他の学校の練習メニューを参考にしてみた」

「あ、それなら大丈夫ですね」

「ああ、ぬかりはない」

なんだ、まともそうじゃないか。

前言撤回。どうしてこうなった。

まず、手首におもりが入ったリストバンド。

足にタイヤをつけて手にいろいろ持たされている。

「それからうさぎ跳びでグラウンドを回るんだ」

「本気で言ってますか」

「あたりまえだろう」

本気で何考えてんだ。

「あの……これって本当に他の学校の奴を参考にしたんですよね？」

「ああ、もちろんだ。まあ一部はそのまま採用させてもらったがな全部だろ。これ絶対全部だろ。とりあえずやるしかないのかなあ……ってなんか音が聞こえないか？」

グルルルルル……

この森でよく聞くまるで警備犬のような声……

「あと、俺のアレンジも1つ加えさせてもらったぞ」

「ま、間違はなく先輩のアレンジってあれですよ？」

「さあ、知らんな。それじゃ始めるぞ」

「え、ちょ、知らんって！それに始めるっていわれてもまだ準備が」

「もう犬が追いかけてきてるが？」

こ、こんなの――

「無理だああああー！」

「あ、こら！ちゃんとうさぎ跳びで、持ってる物を離すな！」

むちゃを言っな！あ、もう犬がそこに……

「少しお前には厳しかったか」

「あんなの誰にでも無理ですよ」

「そうか？越後あたりなら普通にこなしそうだが」

俺と越後をいっしょにするな。

それに越後でも無理だろう。無論、頭腦的な意味で。

「それじゃあ、こっちの練習法も試しておくか」

「え、まだあつたんですか？」

（この人ホントに暇人なんだなあ…）

「キャプテン、西園寺君がキャプテンのことを暇人だと思ってるでやんす！」

「わあ、荷田君一体どこから来たんだ！」

「……荷田、それは本当か？」

「本当でやんす！オイラは西園寺君の考えてることが分かるんでやんす！」

「西園寺……」

「そんなことは考えてません！荷田君が勝手に言っってきたるだけです！」

思っではいたけどさ…そんなこと言えるわけないだろう。

「なら確かめるか。ここに。× □ が書かれているカードがある。西園寺に引いてもらうから荷田は何を引いたか当ててくれ」

「分かりました！でやんす」

いや、さすがに荷田君でも無理だろ。しかもだんだん練習関係なくなってるし……

まあいいか、これを引いて……あれ？「？」？

（キャプテ——）

（言っなよ？）

？て。なんかせこくないか？こんなの分かるわけ…

「キャプテンもひどいでやんすね。ひいたのは？のカードでやんす！」

「ほう、俺がよく他のカードを渡したことに気づいたな」

「相手が西園寺君でやんすからね」

結果：俺の弱点〃荷田君。

「つまり西園寺は俺を暇人と思っていたわけだな？」

「うつ！そ、それはそうかもしれないですけど……そうだ！早く新しい練習を

試しましょう！」

「話を逸らしたな」

「話を逸らしたでやんすね」

グッ……

「それじゃあおいらは練習にもどるでやんす」

「ああ、しかつりやれよ。……西園寺」

「は、はいっ！」

「さっきの件は後で話そう。それじゃあ次の練習はこのイヤホンをつけてくれ。」

「これですか？」

得になんにも聞こえないぞ？いや、なにか聞こえて――

（お前は野球が上手くなる）

（お前は野球がとても上手くなる）

な、なんだ？一体何なんだこれは？

（お前の周りはライバルだ！）

（お前は野球の練習がしたくなる！）

や、やばい。半分洗脳じゃないのかこれ！？

（お前は〜）

（お前は〜）

（お前は〜！）

（お前は〜！）

こ、これ以上はマズイ！

そう思っただけはイヤホンをはずした。

「あ、まだ終わっていないのにイヤホンをはずしてはダメだろ」

「これって洗脳じゃないですか！」

「何言ってる。これは俺が考えた練習法、催眠式の気合注入法だ」
「催眠式の時点でダメじゃないですか」

なんでこの人はこういうことしかできないんだろうか…

もつとまともな練習は考えれないのか？

「とりあえず今日はもう帰りますよ！疲れたし」

「ああ、練習はもう終わっていいぞ。練習はな」

「練習は？」

「そうだ。次はなぜお前が俺を暇人と思っていたかを小1時間聞く必要がある。」

「さあこい」

え、ちょっと……やっぱ怒られることになるのか……

薄暗い部屋の中、キャプテンと二人きりで話をした。とても怖かった。

第12話 「屋上での出来事」

「さてと。屋上に行ってみるか」

最近俺は屋上に行つて身体を休めることが日課となっている。
なんてつたつて風が気持ちいいし……ん？

「また高科のやつ来てるのか」

どれ、ちょっと会いに行つてやるか。
別に暇だし。

「つて、あれ？」

アイツどこ行つた？少し目を離れたすきに……

「誰かをお探ですか？」

「ああ。常にカメラとトラブルを携帯していて、落ち着きのない女の子を探して

いるんだ。しかも男子校舎で、だ」

「そんな人居るわけじゃないですか。少し熱でもあるんじゃないんですか？」

「目の前にいるだろっ！お前だお前！」

「私の場合は＋好奇心ですよ」

あ、トラブルを常に携帯してることは認めるのか。
にしても、こいつどうやってここに来たんだ？
さっきまで下にいたのものすごく速いな。

「ふっふっふ。ナオっちがここにこんなに速くきたことにびっくりしてるかもしれない」

「ませんが、ナオっちの隠密術をなめてはいけませんよ」

「なんでだ？」

「実は昔に出会ったプロの情報屋のお姉さんに教えてもらったのです。『ふふふ、筋」

がいいわね、ナオ』と言われましたよ」

だれだ、こいつにこんなややこしいのを教えたのは……

「あ、あそこにそのお姉さんがいますよ！」

「ハア!？」

あ、あの金髪でコートを着た人か？　つてか、そもそもなんで学校にいるんだ。不法侵入だろ。

「あのお姉さんすごいんですよ。とってもケンカが強いんです。私の目の前で

暴走族を一人で倒してましたよ。素手で」

「それ、本当に人間か？……って、あれ？　さっきの人どこにいったんだ？」

「後ろにいるわよ」

え？……　と思いながら後ろを見たら――

そこには金髪の人がいなかった。

あれ？さっきの声は高科……でもなく、俺の知り合いにもそんな声の奴はいない。

「私はれっきとした人間よ。素手で暴走族を倒したからって人外扱いしないで欲しいわね」

「だ、誰だ！？」

「だから、そのお姉さんですよ」

今度も後ろから声が聞こえてきた。
後ろを振り向くと――

——やっぱりいなかった。

「ど、どこにいるんだ？」

「だからそこにいるじゃないですか」

「ナオの言う通りよ。私はここにいるわ」

高科にはどこにいるか分かるらしい。

いや、ホントにどこ？

「しょうがないわね、そろそろ姿を見せてあげるわ」

そういつて、お姉さんと呼ばれる人物は俺の後ろからでてきた。

いやいや、その方向さつき俺が向いていた方向ですよ？

どっからでてきたんですか？

「単にあなたが振り向くと同時に反対側に移動しただけよ」

「だからそこにいるっていったじゃないですか。何を聞いてたんですか、西園寺君は？」

ああ、なるほどー……って、なるかあ！っていったら、隠密術って言われるのは

分かってるけど……

「にしても、この男はあの男と雰囲気が非常に似ているわね」

「あの男って……お姉さん彼氏いたんですか！？」

「違うわよ。確かに好きではあったけど、仕事の時の固定客だった男よ」

「その人となんで俺が雰囲気似てるんですか？えーと……」

「お姉さんでいいわよ」

「お、お姉さん？」

なんか呼びにくいな。それにこの人年齢いくつ……

ゴゴゴ……

「人の年齢を探るのはやめた方がいいわよ？」

「は、はいっ！」

「それで質問の答えなんだけど。そんなこと言われても私は分からないわ。」

ただ、野球をやっててバカっぽいところが似てるからかしら。」

「人をバカっぽいとは失礼な……」

まあ実際馬鹿だからしょうがないんだけど。

「まああなたはデータで見たところ相当馬鹿だったけどね」

「なぜ知ってる！？」

「ナオから聞いたでしょう。私は情報屋よ。いろんなことを知っているわ。」

じよ、情報屋ってこわいな。みんなこんななのか？

むしろこんなことができるなら政府のスパイでもやりゃあいいのに。

「それで、お姉さん？」

「なに、ナオ？」

「お姉さんはなんでここに来たんですか？」

「それはもちろん仕事よ。ここで調べて欲しいことがあるって言われたからね。」

「まあもう終わったけど」

「そうなんですか」

……そうだ！この人にミーナさんが言ってた情報を頼めばいいんじゃないか？

もしかしたらお金がかかるかもしれないけどさ。

「あ、お、お姉さ——」

「お姉さんならもう行っちゃいましたよ？」

「え？」

撤退するのはやつ！

そ、そういえばここ屋上だよな？あの人どっから帰ったんだ？まさか、飛び降りた……とか。

「それにしても、なんで高科はここに来たんだ？」

「下から西園寺君が見えたので。それと……屋上からの景色からを見たかったので」

屋上？上からの眺めを見たかったってことか？

「それで、こっから見て分かったことがあります。この学園にはまだナオっちが知らない

ことがいっぱいあることが分かりました」

「そうか。でも……ここは男子校舎って事を忘れるなよ」

何度言っても入ってきそうだけどなあ。

先生たちもさぞ苦労してるだろう。

「そういえば、外に行ってるのはですね」

「まだ何も聞いてないぞ」

「あれ、聞くんじゃないんですか？」

……………そういつことにしとくか。

「まさか図星ですか？かわいいですね」

「う、うるさい」

「それですね、外に行ってるのはただ買い物に行ってるだけですよ」

「買い物？そんなの購買でいくらでもできるだろうに。」

「そこまで面倒なことをしてまで外に買い物に行くのか。」

「購買部にもいろいろあるけど、やっぱり外の方が品数は多いし、新商品とかもあるから。」

「それらを買ってきて、寮の皆にあげるんですよ。」

「こづかい稼ぎか？」

「違いますよ。寮の皆にあげたら、生活が華やかになりますから」「華やか？」

「はい。周りが楽しかったら自分も楽しくなるでしょ？だからあたしが楽しい空間を作り出してるだけですよ」

ふん。これで扉と鍵のことを聞いて、高科の理由も聞いたからだいたい全部

聞いたことになるかな。

キョロキョロ

「どうした？」

高科が周りを見回していたから聞いてみた。

「そろそろあの先生が来るころかと」

「大河内先生が来るのは決定事項なのか？」

「いや、いつもくるから」

まさかそんなわけ――

テクテク……

きちゃったよ。しょうがない、高科と隠れるか。

「高科！こつちにこい！」

「えっ？」

ダキッ

（ちょ、ちよつと！？）

（静かにしてるよ。多分大河内先生もすぐどこかに行くと思うから）

テクテク……

（……………）

（にしても本当に来るんだなあ。）

テクテク……

「そろそろ行っただか？お前トラブルメーカーでトラブルを呼ぶ體質なのか？本当に迷惑なヤツ……ん？」
「……………」

どうしたんだ？

「おい、高科？」
「戻る」

え？

「はあ？ちょ、ちよつと？」
「戻ります、それでは」
「あ、ああ」

タタタタタ……

せっかく上手くのがれたのに帰るのかよ。なんなんだいったい……
けど、なんかビックリした顔してたけど、あれは一体？

第13話 「秋季大会終了後」

「おい、サード！打球をしっかりとりやがれ！」
「は、はいっ！」

現在、ノックをやっている。しかもとても強烈なやつだ。原因は監督がとってもとっても怒ってるからだ。じゃあなぜ監督が怒っているかを説明しよう。

時間は少し戻って秋季大会。

俺たちは一回戦を勝って、二回戦の試合の途中だった。俺たちは、という言葉を使ったが、やっぱり俺はベンチ外。

「くっそー、こんどこそ俺がベンチ入りしてやる」

「ハハハ、悪いな西園寺！また俺と田島がベンチ入りで」

「おい、ベンチうるさい！3年がいなくなっただからってたるみすぎだぞ」

「す、すいません監督」

「分かったならいい——」

カキーン！カキーン！

「あ！あの野郎、俺が目を離れたすきに」

「あ、先輩がめった打ちにされてるでやんす！」

平面高校6 - 4 親切高校

「おい、格下に負けるとはどういうことだ……基宗！」

「はい！……油断、しました」

「お前らには本当に愛想が尽きた。ここで一発お前殴りたいが、俺の拳が痛いだけだ。」

だから今から全員ぶっ倒れるまで地獄のノックだ！」

こういつことである。

はあ……試合に出てない俺までなんでやらされるんだよ。
つと、余計なこと考えてたらエラーしちゃった。

「おい西園寺！なにぼーっとしてんだ！ノッカー、もっとあいつに
強いのを浴びせて
やれ！」

「は、はい！」

（こりゃ打つ方も大変だぞ……）

「あの試合に負けてからずいぶんと練習が厳しくなったでやんすね」
「仕方ないだろ、あんな負け方したんだから」
「そうでやんすかね？おいらにはただの八つ当たりに見えるでやん
す」

まあ半分くらいはそうかもしれないけど。
とりあえず先輩の洗濯物などを早く片付けないといけないので、ち
やっちゃと手を動かす。
すると越後が話しかけてきた。

「そつえば知ってるか？星英が秋季大会優勝決めたんだってよ」

「あれっもうそんな日だったのか？負けると一気に興味が無くなるな」

「越後も暇なんでやんすね」

「来年にそなえて情報収集だよ。全く、やれやれだぜ」

「そういえば夏の星英高校は準決勝で止まってたらしいな」

「そういえばそうでやすね。まあ負けたのは天道がリリースで出てくる前に点が」

取られたらしいからでやんすけど」

こんな話をしながら俺たちは洗濯を終え、寮に帰った。

自室に戻った俺は暇なので他の部屋に遊びに行ってみることにした。そういえば、俺って他の部屋の奴の所に遊びに行ったこと無いな……

とりあえず、越後の部屋に遊びに行くことにした。

「ん、どうした西園寺。俺に何か用か？」

「いや、ただ遊びに来ただけだよ」

「そうか。……ところでさ」

ん？いったい常に野球のことしか考えてないコイツに相談されるだ
と？

明日は岩でも降ってくるんじゃないか。

「お前変なこと考えてないか？」

「い、いや？別に考えてないけど」

「おかしいな、荷田から教えてもらった情報ではこういつ時によく
変な事を考えてる

って言ってたんだが……まあいいか、本題に入るぞ」

本題に入るのはいいが、荷田君。お前何教えてんだ。

「何か足が速くなる方法知らないか？」

「足？」

「ああ」

なんで急に足の速さ？コイツそんな足遅い方じゃないだろ。むしろ早かったはず……

「なんで急にそんなときくんだ？お前は十分速いだろ」

「いや、もっと速くなりたいんだよ」

「そうか。うーん……」

というかそんな方法があつたら俺が逆に知りたいな。
何か無いかな……あ、そうだ！

「お、何かひらめいたか？」

「ああ。これから語尾にシュツ！てつけてみたらどうだ？」

「どういうことだよ」

「なんか速そうじゃね？」

普通に考えたら全く意味分らないが。さすがの越後もこれは――

「やれやれだぜ、シュツ！」

「はやっ！もうやり始めてる！」

言った通り越後は語尾にシュツ！てつけていた。
そんなので速くなるわけないだろ。

「なんか、足だけじゃなく全てが速くなった気がするぜ、シュツ！」
「気がするだけだろ……」

「そんなことないぜ！シュツ！ほら見て見ろ、シュツ！身体が軽いぜ、シュツ！」

シュツ！シュツ！ってうるさい。教えるんじゃないかった。

「ありがとう西園寺、シュツ！これでしばらく練習させてもらっぜ、シュツ！」

そんなので感謝されるとは、感謝の重要さが減った気がする。

「もういい……俺は帰るぞ」

「ああ、それじゃあな、シュツ！」

部屋から出た後も後ろからシュツ！って声が聞こえた。
あいつ、本当に馬鹿だな。

後日、ベースランニングのタイムをはかったのだが、越後は逆に遅くなっただけらしい。

なんかシュツ！っていった回数が少なかったからとか言ってた。

やっぱ馬鹿だろ……あいつ。

第14話 「森で迷った……どうしよう」

とりあえず俺は今、森を歩いている。

暇なので、大江にでも会いに行こうかと思ったのだ。
ところが、

「あれ？今日はいないみたいだな」

そう、いなかったのである。

「なんだ、今日はいないのか……」

しょうがないので、この付近を見渡してみる。

しかし、ここは地面が固く、周りの木の葉っぱがちぎり取られている。

そつえば前に大江が言ってたな。

ここで落ちてくる木の葉をつかみ取る……だったか？いや、握りつぶす？

まあそんなところだろう。そして、この硬い地面は強く踏んだ後だろつな。

すごい練習を重ねているのが良く解る。

「まあ、ここにいても得にすること無いし……もう行くか」

「ほう、一体どこに行くんだ？」

大江では無い声が響く。

この声……前にも一回聴いたぞ。確か、

「神条？」

「む？私は名乗った覚えがないのだが。カズと一緒にいた男子生徒」
まあ名乗ったところか姿も見せてなかったんだけどさ。
いや、もしかして見られていたのかな？

「なら一応名乗っとくよ。俺は――」

「野球部のニコニコだろう？私は監督生だから生徒の名前は知っている。それに

しても、前に私は言わなかったか？もうここには来るなと」

う。そういえば言ってたな。けどそんなことは気にしない。

「私自身は別にいいんだが、ここは女子寮の近く。あまりここに来ることがあれば、少し反省してもらわなければな」

「は、反省？」

何を反省するって言うんだ？あ、テストとか？

「まあ仏の顔も三度までというからな。ここは見逃してやろつ。…にしても君も

不幸だな。私はあの日以来ここに来てなかったというのに、君とまた遭遇したからな」

「なにい、じゃあお前は毎回ここに来てるわけじゃないのか！？」

まじかい。俺もあの日以来、来てなかったんだが……

「本当だったらすでに規則違反で反省室に連れてかれてるぞ。ただ、お前とは
なにか古い縁を感じるな」

「なんじゃそりゃ」

古い縁って何だ。こんなヤツと縁があっても邪魔なだけだな。

「それじゃあ俺は帰るかな」

「まあ待て。一つ頼みがある」

「？」

一体なんだ？

この偉い監督さんが一般ピーポの俺に頼みごと？
しかも男子で全く関わったことのない俺に？

なんかとても嫌な予感がした。

「まあ、そんな悪い事じゃない。実はだな、最近女子生徒が男子校舎とかに忍び

込んでいるんだが……そいつを見つけたら捕まえといてくれ。ちなみに顔写真だ」

そう言われて渡された顔写真を見る。

予想はついてたが――

（高科じゃねえかこれ！）

「どうした？コイツ知り合いだよって感じの顔して」

「ま、まさか。なんで俺が女生徒と知り合いなんだよ」

「それもそうだな。それで、そいつが最近男子校舎の方に行って、カメラで写真を

撮ったりとか、いろいろやる上に、なかなか捕まらないんだ」

そりゃそうだろうな。あんな情報屋から隠密術教えてもらっているんだもんな。

「ま、話はこれだけだ。悪かったな、手間を取らせて。もうこれ以上会うことが無い事を願っているよ」

こっちとしても、もう会いたくないよ。

そう願うのだった。

……あれ？俺今どこにいるんだ？

今は夜である。

「ヤバイ、完璧に道に迷ってしまった。こっちはずっと海岸の方だけど、帰り道が分からない」

しょうがないから再び歩き出す。ああ、これは食事の時間に合わないか……
そんなとき、向こうから人の気配がした。

（誰か来た！？隠れないと……って間に合わない！）

ガサガサ

そこには、長い髪の毛で、とても知的そうな雰囲気の子がいた。この学校の制服を着ているってことは、この学校の生徒なんだろう。

「なぜ男子生徒がここに？立ち入り禁止のはずだが」

（うっ、やばいぞ）

「じ、実は帰り道が分からなくなってしまったんだ」

「帰り道？じゃあ、そもそもどこに行こうとしてたんだ？」

そりゃそつだ。ここから女子寮は……すぐそばみたいだし。
とりあえず、今日の話を話してみるか。

「……なんだか信じがたいな。まあ、確かに証拠品も持ってるから
ホント
のことだろうけど」

証拠品とは、神条からもらった高科の写真だ。
いや、なんで返さなかった俺？今はそのおかげで助かってるけどさ。

「そこに誰かいるんですの？」

この声は？

「そこの茂みに隠れて！」

この女の子に言われて、俺は茂みに隠れた。
そのとたん、先生が現れた。

「まあ、天月さん。またあなたでしたの」
「すみません。気分がすぐれないので、夜風にあたりたかったんです」

「規則は規則。あなたは成績が優秀なんだから、規則さえ守ればす

ぐにでも監督生

になれるのに」

「すみません」

「だいたいあなたはいつも――」

くどくどくどくど……

がみがみがみがみ……

30分が経過した。

説教が長いな……早くどこかに行ってくれないかな？

「つと、こんな説教は後回しです。この森に不審者が紛れたようなので、天月さん、

あなたも早く寮に戻りなさい」

「分かりました」

テクテク……

「もう出てきても大丈夫」

「ふう、助かったよ」

それにしてもなんで俺を助けてくれたんだ？

「俺だけ隠れてしまつてごめん」

「気にするな。私はいつものことだから。さつき先生が言っていた不審者とは君のことだろう？もし君が捕まっていたらとんでもない事になっていた」「た、たしかに……」

捕まっていたら野球部を退部することになっただろうな。そう考えるとここで助けてくれたのは、本当にありがたい。

「これに懲りたら、もう森の中に入るのはやめといた方がいい」「分かったよ」

「……それでは」
「あ、ちよつと待って！俺は西園寺。一年生だけど、君は？」

うん、助けてもらったのに、自己紹介をしないのは失礼だ。

「私は天月 あまつぎ 五十鈴 いすず。私も一年生。」

そしてお互いによろしく、と言いつつ。
……笑うとかわいいな。

「まあこの学校は男子と女子が別々になっているから、もう会うことはないかも知れないけど。それでは」

そういつて彼女は去って行った。

「それにしても、こんな時間に抜け出して、何してたんだろう？」「そう考えていたら、大変な事実気がついた。

俺、どうやって帰ろう。

ガサガサ

また草むらが！？

「あれ、こんな所で何しているんですか？」

「……お前こそ何しているんだ、高科」

トラブルメーカーがやってきた。なぜここに？

「質問に質問で返すのは良くないと思いますよ。まあいいですけど、私は単なる散歩

です」

「嘘だろ」

「よく分かりましたね」

こいつが散歩なんてほとんどなさそうだからな。

そもそも夜に散歩はないだろう。

「暇だから男子寮にでも忍び込もうと思ってたんですよ」

「なぜこんな夜に？」

「楽しそうだからですよ。ただそれだけです。まあ、もうめんどくさいので帰ろうと

思っていました。それで、西園寺君はなんでここに？」

「……道に迷った」

恥ずかしいが、しょうがないので言ってみる。

ついでに神条から渡された写真の事を言ってみると、

「まあ生徒会のほうから目をつけられてますからね」

と、言われた。

「しょうがないので校舎の方向だけ教えてあげますよ」

「それは信じていいんだよね？」

「さすがにこんな夜まで迷っている人に変な方向教えたりしませんよ」

それならいいんだが……どうも信用できない。

あ、そうだ。

「そういえば、お前なんであのとき帰ったんだ？」

「へ？いつ？」

「屋上で会ったときだよ」

すると、なぜか少し照れくさそうにしていた。

うん？俺、何かしたか？

「まあ気にしないで下さい。それより、方向はあっちですよ」
「あ、ああ」

はぐらかされてしまったが、今は帰る方が先なので、教えてもらった方向に行くことにする。

高科に教えてもらった方向に行くと、旧校舎についた。
……校舎は校舎でも、さすがにそれは違うだろう。
やっぱりあいつとは付き合わない方がいいかな？

第15話 「再度森へ」

さーてと。今度は大江いるかね？

前回と同じように俺は森を歩いていた。暇だから。

別に俺が女好きってわけではない。

ただ……

今度は迷子にならないようにしないとな。

「あの後、帰った時の時間が11時だったからなあ」

そのおかげで寮に入るのも一苦労、飯は食えないで大変だった。

俺が帰った時に荷田君が、お菓子を一緒に食べよう、と誘ってくれたのが

非常に心に染みた。

そう考えている間に、俺はいつもの場所まで着いた。

だが、また大江の姿は無かった。

「あれ？またいないのか……」

むう、アイツそんなに来ることがないのかな？

しょうがない、また不審者と思われる前に帰るとするか。

「……そうだ！」

考えたら俺は一度も女子寮を見たことが無いな。
一回くらい見ておくか。

いや、別に俺が女好きってわけじゃないよ？ほんとだよ？
さっきも言っただけ。

そうして少し歩くと、そこには校舎があった。
ただ、これ以上近づくとバレそうなので、それ以上は近づかない。

「……おお、これが女子寮か」

なんか不思議な気分になる。
何人かの女子生徒とはあったけど、本当にこの学校には女子生徒が
いるというのを
あらためて認識した。

そのとき。

「大江さん！あなたは どうして そうやってすぐに備品を壊してしま
うんですか？」

「はあ、えろうすんません」

「その言葉づかいもそう。もう少しちゃんと喋れないの？」

「はい、申し訳ありません！」

「……あなた、ふざけてるの？ガミガミガミガミ」

この声は、天月と会った時の先生と、大江の声だ。
なにか怒られているようだけど、ここからじゃ上手く聞きとられな

い。

もう少し近寄るか。

（はぁ、一体どないせえちゅうねん……おっ！？）

「せ、先生！」

「ガミガミ……はい？どうしました？大江さん」

「きゅ、急に腹が痛くなったんで……後で改めて怒られますんで、失礼します」

タタタタタ……

「あ、大江さん！？……本当にダメな子ですね」

ガサガサガサ……

ワンワン！（お、馬鹿な人間がいるぜ）

ワン！（おい、もう一人来るぞ）

ワ……ワン！（こ、この匂いは！）

キャ、キャン！（悪魔だ、悪魔が来るぞ、逃げろー！！）

ん？なんかあっちの方で犬が逃げてないか？
あ、大江がこっちに来た。

「やあ、西園寺君。今日はどうしたんや？」

「いや、暇だから話相手でも探してこっちに來ただけど、見当た
らなかつたから

こっちに來たんだ」

「……こっちは女子寮しかないはずやねんけど」

「う、誤解だ！」

確かに怪しまれるのも無理はない。

「はあ、にしても西園寺君、あんた危ないところやったなあ」

「何が？」

「こころへん、あたしの友達多いねんで？」

まさかさっきの犬は……

深く考えない方がいいな。

ワン……（誰が友達だよ、あんなに首を絞めつけてきたりするくせ
に）

ギロツ

キャ、キャン！（に、逃げる！）

「おい、大江。お前、今すごい睨んでなかつたか？」

「え、嫌やなあ。そんな目しとらんで？」

たぶんあつちで草がガサガサ言つてたから、俺以外の何かを睨んだ
んだろうけど。

今ここにいたら犬か警備員さん。

まさか警備員さんを睨んだりはしないから……犬しかないけど。

まさか人間以外にも睨んだりするのは効くのか？
ちよつと聞いてみるか。

「なあ、大江」

「ん、何？」

「お前がやっていた槍つてさ、睨んだりするのも武器なのか？」

「だからー、睨んでないつてば。あたし、女の子やで？そんな人なんか睨まんて」

人？なら、動物に対しては睨むということか。

「つまり、犬に対してはするつてことだよな」

「確かに犬は人じゃないけど……分かった、降参や、降参！」

「なんだ、意外とあっさり認めるんだな」

「これ以上言つたつてどうせ無駄やろ？」

そりゃそうかもしれないが。

「で、それつて槍の練習の賜物なのか？」

「槍とはあんまり関係ないけど、要は気迫やな」

「気迫？」

それこそ女の子が使う言葉なのか？

にしても気迫つて……

「結局どうやるんだ？」

「なんや、あんた覚えたいのか。けど、教えられへんな」

「なんでだ？」

これくらい教えてくれたらいいのに。

別に減るものでもないだろう。
そう思いながら話を続ける。

「これは古武術の技やからな。教えてもらおう思たら、金とるで、金！」

「金なんて持つてる訳ないだろ」

ペラならあるが、残念ながら手持ちが少ない。

「そういう訳で、もし教えてほしかったらまた別の機会やな」

「あともう一つ。睨みつけるだけなのに、それも古武術の技なのか？」

「教えられへんなあ」

ケチだなあ。まあいいけど。

「他にも重い荷物を軽く持つとかいろいろあるけどな」

なんだそれ、本当に古武術なのか？

なんだか気になるけど……本人が教えるのは金いると言っているし、しょうがないな。

すると、向こうから人がやってきた。

「カズ、あんたこんなところにいたの。紫杏が呼んでるわよ、早く戻りましよ」

「ああ、分かった。すぐ戻るわ」

話し方的にたぶん同年代だろう。

眼鏡をかけていて、少し気が弱そうだけど。

「で、あんたの隣にいるコイツはだれ？」

前言撤回。コイツとか呼ばれる時点で、もう気が弱くないのが分かる。

むしろ、この感じはめっちゃくちゃ強いな。

「こいつは同じ学年の西園寺っちゅー奴や。よろしゅうしたってや」「ふーん。なんでここににいるわけ？しかも私、男子って嫌いなんだけど」

なぜか睨まれた。しかも、なんか酷い事言われてるし。

「ま、それじゃあ私先に行ってるから」

そう言っただけで彼女は校舎の方へ行った。

「ま、まあ付き合いにくいかもしれないけどよろしゅうしたってや。あ、名前の方は浜野^{はまの} 朱里^{あかり}って言うから」

そして、大江は浜野の後をつけていった。

誰もいなくなっただけから、俺も帰るか。
これから練習あるしな。

第16話 「練習後」

「よし、次はカーブの投げ込みだ」
「はい！」

今は練習中である。さっきの会話を見て分かるように、俺は変化球重視の練習だ。

天道には速球では敵わないが、こっちは変化・技術で勝負と、言ったところか。

ちなみに、キャッチャーは荷田君がしてくれている。

「にしても、西園寺君のカーブは良く曲がるでやんすね」
「まあ俺の一番の武器だからな」

中二の頃からずっと練習してきた変化球だ。
なかなか打たれない自信はある。

「どうせなら、もっといい変化球にする気はないか？」

監督が言ってきた。

いい変化球だって？そりゃ良くしたいにきまつてるけど……

「どういうことですか？」

「例えば、そのカーブをスローカーブにしたりするんだ。お前にはそういう才能がある

から、出来ると思うんだが、どうする？」

うーん、スローカーブか……

「いや、やっぱりやめておきます」

怪我したら嫌だからな。

「なあ、西園寺。今日暇か？」

「なんだ越後？部活終わった後なら暇だけど、何か用か？」
「練習に付き合ってくれないか？」

練習か……そこそこ疲れてるけど、まあいいかな。
ということ、俺は越後と自主練することにした。

「110!……111!……112!」

俺たちは素振り続ける。
にしても越後、やっぱりフォームきれいだなあ。

「……199!……200!」
「よし、一回休憩するか」

さすがに練習後に連続で素振りをするのはきつい。
よく体力持つな。俺もまだまだ練習の必要があるな。

「どうだ、また俺と勝負しないか？」

越後から誘われた。

とはいっても、そんな俺の手持ちをポンポン見せたくはない。

「いや、今回はやめとくよ。疲れてるしな」

「そうか、なら俺が相手になってやるよ」

そういつて奥から現れたのは田島だった。

いつから見てたんだか……さっさと出てきたらよかったのに。

「まあ俺も練習で疲れてるから本気ではないけどな」

「別にいいぜ」

そういつて越後はバッターボックスへ、田島はマウンドの方へ歩く。

……

二人が対峙する。

個人的な意見ではあるが、俺は越後が勝つと思う。

確かに田島は制球力もあり、球種もある。が、越後は今日の素振りを
見ていると、

なかなか調子がよさそうだった。

ビュッ！

田島がボールを投げる。そのボールは越後のバットの先を掠めた。ガシャン！と、バックネットにボールがあたる。

（なんだ、田島も調子がよさそうだな。なら、この勝負、どっちが勝つか分らないな）

だが、案外早くその時が訪れた。
田島はカーブで内角低めを狙う。

「来た——！」

越後は狙ってたと言わんばかりに、いや、狙っていたんだろう。
バットを勢いよくふり、そのバットは見事にボールを捉えた。

カキーン！

快音とともに、ボールは飛んでいく。

（……レフトオーバーって所か。）

勝因としては、素振りの前に越後から頼まれたカーブを打つ練習だろっな。

それがなければまだ分からなかった。

「ちえ、打たれちまったか」

「俺の勝ちだな！もちろん俺が勝ったからポテチくらいはおごってくれよ」

おい、それ前に俺が言ったセリフ。

「ぐ……まあいいだろう」

「さて、これからどうする？」

どうすると言われてもな……特にすることは無いんだが。
まあ暗くなってきたから寮に戻るとするかな。

「俺は戻るけど。二人はどうする？」

「俺は戻るぜ。田島は？」

「まだ残って自主練するよ」

ということで、俺と越後は寮に戻ることにした。

越後の部屋にて。

「なあ……越後。なんでお前って野球をやり始めたんだ？」

「俺か？」

いや、名前で呼んだし、ここにはお前しかいないから。

「やっぱり、野球は楽しいからかな」

笑って越後は答える。

そりゃそうか。じゃなけりゃ、越後も俺もここにはいないだろう。

「それに」

それに？それ以外に何かあるのか？

「他のスポーツはルールが理解しにくいだろ」

これは予想外の答えが来た。

お父さんが野球をやっていたとか、近くに野球が好きな人がいるとかなら分かるが、

「……なんじゃそりゃ」

「だって、サッカーとか意味が分からないか？」

しかもサッカーが分かりにくいと来たか。ラグビーとか普段やらないスポーツなら

ともかく、サッカーだ。

「手を使っちゃいけないのに、一部の奴は手を使っているし。そもそもなんでゴール

したら一点追加なんだ？」

「そこからかよ！」

大声を出してしまった。

けど、無理もないと思う。こんなやつ人生の中で初めて見たからな。

「じゃあなんで野球は理解できるんだ？振り逃げとかフィルダースチョイスとかを

理解するのに時間かかったんじゃないか？」

「何言ってるんだ西園寺。あんなの覚えるの簡単だろ？」

……はあ？

ああ、そうか。

こいつ、本当に野球バカなんだ。

とりあえず越後の先輩が帰ってきたので俺は自分の部屋に戻った。
そろそろ寒くなってきたな。もう秋も終わって冬休みが始まるのか。

……
時間が過ぎるのが早く感じるな。

第17話 「ポテチは20ペラですよ」

「朝でやんす！起きるでやんすよ！」

そんな声を聞き、俺は身体をゆっくりと起こす。
どうせならここで美少女が起こしてくれたらいいのに……まあそんなことはないけどね。

「ん……荷田君、もう朝？」

「だから、朝でやんす、って言ったはずでやんすけど」

あ、そりゃそうだ。

今日は日曜日だけど、これから部活があるのか。

そして俺は二段ベットから出て、ユニフォームに着替える。
そのまま荷田君と一緒に食堂の方へ移動する。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

途中で出会ったチームメイトに挨拶を交わしながら、俺と荷田君は席に座る。

「西園寺君は人参が嫌いなんでやんすか？」

「そうだけど、なんで？」

「いつも最初の方にそれだけ食べてるからでやんす」

なるほど。俺は最初に嫌いなものを食べる癖があったのか。

自分でも気付かなかったなあ……どうでもいいけど。

「なら、荷田君はマツシユルーム嫌いなのか？最初に食べてるけど」
「オイラは先に好きなものを食べるんでやんす」

……どうでもいいか。

「ま、俺は先に部屋に戻るよ」

「待ってくれでやんす！今食べ終わるから、でやんす！」

「準備できた？」

「オツケーでやんす！」

寮で自分のグラブとかを持っていく最中である。

うーん、そろそろグラブがボロボロになってきたな。

新しいのに買い替えたいけど……600ペラかかるし。

「はあ、今日の練習かったりいなあ」

「どうしたんです？北乃先輩」

……嫌な予感がする。実は先日、こんなことがあった。

それは寮の付近を歩いていたらときである。

「はあ、練習かったりいなあ」

「だから、といって練習をさぼっちゃ監督に怒られるでやんすよ」
「俺は大丈夫なんだよ」

何が大丈夫なんだろう？

まあいいや、さっさとグラウンドに向かうか。

「うつ！いてててて！」

「ど、どうしたんですか？」

「急に膝が痛みだしてきたよ！これじゃ今日の練習は無理だ！」

はあ？

そんなはずないだろ。単に休みたいだけだろう……

「ちょ、ちょっと。北乃先輩、さすがにさぼっちゃだめですよ」

「ああ？ならこの状態で練習に行けって言うのか？」

「い、いや……」

んな無茶苦茶な。

だから野球が下手なんじゃ……ゲフンゲフン。

荷田君がいるところでこれは危ないな。

「それじゃ、監督に今日休むって言っといてくれ」

え、と二人で不満を言うが、もちろん先輩には通用しない。

「わ、分かりました……」

「ちゃんと帰りにはポテチ買ってこいよ」

こんなことがあったのだ。

さっきの言葉が、「部活めんどくさい」という意味なので、たぶん今回も同じだろう。

荷田君を見て見ると、困った顔をしていた。

（どうにかならない？）

（無理でやんすね）

そしてあの言葉が出る。

「うっ！いててて！」

「……どうしたんですか？」

「なんだよお前、先輩が痛みを訴えてるんだから、もう少しないのかよ」

本当に痛みがあるのなら、もっとそういう顔をしてくれ。
それに、そんな事を言わないだろう。

俺は心底めんどくさいながらも、先輩の話を聞くことにした。

「……まあいい。俺は急性胃腸炎にかかったので練習には行けない」
「まあそんなところでしょうけど」

バキ！

殴られた。お、親にも殴られた事無いのに！

……嘘です。もう先輩にも何回殴られた事か。
まあそれはおいとして、

「俺はテーマパークに行くことにするよ。可愛いキャラクター
ーたちと一緒に
遊んでくるぜ。それじゃあ監督に言つといてくれよ」

はあ……どうせ俺らが監督に怒られるんだろうな。
いいかげんにしてほしいよ。

「分かったでやんす。けど、お金はあるんでやんすか？」

確かに。お金は全部取り上げられてるはずだし、そもそもこの時間、
バスは無いはず。

どうやって行くんだろう？

ま、まさか、かの呪文。ーラ……

「俺は特別な携帯を持ってるからな。そこらへんは別にどうにでもなるんだよ」

なんだ、ルー。じゃないのか。期待したのに。

（西園寺君）

（なんだ、荷田君？）

（それは無いでやんす。ゲームのやり過ぎでやんす）

（……………）

突っ込まれた。

「それじゃ、俺は行ってくるぜ」

「あ、はい」

そう言っって先輩は携帯で誰かと話し始めた。
おっと、練習の時間が始まるな。急がないと。

「……ということで、北乃先輩が休むそうです」
「分かった」

さっきの先輩のことを言うと、監督は考え込み始めた。

（北乃の奴、俺をなめてるな？）

「それじゃあ俺たちは練習に戻ります」
「待て」

監督に止められた。

ああ……やっぱりこうなるのか。
だいたい分かつてはいたけど。

「北乃の代わりの練習をお前らがやれ。まずはランニング10周！」

「はい……」

「声が小さい！」

「はい！」

トホホ……と俺たち二人はグラウンドを走る羽目になった。

後日、北乃先輩が監督に怒っていた。

……あれ？大丈夫なんじゃなかったのかな？
けど、なんかいい気味だ。

（そうでやんすね！）

荷田君に突っ込むのはもうやめよう。

第18話 「掃除」

「あはは、それでさあ」

「え、そうなんでやんすか!？」

俺と荷田君は、二人で会話しながら部室へ向かう。
この会話は単なる世間話です。

ガチャ

部室の扉をあけると、そこにはとんでもない臭いが漂っていた。
とりあえず、とてもくさい臭いだ。

「な、なんでやんすか!？この臭いは」

「一体どこから!？」

おそろおそろ近づいてみる。

だが、どこにその原因があるかは全く分からない。
一体どこに……？

「お、何やってんだ西園寺——うつ!？」

「どうした、越後、ってこの臭いは？」

越後と田島がやってきた。後ろを見ると官取と岩田もいる。
とりあえずこの4人は異変に気づいたようだ。

「お、おい西園寺。一体これはどういうことだ?」

田島が聞いてきた。

と、言われてもねえ。

「俺もよく知らないんだけど、今部室に入ったらこんな臭いが漂ってたんだよ」

「そうか…… 2週間程前から変な臭いがしてたのは知ってたが、急にこんな強くなるとはな」

気づいてんなら捨ててくれよ……

そう言いたかったが、とりあえず抑えることにした。

とりあえず今はこの問題を片づけることが先だからな。

「とりあえずこの臭いの原因に心当たりのある奴いないのか？」

「それが分かったら苦労しないでやんすよ……」

あ、そりゃそうか。

ならもう、これは我慢して探すしかないな。

「ま、それじゃあ他の人が来る前にやるか」

「やれやれだぜ」

「腹減った」

ということで、俺たちは掃除をすることになった。

ちなみに、2人目の言葉は越後、3人目は岩田である。

「おい、これなんだ？」

その越後の声に全員が振り向く。

しかし、越後が持つてる物は臭いの原因ではなかった。
だが、それは俺らが全く見たことのないものだった。

「越後、それなんだ？」

聞いてみる。

「だから俺が聞いてるんだって。なあ田島これなんだ？」

「俺がこの中で一番学力高そうだから判断したんだろうが、俺もしらないぜ」

ちなみに、その越後が持つてゐるものとはピンク色の花だった。
チューリップとかではなく、俺たちが知ってる物ではなかった。
けど、見た感じ毒がありそうでもなかった。

「ああ……腹減った。それ食べてもいいかな？」

「いや、危ない、危ないから。こんな所にある花だぞ」

「そうか……なら頂きます」

そっいつて岩田はこの謎の花？草？を食べ始めた。

「ちょ！危ないって！」

毒でも入ってたかどうか。入ってなさそうだけど。

ムシャムシャ……

「味の方はどうでやんすか？」

「うん、なかなかいける。力がついた感じ」

「へえ、それはいいな」

「ここにもう一個あるから、官取もいつとくでやんすか？」

「いや、俺はいいよ……」

まだあったのか。それより早くお前ら探せよ……

「うん？おい、ここのロッカーから変な臭いがしないか？」

そう言っただけ田島が指したロッカーからは確かに変な臭いがした。これはビンゴか？

「た、たしかにこれはやれやれだぜ……」

「この中には何があるんでやんすかね？」

それじゃ開けるぞ、という田島の声でそのロッカーは開いた。それと同時にものすごい悪臭がロッカーから出てきた。

「こ、これはすごい臭いだ！」

「早く誰かこの原因の物体を外に出せ！」

上から岩田、官取だ。

とりあえずこの物体はなんなのか確認してみる。

「こ、これは……シャツ？」

「あ、汗だ……汗を吸ったアンダーシャツが発酵してものすごい臭いを出してるんだ」

とりあえず名前でも書いてないか……あれ？このタグの所に名前があるぞ？

えっと……に、だ？

「これ荷田君のじゃないか！」

「オ、オイラのシャツでやんすか！？あ、そういえば前にシャツが一枚無くなってたでやんす！」

お前のだったのか……

「とりあえず早くこれ処分しろよ」

「嫌でやんす！こうなったらもうこれはオイラのじゃないでやんす！」

「何言ってるんだ君は！？」

意味のわからない理屈だな！？子供でももうチヨイまともな事言うぞ。

「いいから捨てるよ」

「しょうがないでやんすねえ、捨ててやるでやんす」

「ああ、有難う……ってこれはもともと荷田君のдар！」

「それじゃ行ってくるでやんすよ」

そう言って荷田君は外へ行った。

たぶん焼却炉にでも行ったのдар……これで一件落着、あれ？まだ

臭いが……？

「お、おい。まだ何か臭いが残ってないか？」

「越後、お前もか。気のせいだよな？」

越後と田島もまだ臭いを感じるらしい。

ま、まだあるのか！？

「あ……もしかして」

「なにか心当たりがあるのか？岩田」

そう言っただけ岩田は一つのロッカーに手を伸ばした。
そのロッカーが開くと――

「うわ、臭っ！！」

岩田以外の全員が一步後ろへ引いた。

い、一体これは？

「俺が昔おなか空いた時の為にとって置いたおにぎりだ。前探して無かったけど、

こんなところにあつたのか」

そこには真っ黒になっているおにぎりがあつた。
きつともものすごくカビが繁殖しているんだろう。

「い、岩田。いいから早くそれを捨ててくれ！」

「分かった」

越後の頼みにより、岩田は窓のほうに歩いて行った。

……窓？窓って扉の反対側だよ？どこにいくの？

「それっ」

ヒューン……

掛け声とともに岩田のおにぎりは放物線を描いていった。
臭いが一気に和らぐ。

「おにぎりが糸を引いていてきれいだったね」
「全然きれいじゃないから」

ハア……とても疲れた。さっさと寮に戻るか。

後日。またこんな事が無いように自分のロッカーを掃除していると、
パワビタDとペラが見つかった。超嬉しかった。

第18話 「掃除」(後書き)

パワビタD[®]ドリンクです。

第19話 「窓の外には」

朝、起きて外を見て見たら雪が降っていた。

ああ、もう12月か。

「西園寺君、起きたでやんすか？さっさと学校に行くでやんす！」

俺は荷田君とともに、自分の教室へ向かった。

「なあ、西園寺。お前は冬休みに家に帰るのか？」

「ああ。越後はどうなんだ？」

「もちろん一回帰るぜ」

二人で冬休みのことを話す。

ちなみに、岩田と田島は別のクラスだ。

「そろそろ先生が来るでやんす！二人とも席に座るでやんすよ」
「オッケー、分かった」

そう言つて俺たちは席へ座つた。
すると間もなく大河内先生が教室へはいつてきた。

「おはよう、今日は朝寒かつたが、風邪を引かなかつたか？」
「大丈夫でやんす！」

そんな社交辞令を交わしながら、1時間目のHRが始まる。

「とりあえず今日のHRは冬休みのことについて話すぞ。冬休みは2週間で、その間は家に各自帰宅してもらつていい。これは1学期の最初に話したな？」
「はい」

ああ、実家に帰つたらようやくゆつくりできるな。
寮じゃ先輩たちがいてゆつくりできないからな。
いつもマッサージしろとか言つてくるし……

「2週間とは言つたが、別にきつちり2週間休まなくてもいい。その前に帰つてきても別にいいぞ」

「な、なんでこんなところに早く帰つてくる必要があるんでやんすか！」

「冬休みになつたら分かるさ」

そう先生は意味深な発言をした。

荷田君の言つとおり、ここに早く帰ってくる生徒なんているのか？
そんなわけないだろうに。
とりあえず後で質問してみるか。

「それじゃあ今から冬休みについての注意と、少しだけ授業を行う」

「え、授業もするでやんすか!？」
「ああ」

授業をするのか。なら、俺は寝るとするかな。

学校終了後。

「そこで越後がさ」
「何やってるんでやんすかね、越後は」

荷田君と二人で寮へ向かう。
すると奥から監督がやってきた。

「お、いいところにいるじゃないか。荷田と西園寺」
「どうしたんですか? 監督」

「実はだな、天気予報でこれから大雪になるそうだ。俺としては練習がしたいんだがな、
学校側が今日は練習を中止しろと言ってきやがったんだ。だからそれを1年連中に伝えて
おいてくれ」

「分かりました」

やった！今日は練習休みなのか。

久々の練習休み……かな？最近何回も休んでる気がしなくもないが。

「どうするでやんすか、西園寺君？特に部屋でやることもないでやんすけど」

「そうだなあ……」

購買でトランプを買ってくるのもいいけど、普通に話してるだけでもいいかな。

「ま、適当に話でもしようか」

「分かったでやんす！それなら部屋でトランプを用意するでやんす！」

人の話を無視するやつだ。将来ロクな大人にならないぞ。

「俺は少し寄り道して帰るよ」

「どこに行くんでやんすか？」

「ちよつと外に」

俺は子供のころから雪が好きだった。

もともと住んでいるところが、雪が降りにくい地域だったからそのせいかもしれない。

「なかなか降ってるな……」

どうせならここで荷田君や越後たちと雪合戦でもしたらよかったかも知れない。

今から呼んでこようかな……お？

「あれは、高科？」

奥の方でこそそしながら歩いていた。いや、むしろ正々堂々と？
なんだか良く解らない歩き方だ。

「暇だからついていてみるか」

にしても寮の方に向かって言ってるけど何やっているんだろうなあ。

「はあ、ここも開かないですよ」

そう言いながら高科は男子寮の窓を調べている。
誰かにバレたらどうするんだ。

「けど、きつとどこかは開いてるはずだから頑張って探します!」
「何を探すんだ?」

「きゃっ!すみません!窓があつたら入りたくなる病気なんです!
許して下さい!」

なんじゃそりや。そんな病気初めて聞いたぞ。

一体コイツは何を言ってるんだ。

「つて……なんだ、西園寺君か」

「なんだとはなんだ。先に言っておくが、男子寮の1階の窓は1年生で毎日締めてるから開いてることは無いと思うぞ」

ちなみにさつき雪の関係で締めたばかりだからな。
そうそう開いてることは無いだろう。

「えゝ、なら、こんなことしても無駄じゃない。損しました……」
「さらに言つと、今日は雪が降るとかで部活も休みだから、生徒も寮にわんさかいるぞ」

さすがにその中に入るのは気が引けるだろう。

「そこは分かつてるから大丈夫」

「何が大丈夫なんだ!?!」

コ、コイツ、分かつて入るとか質が悪い……
まあいいか、たぶん高科もそろそろ帰るだろう。

「それじゃ、俺はもう戻るぞ」

「……………」

何か言いたそうな高科がこっちを見ている。

……何だ？何かあるのか？

「どうした？早く帰らないと大河内先生に見つかるぞ？」

「そ、それもそうなんですが……」

「どうした？何かまずい事でもあるのか？」

「いや、別にそういう訳じゃないんですけど……」

もつと意味が分からん。

「まあいいや、今度こそ俺は帰るぞ」

「え、あ……」

「どうしたのか？用があるなら言ってくれよ」

なんか拳動不審だな。いつもと様子がおかしいのは気のせいかな？

「い、いや、特に用は残ってないですよ。それではシーユーアゲインです！」

タタタタタ……

行ってしまった。結局何なんだ？

何も言わずに去って行ったけど……何か言いたそうにしてたな。

「森に生えてたキノコでも食ったのか？」

行ってしまった奴のこと考えてもしようがないか。
雪でもみながらゆっくり部屋に戻るとしようかね。

部屋に帰ったら、荷田君がさびしそうに俺を待っていた。
ああ……トランプの事忘れてたよ……

第20話 「実家に帰る」

「ただいま」

「あら、おかえり」

実家に帰ってきた。そう、ついに冬休みになったのだ。ようやくこれで羽が伸ばせるのだ。

「もう、帰るのなら連絡の一つでもいれなさいよ」

「ごめん、次からは気をつけるよ」

とはいっても、連絡するときには学校内の公衆電話を使わないといけない。

携帯電話は中継するところが無く、公衆電話も一台しかないのめつたに使えない。

さらに言うところと冬休みに入りかけてる時は全員が使いたがるので、並んだら1時間ほどかかるのだ。

そんなことするくらいなら……ねえ。

「にしても、なんか雰囲気が変わったわねえ。全寮制の学校だったからかしら？」

「そんなに変わった？」

「ええ」

そうか。そんなに変わったのか。

ま、とりあえずテレビでも見てのんびり過ごすかな。

なので、俺は机の上にあったりモコンをとり、スイッチを点けた。

「……あれ？何だこの番組？」

「ああ、その番組視聴率いいのよ。あなたがいないときに始まったの」

「ふーん」

新聞のテレビ欄を確認してみると、そこには俺が全く知らないものしか流れていなかった。

ニュースとかは変わっていないが、ゴールデンタイムはずいぶん変わった。

……見たいものはないな。

俺はテレビのスイッチを消した。

「あれ？テレビ見ないの？」

「うん。見たい番組が無かったから」

しょうがないのでパソコンを使ったり、本を読んだりする。

が、全部途中でやめてしまった。

どうにもやる気が起こらない。

……本当に家に帰ってきたんだよな、俺？

そんな時、電話がかかってきた。

——荷田君からだ。

「やあ」

「西園寺君でやんすか？オイラ、先生が言ってた意味が分かってきたでやんす」

「ああ、俺も分かったよ」

そう、どうせ寮に帰ったらこれらは全部見ることが出来ないのだ。だからやることがなく、暇でしようがない。

「オイラ、年が明けたらすぐ帰るでやんす。西園寺君はどうするでやんすか？」

「俺もそうするよ。とりあえず今は……ボールでも投げ込んだりかな」

「おお、それはナイスアイデアでやんす！」

うん、それ以外やることないしね。

数日後。年が明けた。

（ああ、暇だ。早く学校に戻って練習したいなあ）

「お、また大神電機の株が上がっているな。NOZAKIの株も上がってる」

「あなた！子供が帰ってきてるのに株なんて見ててどうするの」

「あ、いや。そうだな……」

なんだか家に居づらいな。

「そ、そうだ。年も開けたから、おみくじでも引きに行ってくるよ」
「あらそう？　いつてらっしゃい」

俺は街へ出た。適当にブラブラしながら神社の方へ行ってお参りを

する。

すると、最近はやりの射的おみくじがあった。

「一回五百円だよ、その兄ちゃんやっていけないか？」

誘われた。

一回五百円とは高いなあ……と思いつつ、やってみることにした。

「弾は五発だ。頑張れよ」

おっちゃんに応援されながら最初の弾を発射する。

残念ながら的には当たらず外れてしまった。

あと4発。

ちっちゃい的は一発で大吉になる。だが、当てにくい。

おおきい的は連続であてれば大吉にはなるが……当てやすい。

どちらを狙うべきか。

「ま、俺が狙うのは勿論こっちだ！」

そういつてちっちゃい的をねらいに行く。

2発目、3発目と撃つが、当たらない。

（あいつを天道だと思え……！）

ポン！

勢いよく発射された弾は、そのちっちゃい的に当たった。

「よしっ！」

「ほう、よくあたったな」

これで今年は天道に勝てそうな気がする。

まあ最後の弾を外して結果は吉だったけど。

「それくらいがちょうどいいんだよな」

けっして負け惜しみではない。

とりあえずおっちゃんから賞品のクラブも貰ったし、家に帰るか。

「ただいま」

「おかえり。おみくじどうだった？」

「吉だったよ」

「それはまたいいわねえ」

ほらやつぱり。大吉なんて欲張らない方がいいんだ。

ま、そんなことより学校に行く準備をしないと。

俺は二階へあがり、荷物を用意した。

「あれ、あんたもういくの？」

「うん、そろそろ練習したいから」

「それなら止めないけど……」

よし。忘れ物は無いな。思い残すことは……むしろ学校にあるかも。

「それじゃあ行ってくるよ」

ボタン。

俺は家を出る。

「もう少しゆっくりしてけばいいのに。にしても、手がからなくていいわねえ」

親切高校行きのバス乗り場へ向かう。

途中で面白いものを見つけた。

「あれは……少年野球か。俺もあんな頃があったのか」

小さい頃は、ボールを投げてもなかなかストライクゾーンに入らなかった。

スピードも全くなかったし。

「さてと、そろそろ行くか……え!？」

奥から天道とその彼女がやってきた。

天道の方は俺に気づかずそのまま横を通り抜けていく。

「よお。今日もデートとはいいい御身分だな」

「え？君だれ？」

忘れてやがる。本当に自己紹介してくる奴が多いのか、単に忘れて
いるだけなのか。

どちらにしてもムカツクな。

「前にも自己紹介したんだけどな」

「それで、君も勝負するのか？」

しよ、勝負？なんか変な方向に進んだが、望むところだ。
俺はピッチャーだが、こいつの球を打って見せる！
と、思ったのだが。

「はい、それじゃあこのミットを使ってね」

そういつて、天道の彼女から渡されたのはキャッチャーのミットだ
った。

待てよ。なんでミット？

「おい、普通勝負って言ったら一球勝負のことじゃないのか！」

「そりゃそうだけど、ここにはキャッチャーがいらないから。俺がボ
ールを投げるから、

それで君が勝敗を判断してくれ」

なんじゃそりゃ。

しょうがないのでとりあえず構える。

奥から天道がゆっくりと足をあげ、ボールを投げってくる。

ビュッ!!

さっきの話仕方などとは裏腹に、とんでもない球威のストレートがきた。

そのスピードに俺はボールを落としてしまった。

「あ……」

「気にしないでいいよ。普通は俺のボールを捕れないから」

くっ!

「お、覚えてろよ!」

最高の負け犬のセリフだった。

「あ、名前……」

「別にその他大勢なんだからいいじゃない」

「それもそうか。それじゃ、デートの続きをしようか」

「ちくしょう、ちくしょう!」

「なんだか西園寺君、気合が入ってるでやんすね。何かあったんでやんすかね……」

「さあ？」

奥で田島と荷田君が何か話している。

とりあえず、天道に投げ勝つためにもっと練習しないといけないな。

第21話 「官取……ドンマイ」

学校に戻ってきて数日。

天道の一件があつてから、最近は練習にとっても集中している。

「最近頑張ってるでやんすね」

「うん。でも、天道に勝つためにはもっと頑張らないとな！」

「そりゃそうでやんすけど。怪我だけはしないようにするでやんすよ」

荷田君に言われた。

どうやら俺は怪我でもしそうな勢いで練習してるらしい。

ただ、それくらいしないと天道に勝てる気がしない。

「ま、なにかあればオイラに相談してほしいでやんす。少しは役に立つと思うでやんすよ」

「ありがとう。じゃあ早速投げ込みしたいから、受けてくれる？」

「合点でやんす！」

こうして、しばらく俺は荷田君と練習を続けた。

凡人でも勝てることを天道に示さないとな。

「そついえば最近西園寺君は速球を投げるときに何かクセがあるでやんすね」

「そつ？普通に投げてるだけなんだけど……」

何か癖があるらしい。

もし、横回転がかかっているとかなったら嫌だなあ。

つまり軽い球って事だから。

「ノビがいいというか、なんだか早く見えるでやんす！」
「え、本当に!？」

あれが原因かもしれない。

最近買った本の中に、『投げろ! ジャイロボール』という本があった。

もしかしたらジャイロボールに近くなっているのかもしれない。

「もし、高校生でジャイロボールを完璧にマスターできたら凄いでやんす!」

「今度、また練習してみるよ」

荷田君が心を読んで会話してるからなにか話のテンポがおかしい気がするが、

そこはまあ気にしない事にする。

「それじゃあとろあえず今日はこころ辺で切り上げるとするか」
「そうでやんすね」

荷田君は立ち上がり、俺の方へ駆け寄ってくる。

俺は荷田君が来たのを見て、一緒に部室の方へ戻った。

部室に戻ると、官取がいた。

「ん、官取何してるんだ？」

「いや、さ。実は監督に渡したいものがあつて探していたんだけど居なくてさ」

そう言った官取の手には、紙に包まれていたが一目で監督の好物だということが分かった。

……コイツ。

まあ俺も数回やったことがあるから人のことは言えないのだが。

「外の方にいなかったんでやんすか？」

「それがいなかったんだよ。グラウンドの方はだいたい探したんだけどさ」

そ、そこまでして渡しに行くのか。

こいつ最低だな。

俺も人のこと言えないけど。

その時、部室の扉が開いた。

ガチャ

「ああ、腹減った」

「今日の練習はハードだったな。やれやれだぜ」

岩田と越後がやってきた。

「ん？官取。それ食べ物？」

「いや、そうだけどお前にあげないからな」

岩田が物欲しそうに官取が持っているものを見つめる。

官取が一步引くが、岩田がジリリ、と寄ってくる。

「いやいやいや、お前のじゃないからな!？」

「うん。分かってるよ。ありがとう」

「ありがとう!？」

哀れだな、官取。

残念ながらそれは岩田によって食べられる羽目になる。
周りで見ていた越後とかは腹を抱えて大笑いしている。

「それじゃあいだきまーす」

「あーっ!」

パクッ

食べられてしまった。

結構あれ高そうな奴だったな。不憫なヤツ。

「おいしかったよ。まだ他に持ってないの？」

「あつたとしてもこれ以上はあげないからな……トホホ」

官取は少し涙目になりながら寮に戻る準備を進めている。
俺はもう用意したので寮に向かうことにした。

「それじゃあ先に帰ってるよ、荷田君」

「分かったでやんす!」

俺は扉を開け、外に出た。

普段通りの道を歩く。ただ、普段聴かない声が聞こえた。

「……こと……です……！……監督！」

この声は……北乃先輩？堀越しに話をしているみたいで、何を言っているかは良く解らない。

少し近づいてみるか、堀越しならバレないだろうし。

「まだまだあんなものじゃ足りんな」

「僕にあんなことしといて、ただで済むと思ってるんですか？」

監督もいるようだ。

あんなことってというのは……前の先輩が怒られたことを言ってるのか？

もしかしたらそれ以外にも何かあったのかもしれないけど。

「いつも監督には差し入れをさせてもらってますよね。それに、機材の方も提供してるし」

ふうん。たまに機材が新品になってたのは不思議だったけど、北乃先輩がやってたのか。

あ、だからいつも練習サボっても俺は大丈夫って言ってたのか。

「フッフ、そういうことですよ、監督」

「つまりお前の親御さんや、お前が俺の為に尽くしてくれてるってことだろう？ありがたいことじゃないか」

「へ！？」

わお、そりゃびつくり。なんという解釈。

「俺は頭が悪くてな。つまり、俺の為にやさしくしてくれてるわけだ」

「あ、いや」

「いつとくけどな、北乃。俺はお前のことを過小評価はしていないつもりだ」

急に何をいいだすんだ？この監督は。

「俺らが甲子園に行くためには、お前のようなパワーを持つ選手が必要なんだ！だから、しっか

りとその存在を後輩にも見せ付けてくれ！頼んだぞ」

「急にそんなこと言われても……けど、頑張りますよ俺！」

あ、なるほど。上手く言いくるめたわけだな。

「あ、それとな」

まだ続きがあるのか。今度は何だ？

「俺らが甲子園に行くためには対天道用の最新のバッティングマシンが必要だ。親御さんによろしく言っといてくれ」

おい、監督。

いい話に付け込んで何をいつてるんだ。

まあ練習機材が良くなるなら俺はいいけどさ。

「はい、分かりました！親に言っておきますよ！」

タタタタタ……

北乃先輩はどっかに言ったようだ。

さて、俺も帰るか――

「おい、そこにいるのは誰だ？」

おう、ばれてたのか。や、ヤバイな、どうしよう。
しょうがないので姿を見せる。

「お前そこで何をしてた？」

これは素直に言った方がいいのか？それとも見ないふりをした方がいいのか？

……見てないことにしよう。

「いえ、何も！たまたま通りかかっただけです！」

「よし、それなら行け。さっきのことは黙ってる」

「はい！」

ま、だいたいこうなるのは分かってたけどね。

後日。

なんかめちゃくちゃ高級そうな機械が野球部に届いた。
北乃先輩……なんかいろいろと見直したよ。

第22話 「テストとその後 前編」

「どうですか？この学校は」

理事長が一人の人物に話しかける。

「誠に素晴らしいです。この国で失われつつある規律や精神が、この学校が防波堤であることを確信いたしました！」

「校長先生、文部科学省の人もこのように言ってくれてますぞ」

どうやらこの人は文部科学省の人らしい。

「はい、ありがとうございます」

文部科学省の人は、ただし……と述べた。

「この学校は共学校ですよ？これでは、少々実態に問題があるかと」

理事長はこれについて答える。

「わが校のオリジナルの制度なんだが、気に入らなかったかね？」

「個人の意見としてはともかく、上の方に言うとなるとちょっと……」

……

「そもそもこの学校は戦前の英国パブリックスクールをモチーフとしたもので、そもそも

男子しかいなかったのだよ。そもそも学問は男の——」

「ああ、分かります、分かります」

理事長の言葉を文部科学省の人が遮る。
そして、

「昔はそういう時代でしたからね。ですが、今は男女同権の時代です」

「その考え自体が間違っておる！若い男女が、せ、席を同じくするなど！」

理事長は興奮する。

その様子を見た校長は、まあまあと声をかけた。

「それで、教育委員会は現状の改善を要求するのですかな？」

「はい、そういうことです」

「わしは、わしはいささか不愉快だ！校長先生、あとは任せました」

スタスタスタ……

理事長はどこかへ行ってしまった。

「理事長は強固な教育理念を持っていますから」

「その、ぶれない姿勢は誠に結構なのですが。……で、大丈夫でしょうか？」

「ま、こういう日が来るのは予想してましたから。一応用意はしてましたよ」

「今から小テストを返すぞ、そこで寝てる二人、起きろ」

大河内先生の声だ。

寝ているのは越後と俺だ。

「ん、むにゃ……。今から何するんですか？」

「テスト返した。ちゃんと起きておけ」

そうだ、少し前に数学の小テストを行っていたな。
結構自信あるけど……

「勝負だ、分かってるよな！越後！」

「ああ、このテストは自信があるからな。負けたら焼きそばパンだぜ？」

「どうせなら牛乳もつけようぜ」

「望むところだ！」

「いいから、早く取りに來い越後。お前の番だ」

先生に言われ越後はテストを取りに行く。

俺も名字の最初が『さ』なのですぐに呼ばれるだろう。
俺は先生に呼ばれる前に立ち上がり、ゆっくりと歩く。

「お、西園寺。今回は頑張ったな」

「もちろん。俺が監督生特有の白い制服を着るのもすぐですよ」

「ハハ、頼むぞ」

先生から解答用紙を貰う。

そこには7点の文字があった。

……よし！7点、これなら勝ったな。

「どうだ、西園寺？勝負するか？」

自分の席に戻るとそこには余裕たっぷりの越後が話しかけてきた。
こいつも自信があるようだ。

だが、ここで勝負から逃げるような俺ではない！

「そんなこと訊かなくても分かるだろ？さあ、勝負だ！」

そう言つて、俺たちは構える。手に解答用紙を持つて。

他の生徒がおもしろそうだ、と言わんばかりにこちらを見ている。
ある意味、俺たちの対決はクラスの名物にもなっていた。

「いっせーのせ！」

掛け声とともに俺たちはテストを机に叩きつけ、相手の点数を確認する。

そこには6の数字があった。

「うわ、西園寺に負けた！」

「どうだ越後！これが俺の実力だ！」

越後はゆっくりと崩れ落ちた。
ふふふ、どうだ越後。

「負けたよ。だけど、次は負けないからな！」

「残念ながらそれは無いな。次の時は俺はもつと賢くなっているからな」

「いや、こんどこそ勝って見せる！」

このやりとりを遠くで見ていた荷田君はあきれた。

このテスト、50点満点であり、中学校レベルの問題も含まれていなかった。

分数ができない彼らにとつて、二次方程式や三平方の定理は無理だろうが、単純な式の計算も10点ほどあつたはずだ。

逆に一体どこを正解したのか？

荷田君は疑問に思った。

その7点のテストをみてる。

さらにあきれた。正解してる部分は中二でならう部分が2点。

他は高校で習った部分なのだが、相当難しい場所だった。

だが、西園寺君はカンニングをするようなやつではない。

つまり？

5点はあてずっぽうだ。

次に越後の方を確認する。こちらは、単純な計算を6点だった。

「……むしろ越後の方が頭いいでやんす」

もちろんこの言葉はあの二人に聞こえないように言った。

その後、俺は食堂に行き、越後に焼きそばパンと牛乳を奢ってもらった。

さてと、どこで食べようかな？

- 1、教室で食べる。
- 2、部屋で食べる。
- 3、どっか探す。

1は……誰かに見られながら食べるのはなあ。2は、北乃先輩がいたら食べられるし。

ここは3かな。

廊下を歩いていい場所を探す。
そこである場所を考えた。

「屋上にでも行ってみるか！」

階段が偶然近くにあったので、屋上に向かって歩く。

テクテクテクテク……

屋上の扉を開けて、外の空気を吸う。

ただ、今は2月でとても寒い。

「まあいいか、動くのもめんどくさいし」

そういつて俺は食べ始める。

うん。食堂の焼きそばパンは絶品だ。

モグモグ。

すぐに全部食べ終わってしまった。

さて、まだ小腹が減ってるんだが、戻るとするか。練習もあるし……ん？

ガサガサガサ……

高科だ。

アイツ……俺に見つかり過ぎだろ。練習あるけど、行ってみることにするか。

第22話 「テストとその後 前編」(後書き)

yoridukiです。初めて前編後編に分けてみたけど、全く意味がないと思いました。……どうでもいい後書きだ。

第23話 「テストとその後 後編」

俺は今、階段を下りて森の方に向かっている。

森の方で高科を見つけたからだ。

方向からしてきつと、あの扉の方に向かったんだろうけど……

「今回は何しに行ったんだ？」

まあ行けば分かるか。

とりあえず森についたのでここから先は気をつけて行く。

じゃないと犬とかにやられる危険性があるからだ。

ガサガサガサ……

整備されていない獣道を歩く。

数十分歩くと、目的地に着いた。

ただ、高科はもう扉をでて行ってしまったようだ。

「なんだ、もう出て行ったのか。何をするのか聞こうと思ったのに……」

しょうがないのでグラウンドに行くことにする。

まあ、今日は練習時間が短かったはずなので、また後でくるとしよう。

という訳で再度ここに来てみた。

途中で北乃先輩に捕まったが、まあ何なく切り抜けられた。
ちなみに、北乃先輩からはジューズを投げられた。

まあ俺のナイスキャッチによってなんとかなったけどね。

「……………にしても遅いな」

扉の様子とかを見るに、まだ帰ってきてはいはずだ。

だが、練習は2時間ちよつとあったので、森を行ったり来たりした
時間を含めると3時間
近くになる。

外でどんだけ買っているんだか。

「ふあゝ」

急にあくびが出てしまった。

そういえば昨日は睡眠時間が少なかったな。無論、北乃先輩のいびきがうるさくて眠れなかったんだが。

「いかん、寝ちゃだめだ」

そう思っではいるものの、睡魔は確実にやってきている。こ、こんなところで寝たら風邪を引いてしまう。

「そつだ、スクワットでもしたら……zzz……」

結局寝てしまった。

だいたい1時間後くらいたっだろうか。

ガチャリ。

高科は戻ってきた。

ここから高科視点

「ふう、今回も外に行ってみたけど……この新商品、意気地がな
いですねえ」

とりあえず戻りますか。

そう考えた高科は、女子寮へ帰る道に身体を向ける。

「つて、ふえ！？」

こ、これは一体！？なんとも情けない声を出してしまったけど、こ
れは一体！？

高科の目線の先には壁にもたれかかって、まるで死んでいるような
西園寺がいた。

「さ、西園寺君……！？」

指でつついてみるが特に返事もなかった。

一体なんでこうなったかが全く分からない。

ここらへんに罫をしかけたこともないし……

慌てていると、西園寺君の方から呼吸音が聞こえてきた。

「スー……」

「ね、寝ているだけ……？」

なんだ。寝ているだけですか。心配して損しましたよ。

……そうだ。心配させられたんだから、お礼をしなくちゃね。

そう言っつて高科は西園寺の前に座る。

そつ。これはこんな所で寝てる西園寺君が悪いんですよ！

……………

ここから西園寺視点（もとの形）

しばらくたった。

「ふぁ………」

ん、俺は少し寝てしまったようだ。

さて、高科は来てたのかな？

俺はゆっくり身体を起こし、周りを見回してみる。

向こうの方に、何かから逃げているような高科がいた。
何か袋を持って。

一体どうしたんだ？

「おい、高科！」

この言葉を聞いて、高科の身体が一瞬ビクッ！と跳ねる。

「え、あ、西園寺君、もう起きたの？」

「どうしたんだ？そんな詰まったような言い方をして」
「あ、いや……ちょっと」

なんだか俺と距離を置いている。
むう、何か悪いことしたか俺？

「もしかして、外で何か事故でも起こしたのか？高科ならやりそう
だもんな」

「まさか！あたしはそんなヘマをしないですよ！」

なんだかムキになって否定されてしまった。
じゃあこの微妙な距離感は何なんだ？

「……」

なぜか高科は斜め上を向いている。
怪しすぎる。絶対何か隠してる。

「なあ、高科。何かないのか？」
「へ！？あ、そ、そうですね……」

高科は考え込み始めた。
いや、なんで考える必要があるんだ？

「なら、これで許してもらうことにしましょう！はい、これ！」
「これは？」

俺は高科から小包を買った。
やけにきれいにラッピングされてるけど……何だ？

「さっき外で買ってきたお菓子ですよ、お菓子！」

「ああ、そうなのか。確かに甘い臭いがするな。ちなみに、返せと言ってももう返さないかな」

「別にいいですよ」

どんなお菓子なんだろう。部屋に持ってっても面倒だし、後で食べるか。

「それじゃ、あたしはこれで退散しますね！」

「あ、もう行くのか？」

「いや、行きたくないんですけど……行かないといけないんです！」

タタタタタ……

なんだかよく解らないことを言って行ってしまった。

最近なんだかおかしいな。今度会ったら訊いてみるか。

それより今は……

「お菓子だ！」

なにに、シールが貼ってあるぞ。

「えっと、St Valentine? なんだこれ、セツトヴァルエンチン？」

どっかの店の名前かな? 中身はチョコレートのようだけど。

とりあえず食べてみる。程良い甘みが口の中に広がった。うん、チョコレートを食べたのな

んて久しぶりだな。

ま、感謝するか。

食べた後に俺は寮へ帰った。

すると、荷田君にめちゃくちゃ笑われた。鏡を見て来いと言われたので、言つとおりに
してみると、油性ペンで顔に落書きされていた。

……今日のおかしい態度はこれだったのか。

第23話 「テストとその後 後編」(後書き)

yoridukiです。

実はこの11月からテストが5つ&受験勉強が合い重なって、更新速度が劇的に遅くなります。申し訳ありません。

12月からはまた頑張りたいと思います。

あと、このキャラの出番すくねーだろゴルァ!という方は、感想の方に宜しく願います。

頑張って検討はしてみます。

第24話 「でシ」

その男は、崖で”何か”をやっていた。

その動きは、非常に洗練され、なんとも無駄のない動きだった。

……シュッ！ ……シュッ！

その男は親切高校の教師であつた。

その動きを見ていた俺は、不思議と身体が疼く——ってことはないが。

——あれは拳法かな？なんで先生が拳法をしているんだ？

話は数日前に遡る。

「ねえ、パトラッシュ田君。俺、もう疲れたよ……」

「誰がパトラッシュ田でやんすか！そんなこと言わずに真面目に授業を受けるでやんす！」

んな事言われてもなあ。そもそも先生が何を言ってるかも分からない

いし。

どうせ生物の授業受けても受けなくても一緒なんだよ……

「と、まあパ田君は俺の心が読めるから何言ってるかわかるよね？」

「パ田って誰でやんすか。まあ質問の答えとしては分かるでやんすよ。だからと言って

授業をないがしろにしちゃだめでやんすよ」

どうやらパ田君は真面目なようだ。

いや、もしかしたら俺が不真面目なのか？

ああ……もう寝ようかな。

「結局寝るでやんすか」

「まあね。ほらあれをってみろよ。越後だつてあんなにやすらかに寝ているんだよ？」

俺の指先にはぐっすりやすやと眠っている越後がいた。

だから成績が伸びないんだよ。

俺が言えた事じゃないけどな。

「それに、どうせ俺が授業聞いたつて理解できないしな」

「いっつも思うでやんすが、西園寺君や越後、岩田たちはどうやってこの学校に入学した

んでやんすか？」

ほめられてしまった。いや、照れるなあ。

「……ほめてないでやんすよ」

パ田君が何か言ってるが聞こえないことにする。

「もう任せるでやんす。……そういえば生物の善先生って個性的な顔してるでやんすよね」

zzz……俺は寝ますよ〜っと。

バシッ！

叩かれた。

「ちゃんと人の話を聞くでやんす！」

「パ田君も俺と話したら点数下げられるんじゃないか？」

「まあ話をしたら確かに怒られるでやんすけどね」

ほらやっぱりそうだ。ならこれ以上俺に触らないでくれ……

「いいから見ろ！でやんす」

「はいはい分かったよ。まあ確かに個性的ではあるけど」

確かに善先生の顔はスルーできないな。ん？なんだあれ？おでこに……傷？

「昔の怪我でやんすかね？」

「いや、焼印っぽいけど」

どっかで見たことあるな……
一体なんだっけ。

「うーん、あ！思い出したでやんす！あれは拳法の映画でやんす！」
「あ、そうだそうだ。拳法の映画にそういう人出てたな。」

そう、金粉の人と闘うシーンが印象的な映画だったはずだ。
けど、あの人そんな映画に出てたのかな？

「そ、それは無いでやんすよ！」

「なんで？パ田君」

「そういう人はそれ相応のオーラがあるはずでやんす！それに顔だ
つて」

顔は失礼だと思っただが。

まああの顔であれば……ちょっとな。

いやいや、人を見た目で判断するのは良くない！ってじつちゃんが
言ってたような気がする。

「もしかして……」

「無いでやんす！そんなの絶対にあってはだめでやんす！」

「やけに否定するな……」

実はパ田君のおじいちゃん……ってわけではないな。

そしてその数日後。

「いくよ、荷田君！」

「オッケーでやんす！」

カキーン！

俺たちはノックの練習をしていた。

「もう一球いくよ！」

「OKでやんす！」

カキーン！

荷田君はキャッチャーなのにノックをしているのには突っ込まないでほしい。

つと、ちよつと遠くに飛ばしすぎたか。

「あ、いったでやん……す！？」

「やばい！」

なんと俺が打った打球は荷田君の上を越えて、その奥にいた善先生の方に向かって行った。

やばい、先生は気づいてない！

「先生！ボールが！」

大声で叫ぶも善先生には届かなかったのか、こっちを振り向かないで歩き続ける。

もうだめだ、そう思った時。

パシッ！

素手なんともきれいにキャッチをした。

……え？

「西園寺君返すでシよ！」

善先生から俺に返球が来た。

ノーバンで。

おい。俺今ホームベースに立ってたよな？で、善先生はだいたいレフトの奥深く。どうや

ってここまでノーバン返球できたんだ！？

「すごいでやんす、善先生！きれいな返球でやんす！」

まあいいか。

にしても善先生は森の方に入ってどこに行くんだろう？

あとでつけてみるか。

そして現在に至る。

そう、善先生が崖で拳法らしきものの練習をしていた。

少しすると、善先生が手を止める。

あ、一旦休憩するのかな？

「ふつつ……。」

……

しばらく沈黙が続く。

「——そこで見てる者、でてくるでシ！」
「えっ！」

バレた！？あそこから50m離れていたのに！？
一体どういうことだ？後ろに目でもついてるのか？

「隠れても無駄でシ。そこにいるのは分かっているのでシ」
「俺です。先生」

しょうがないので顔を見せる。

なんだ、これから面白くなりそうだったのに。

もしかしてここから海の水を割る……とか期待したけど、さすがに無理だな。

いくらできたとしても川くらいだろうな。

「君は……西園寺君。なぜコソコソ隠れて拳法の練習を見てたでシ？」

やっぱり拳法なのか。

「偶然通っただけですよ。でも、拳法をやるなんてビックリしました」

「……！！なんで拳法って知ってるでシ！？」

え？

「いや、さっき自分で言っていましたよ」

うん。普通に言ってた。自爆したんだな。

「……。ま、まずいでシ。ダメでシよ。絶対此の事を他の人に言うてはだめでシよ！」

「は、はい」

どうしてだ？なんか秘密があるのかな？

ま、どうでもいいけど。

「約束でシよ！約束を破ったら評定を下げるでシよ！」

「分かりました」

タタタタタ……

そう言っつて善先生はどっかに行ってしまった。

なんだ、もっと話を聞かせてくれたらよかったのに。

まあ、話したくなさそうだったけどさ。

しかし……

「生物の評価……俺はこれ以上下がり様無いんだけどな」

少し自分自身に悲しくなりながら、俺は寮へ帰った。

第25話 「少森寺」

「えー、だからこのDNAは――」

今日も善先生の授業を受けている。

DNAって言われてもねえ。俺には何がか分からない。そんなことよりあの空を見てよ。今日は雲ひとつない空だ。

「西園寺君。変なこと考えてないで授業に参加するでやんす」
荷田君に注意された。

まあ変な事を考えていたのは自覚していた。
今さらだけど何考えてるんだ、俺。

「つまり、このテロメアが……なのでシ」

そういえば善先生のでシって語尾。
あれ珍しいな。なんとも不思議な語尾だ。

……結局俺は授業を受ける気がないらしい。

しょうがない、いつものようにパラパラ漫画を描いとくか。

「ふーん、けっこう絵が上手いでやんすね」

いきなり隣の荷田君がこちらを向いてきた。

そりゃそうだ。俺は何年間こうしてパラパラ漫画を描いてきたと思ってる。

小学校のころからずっとこうやって描いてるのだ。

「そこ、ちゃんと授業を受けるでシ」

「……はい（でやんす）」

怒られてしまった。

そのまま荷田君は前を向くが、俺は結局描くことをやめない。

うーん、何を描こうかな？

普段は野球を描いてるけど、ここは趣向を変えてサッカー……いや、バスケットでもいいかな。

「……そこ。真面目に授業受けるでシ。次は無いでシよ？」

おお、怖い怖い。拳法をやってる人の脅しは怖いよ。

けど、2度あることは3度ある……そんな命知らずな事はやめておくか。

しょうがないので俺はパラパラ漫画を描くのをやめた。

黙々と授業を受ける。

キンコーンカーンコーン。

終わりのチャイムが鳴った。

ああ、やっと終わったよ。長かったなあ。
頭が痛い……

「それじゃあ今日の授業はここまででシ」

そういつて善先生は教室を出て行く。

そういえば、前回のあの話。あの秘密結局聞いてないな。
ちよつと聞いてみるか。

俺は廊下に出て善先生に近付く。

「善先生」

「ん、何だ君でシか。……何か用でシか？」

善先生は少し警戒しながらもこっちに身体を向けた。

よし、話は聞いてくれそうだな。

「そういえばあの拳法の話はどうなったんですか？」

「……！！せ、生物の評価点を下げるでシよ！」

やっぱりそう来たか。

でも、それは俺に通用しない！

「俺、今生物は最低ですから」

「……………！！わ、分かったでシ。そのかわり、絶対に約束は守るでシよ！」

「俺も男ですから」

俺が一步上回ったようだ。

なんにせよ、これで先生がなぜ拳法をしているかが分かるな。

先生はため息を一回つく。そして話を始めた。

「とある山奥に……いくつもの頂を越えたその先にある古の寺院、その寺より出でたる僧、

吐く息は砂塵を巻き起こし、打ち出す拳は岩をも砕き、脚を踏みならせば大地は揺れ動く

という寺院——その名を『少森寺』。一步踏み入れれば、死ぬまで出ることの叶わぬ場所」

「よく出てくれましたね」

先生はそんなすごいところにいたのか。にわかには信じられないけど。

「いや、昔の話でシ。今はそこまで厳しくないでシ。とにかく、そんな伝説の残る寺で、

私は修業をしたのでシ」

「なるほど」

「先日のあれは、少森寺にいた頃の修行でシ。あの寺を抜けてからも1日に1回は練習をしな

いと落ち着かないのでシ。あの山を下りてから10年も経つというのに……でシ」

そのまま先生は続ける。

「私が最初入門した当時は初歩の修行にも全くついていけず、たった1杯の飯さえ喉を通らな

かったでシ。それでも自分を変えるため、数々の苦行を乗り越え、ついに私は……」

「あの、ちよつとつて言いながら結構喋ってますよね」

中々に長い。もつと短い話だと思つてた。
それに、次の授業も始まりそうだしな。

「……！！お、思わず口が滑りそうだったでシ。これ以上は誰にも
言つてはいけないのでシ」

む、これ以上は聞かせてくれなさそうだ。
なら、ちよつとせこいが――

「まあまあいいじゃないですか。じゃないとみんなにも話したくな
っちゃいますね。ショーシン
ジのハナシ！」

これを言つたら先生も続きを聞かせてくれるだろう。

「ぐっ！……なかなかにせこい手を使うでシね。……分かったでシ。
昼休みに屋上にくるでシ」

以外に簡単に折れてくれたな。
ま、昼休みに屋上に行くとするかな。

「きたでシね。不本意ながら、続きを離すでシ」

「それで、苦行を乗り越えてどうなったんですか？」

「私は得たのでシ。その実力を師匠に認められたものだけが挑戦できる、『少森寺八連闘』の権利を」

「八連闘…… 8人の僧と闘うんですね」

「そ、そうでし。何で分かったでシ？」

「名前から想像しました」

「……！！」

いや、名前がそのままだし。
むしろ分らない人の方が少ないんじゃないか。

「と、とにかく私は少森寺の達人たちと試合をすることになったんでし。しかし、それが行われる前日に……」

「前日に？」

一体何があったんだ。

「怖かったのでシ。かつては生きて帰ってくることすら難しいと言われたこの試練。万が一のことがあったらと考えてしまつて……！」

逃げ出した訳か。

まあそりやそうだよな。そんな言い伝えがあるならねえ。

「その翌日に寺がどうなったかは分からないでシ。ただ、ひたすらに山を下りて、たどりついた

先が」

「この親切高校だったんですね」

「そうでシ。……今でも夢に見るでシ。あの時、逃げださなかったら、八連闘をしていたら。」

「もしも負けていたら……」

んなこと今さら後悔してもなあ。

「しかたないじゃないですか。死んだら元も子もないですし」

「そ、そうでシか？」

「そうですね。先生はこの教師として立派に生きている。それでいいじゃないですか。誰にも恥じることは無いと思いますよ」

うん、自分がいいまとめ方だ。

「……有難うでシ、西園寺君。このことを話したのは君が初めてでシ。逃げたことで卑怯者と思われるのが嫌で、誰にも言えなかったでシ。まさか、君みたいな学力の子に教えられるとは」

が、学力は関係ないだろう！？
ひでえ。

「でも、なんだかすつきりしたでシ。」

「生意気ですいません」

「いや……本当に楽になったでシ。おかげで今夜はいい夢えお見れ
そうでシ」

キンコーンカーンコーン。

「おっと、鳴ったでシね。それじゃあ行くでシ！」
「はい」

善先生は校舎の方に戻って行った。

にしても、あの顔で拳法か。……似合わないなあ。

第25話 「少森寺」(後書き)

結局前と更新頻度が変わってない気がするけど、サボってるだけです。

第26話 「黒い塊」(前書き)

もし脱字や誤字、その他諸々指摘があつたら宜しくお願いします。

第26話 「黒い塊」

俺たちは今日も練習があつた。

「はあ、今日も練習があるでやんす」

「やれやれだぜ」

「まあそんなこと言わずに頑張ろう」

毎日のようにある練習に嫌気がさしながらも、俺たちはグラウンドへ向かった。

とは言つても、この学校に入れば、否が応でも部活に入らなければならぬため、結局

どの部活でも毎日練習漬けになる。

しかも一年生は雑用ばかりなので嫌気がさすのは当然だ。

……まあ野球部はその中でもとりわけきついのだが。

「しょうがない、西園寺。練習終わったら自主練に付き合ってくれよ」

「ああいいよ」

もちろん雑用だけじゃつまらないので、俺たち一年生はいつもこうして自主練している。

疲れてる時は無理だけど、少しでも早く上手になりたいからな。

「それじゃあ二人とも早く行くでやんす！」

おっと、早く行かないと練習に遅れてしまうな。

俺たちは少し早足でグラウンドに向かった。

「どうだ？今日も俺と練習しないか？」

「またですか？」

最初がキャプテンの言葉。次が俺の言葉だ。

どうも基宗キャプテンは俺を実験台にするのが好きなようで、頼むから笑顔で話しかけないでほしい。

前にやったあの練習、あれでどれだけ酷い目にあっただか覚えてるんだからな。

そのせいでキャプテンの笑顔は悪魔の顔にしか見えない。

「まあまあ、実験台になるくらいいいじゃないか」

「だんだん本音が出てますよ！？」

実験台で。

もう完璧に殺る気まんまんだな。

「結局何を言っても俺はやらされることになるんですよね？」

「なんだ、よく解ってるじゃないか」

もうどうしようもないので俺は覚悟を決め、先輩についていくこと

にした。

さて、今日は一体何をするんだろうか。

また無茶苦茶なものなのか、やる意味が分からないものをするのだろうか。

そろそろまともな練習をしてほしい。

「それじゃあここでしばらくここで待ってくれ」

そう言われて待たされた場所は、グラウンドの中でも人が少ない場所だった。

どうもその新しい練習法は広い場所を使うらしい。

遠くで見えている越後や田島は何が起こるんだろうかとこっちを見ていて、官取や荷田は

こっちを見て手を合わせている。

確実に御愁傷様、と考えているな。

しばらくすると奥から基宗キャプテンがバッティングマシンを持ってきた。

それだけ聞いたら普通だと思うだろうが、やっぱり普通ではなかった。

では、どこがおかしいのか？

数だ。なぜかバッティングマシンを5台持ってきている。

今から何をするんだ？一回で5個の球を一気に打つとか？

それとも、高速で連続バッティングとか。

だが、そのバッティングマシンスは、俺を囲むように設置された。

今そのバッティングマシンを起動させたら間違いなく俺は危険な目に遭うだろう。

「で、このバッティングマシンは一体何ですか？」

「ふふふ、聞いて驚くな。実はこの中には鉄球が入ってるんだ。野球のボールじゃないぞ」

……ワンモアプリーズ。

「実はだな、とある本を読んでいたんだが、木にぶら下げた鉄球をバットで打つという練習法があるらしいんだ。だから、俺はそれを守備面で使ってみようと思う」

やっぱりとんでもない発想だった。

この人、勉強は出来る方なのに、なぜこういう無茶な事を簡単に思いつけるのか。

その発想力がすごい。これこそまさに『発想の暴力』だな。

「これを平気で捕れるようになれば、きっとお前はどんな球でも平気で捕れるようになるはずだ」

「その発想は危険だっていいかげん気づきませんか？」

「知らない」

ひ、ひでえ。

この人……あれだな、将来はマッドサイエンティストだな。にしても、なんか俺落ち着いてるな。自分でもびっくりするほどだ。たぶんもう諦めてるからなのだろうけど。

「キャ、キャプテン？」

「何だ？」

「今さら思い直す……なんてことはないかな、と」

一応訊いては見るが、ただの時間稼ぎだというのは自分でも自覚していた。

常識的に考えて、間違いなく怪我するだろう。運が悪かったら冥界行きかもしれない。

「何を馬鹿な事を考えてるんだ、さつさとやるぞ」

俺の言った言葉は馬鹿げていたらしい。

うーん、俺は馬鹿な事じゃないと思うんだが。

皆はどう思っかな？むしろ俺の方が正しい気がする。

くっ、何か助かる術はないのか……

「そ、そうだキャプテン！」

「まだ何かあるのか。早くしてくれ」

キャプテンはバッティングマシンの調整をしている。

とりあえず話しかけたものの、話す内容は考えていない。くそ、何か、何でもいいからないのか！

その瞬間奥でこっちを見ていた田島たちと目が合った。

「あの、他の田島や荷田君たちはやらせないんですか？」

「もちろんお前が成功したらやらせるつもりだ」

あ、成功したらやるのか。

あいつらのためにも頑張つてやってみようか。
俺の苦勞を分かせてやらないとな……じゃなくて！

今はこの場を切り抜ける方法を見つけないと。
いや、無理だというのは分かつてるけどさ。

どうやらバッティングマシンの調整が終わったようで、基宗キャプテンはゆつくりと

腰を上げる。

話しかけるならこれがラストチャンス！

「キャプテン、なんで鉄球でやるんですか？」

「そつえばそうだな……」

お、これはいけるか？

あまり意味が無いような気がするが。

「あれじゃないか？鉄球は重いから、ちゃんと離さないようにというじゃないか？」

「なら、打つときはなんで鉄球なんですか？」

キャプテンは黙る。

そのまま少し考えるそぶりを見せているが、これは『なぜ鉄球なのか』を考えてはいないだろう。

きっと考えているのは『どう反論するか』だ。

しばらくすると基宗キャプテンは顔を上げた。

「別にそんなことはいいんじゃないか？」

うわあい。

キャプテンは目先のことにしか興味が無いようだ。

しょうがない、俺も男だ。覚悟を決めるか。

「お、いい顔だな。それじゃあやるか」

「はい」

そう言ってキャプテンはスイッチを入れる。

さて、どうするか。

キャプテンはなかなか遠い場所に正五角形状にバッテリーングマシンを設置している。

近距離に設置してくれていないからまだマシだが、それでもヤバイ状況極まりない。

だが、俺はやってやる！

とりあえず両手にグローブを持ち、前から飛んできた鉄球を受ける。その次に右から来た鉄球を使い慣れない右手でキャッチすると同時に、

俺の左腕はガクツと下がった。

て、鉄球重っ！

なんとか左のグローブから鉄球を落とし、右手の鉄球を落とす。

（よし、次！）

そう考えた矢先、いきなり右後ろと左後ろから一斉に音がした。ふりむくと高めの位置に鉄球があったので伏せることで直撃は回避

したが、残念ながら

伏せた瞬間に左から足元めがけて鉄球が飛んできた。

「ぐっ！」

脚がふらつき、急いで体勢を立て直す、時すでに遅し。

最初前にあったマシンから勢いよく鉄球が飛んでくる。

ついでに後ろや右からも。

「うおおおおお！！！！黒い塊が飛んでくるつつつつ！！！」

……………その後は思い出したくもない。

「いや、災難でやんすね」

「ほんとだよ……トホホ」

不幸中の幸い、打ち身程度で済んだ。

もうあの人に付き合いたくない……

いつか殺されそうだからな。

第27話 「その男の回復力」

「よし、今から練習をするぞ！」
「ハイ！」

学校の授業が終了し、グラウンドでユニフォームに着替えた俺たちは、基宗キャプテンの合図のもと、練習を始めた。

2年生は肩慣らしにキャッチボール、1年生はグラウンドの周りをランニングしていて
いる。普段、監督が来ていない時はこのようなメニューから始まる。

まあ普段通りランニングしていた訳なんだが……

「ファイトだファイトだ親切高！」

タタタタタ……

俺は掛け声をいいながら走る。

「ファイトだファイトだ親切高！」

タタタタタ……

官取は掛け声をいいながら走る。

「ファイトだファイトだ親切高！」

タタタタタ……

謎の外人が掛け声をいいながら走る。ってちょっと待て！

「誰だあんた！どっから入ってきた！」

「オウ！自己紹介が遅れました。ワタシ、野球の伝道師アルベルト、イイマース！」

いやいやいや、自己紹介とかそういう問題じゃなくて。

しかも野球の伝道師だって？意味が分かん。

まあどうでもいいが日本語上手いな。

たぶん日本に来てからしばらくたってるんだろう。

「で、その不法侵入者のアルベルトさんがこの学校に何の用ですか？」

「オウ、あやうく用事を忘れそうでした！」

どうやら用事があるらしい。

つまり、誰かの親……？こんな金髪天パの外国人が？

あ、新しい英語の先生とか。

にしてもこんな遠いところによく来たな。

「で、その用事って一体？職員室とかになら案内しますが」

「いや、それはダイジョウブデース！それじゃあいつもの事ができまセーン！」

「い、いつも？」

いつもって何だいつもって。

実は毎回この学校に忍び込んでたりしないよな。

「それじゃあ今から野球のことを教えてあげマース！」

「え、野球！？」

なら監督が新しく呼んだのかな？

どちらにせよ教えてくれるのならありがたいが。

そしてアルベルトがそこらへんにあったボールを拾い、1年生と少し距離をとる。

（おい、これどうなってるんだ？）

官取に訊かれた。

と言われても俺が知るはずもない。

（まあいいんじゃないか？）

とりあえず官取に返事をしておく。

「それじゃあ今から投球の極意を教えマース！」

アルベルトが左足を高く上げ、踏みこんでから腕を思い切り振った。それはなんともきれいなフォームだった。

ビシュ！

「へえ！すごくきれいなフォームですね！見直しました！」

そう言つて俺はアルベルトさんの方を見た。

だが、そこにはさつきと違ってなぜか腕を押さえていて、なにか困つたような表情をしていた。

一体どうしたんだ？

「アウチ……」

「？」

「手の骨が折れました。きゅ、救急車を呼んでくだサーイ」

……… たつた一回投げただけで？

「は、早くお願いシマース」

そ、そうだ。先に救急車を呼ぶのが先だな。

丁度よく監督が出てきたのでそのことを伝えと、しばらくして救急車がやってきた。

まあそのまま外人さんは運ばれていったのだが……
何がしたかったのだろう。

その数日後。

「遅いでやんすよ！今から練習が始まるでやんす！」

「ああ、悪い悪い、ちよつと森の方に行つてたんだ」

「もうちよつとマシな嘘をつけないでやんすかねえ」

本当なんだけど。

まあいいか、今日は何をするんだろうな。

「そついえば前の外人なんだつたんだろうな」

「ああ、そついえばそうだな」

「本当にやれやれなやつだったぜ」

やれやれなやつって何なんだ。

突っ込みたいが、無視することにしよう。

「まあ実力はすごかつたでやんすけど」

「まさか一回投球しただけで腕が折れるなんてね。そうそう、あんなやつだったけな？」

俺は向こうの塀の方を指さす。

「たまたまそれっぽいやつが塀をよじ登ってきたから言つただけど、あのよじ登ってきた」

男、先日のあいつじゃないか！

「おい、西園寺。あれ先日のやつじゃないのか？」

「……そうだな」

うわ、もう骨折から回復したのか。なんという回復力。
あ、監督が気づいてあの外人に近付いて行っただぞ。

「おい、部外者は出て行け。じゃないと——」

バキ！

監督が殴られた！？あ、一発でノックダウンした。

監督大丈夫かなあ……じゃなくて！

あの外人——アルベルトさんがこっちに近付いてくる。

「ハロー、先日のボーイたち！今日も野球を教えに——」

「いや、それよりもなんで監督を殴ったんですか！？」

「あれは正当防衛デース」

ど、どう考えても過剰防衛………というか殴っただけだろ。

「まあまあ、今日はちゃんと教えますから落ち着いて下サーイ」

「普通落ちつけられるか！」

「今日はバッティングを指導シマース」

無視された。くそう。

今度はアルベルトさんがバットを探して周りを見回す。そしてバットを見つけたのか、

どっかに歩き、戻ってくるが、その手には何もなかった。

バッティングはどうしたのか訊こうと思ったが、先にあっちから口を開いた。

「ソーリー……さっき殴ったせいで指の骨が折れてしまいまシタ。救急車をお願いしま

ース……」

そこで俺はある結論にたどりついた。

この人、イタイイタイ病にかかっている&馬鹿なんじゃないかと。

もしそうなら、意味不明な事をして骨が折れるのも理解できる。理解したくもないが。

結局しょうがないので救急車を呼んだ。

はあ、もう来ないでほしい……

その数日後。

「おい、西園寺」

「なんですか？大河内先生」

「校長先生がお前の事を呼んでいた。だから校長室に行つて来い」
「え!？」

お、俺何かやったか？

後ろから荷田君や越後がジト目で見てくるが俺にも何が何だか分からない。

しょうがないので校長室に向かう。

「失礼しま——！？」

そこにいたのは、校長先生と、あの外人だった。

「おお、西園寺君か。この男は君の知り合いか？さっきから君を呼んでるらしいんだが」

「全く知りません！」

知ってるっていつちゃあ知ってるんだが。骨が良く折れるくらいしか知らないけど。

考えたら俺こいつに名前を教えた覚えはないぞ！？
なんでこいつは俺の名前を知ってるんだ。

後ろでオーノー！そんなはずはありません！とか何か言ってるが無視しておこう。

「それじゃあこの男はつまみだしていいんだね？」

「はい」

「それは酷いデース！せつかくだから野球の極意を教えマース！」

そう言っただけでアルベルトさんはまた投手のポーズをし始めた。
どうせまた骨が折れるんじゃないのか。

本人もそのことが分かってそうだし、やらなきゃいいのに。

だが、今回は少し違った。

投手の動作をした際、アルベルトさんの足が机に当たって校長先生に思い切りぶつかった。

「うわっ！……け、警備員！この男を捕まえる！」

校長先生がそう言っていると警備員が集まってきて、アルベルトさんを取り囲んだ。

そのアルベルトさんはホワイ！？と言っているが当たり前だろう。そして窓を突き破ってそのまま逃げてった。

あ、転んだ。

今度は外の警備員さんに追っかけられてるな。
お、けど……どうやら逃げ切ったみたいだな。

………

「結局あの何者だったんだろう……」

俺の言葉は校長室に空しく響いた。

第27話 「その男の回復力」(後書き)

いまさら考えてみたけど、文の最初に空白を空けるの忘れてた……
とりあえずそろそろ一年生が終わりそうな雰囲気。

第28話 「新しいクラス」

春が来た。

この『春』、というのは別に彼女が出来たとかいうのではなく、単純な意味で春になったということだ。

もう4月に入り、今日から俺はついに2年生だ。

「どうしたんでやんすか？浮かない顔して」

「いや……昨日先輩が言ってたことなんだけど」

「ああ、あのことでやんすか」

少しだけ話は遡る。

「おう、お前ら！やっと部屋に帰ってきたか」

「は、はい。北乃先輩」

いや、部屋に在るといつつも先輩にしごかれるからそこらへんをブラブラしてるだけなんだが。

まあこんなことは言えたもんじゃない。

「北乃先輩、何かあるんでやんすか？」

荷田君が不審そうに、そして不安そうな顔で訊いた。

「いや、別にねえよ。ただ、そろそろ学年が上がって部屋の割り当ても変わるから、挨拶くらいは、と思ったただだよ」

「そ、そうでやんすか」

ほつ、と荷田君は安心した様子だ。

確かに先輩にやっと帰ってきたかと言われるときは、毎回なにかパシラされるからな。

にしてももう1年経つのか。随分と早く感じるな。これでようやく練習も少しはましになるだろうな。

「この1年間、お前らなんかと一緒に大丈夫かと最初は思ったよ。でも、まあ楽しかったぞ。お前らも次の後輩と上手くやれよ」

ああ、ようやく毎晩のイビキやマッサージから解放されると思うと本当にほっとするな。

来年からは後輩からも入ってくる。しっかりしないとな。

「ちゃんと忘れずに部費も貰っておけよ」

ああ、そうだな。ちゃんと部費も貰っておかないと……って、ん？
一体どこに渡せばいいんだ？

「先輩。部費って誰が会計してるんですか？」

「そついえばそつでやんすね。特にそういう人を見なかったでやんす」

荷田君が相槌を入れる。

「管理なんか誰もしてねえよ。あれは上級生が下級生からもらつボ
ーナスみてえなもんだ」

あ、なるほどボーナスボーナス、つてはあ！？

「いいか、お前らも全部使わずに少しはベンチにドリンクとかを残
しておけよ」

「は、はあ……」

でも……本当にこれでいいのかなあ？

そして現在。

「確かに気が引けるでやんすけど、別にいいんじゃないでやんすか
？」

別に荷田君はたいしてなんとも思つてないらしい。
たぶん、荷田君はそんなことよりあることに興味が湧いてるのだろ

う。

「そうでやんす。そんなことよりクラス分けでやんす！」

「まあたしかにそっちにも興味はあるけどね」

俺たちはそれぞれのクラス分けの紙が貼ってある教室の前まで歩いた。

えつと俺のは……あ、あつたあつた。

とりあえずクラスメイトも確認しておくか——おっ！

「今年も荷田君と一緒にだね」

「そうみたいでやんすね。越後や田島、官取に岩田もいるでやんす！」

野球部3馬鹿トリオがいた。

3馬鹿トリオとは、岩田と越後と俺だ。

ちなみに全員分数ができない。

どうやって学校に入ったの？というのは秘密。

「とりあえず教室に入るでやんす！」

ガララ、と扉を開けて近くに誰かいないか探す。
すでに田島と官取が来ていた。

「よお、お前らも一緒のクラスか」

「ああ、そうみたいだな」

田島が話しかけてきた。

「にしても、何かおかしくないか？」
「あ、やっぱり？」

そう、クラス分けの張り紙によるとこのクラスは男子が16人だ。
1年生の時は1クラス32人だったのに。
なら、クラス数を単純に増やしたただけなのか？
否、机の数はやっぱり32個ある。

俺たちはそんな話をしてもしょうがない事に気づき、他の話をし始めた。

しばらくすると、担任の先生がやってきた。
どうやら今年も大河内先生らしい。

「おはよう。とりあえず俺が担任の大河内だ。朝のHRを始めるぞ。」

「その前に、なんでこんなに席が空いてるでやんす？」

ナイス質問だ、荷田君。

「それはだな、今からここに女生徒が入ってくるからだ。こつちとしてはとても不本意だが……」

全然不本意じゃないでやんす！と叫ぶ荷田君。

ふうん、今日から本当の意味での共学校になるのか。
ま、どうせ変わらない日常＋女子だろ。
あまり俺には関係ないだろうな。

「それじゃあ今から女生徒を入れるぞ」

そついつて先生は廊下の方に向かって入れ、と言った。

さつき関係無いとは言ったが、やっぱりどんなヤツかは気になる。
一応見ておくか。

ガララ。

そして扉を開けて最初に出てきたのは、なんとも大きい女子だった。
……いや、まさか1発目が知り合いだと思わなかった。

（でかい、でかいでやんす！190はありそうでやんす！）

荷田君が本人には聞こえないように言う。

荷田君、その発言ものすごく失礼だぞ。あと、見た目で人を判断してるよな？

「えっと、大江和那です。よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げて、俺の方に歩いてくる。
どうやら俺の左後ろの席らしい。

さて、次はどんな奴かな？

ガララ。

「神条紫杏だ。よろしく頼む」

……ドワイウコトナノ？

なんだ、この知り合いシリーズ。こんなに世間は狭かったのか。とりあえず神条はいつも通り白い制服を着ていた。

（監督生でやんすね。中々ちゃんとした人が来ないでやんす……）

荷田君が変な事を呟いている。

正直これが聞こえた俺は、荷田君に対する評価を下げた。

そして神条は大江の席の前に座る。……またなんとも近い席だ。

ガララ。

「高科奈桜です。面白い事があつたらあたしに言ってくださいねっ
！」

（なんとも新聞部っぽいやつでやんすね。お約束としてアイツに何かバレたら明日はみ
んなにそのことがバレてるってオチがありそうでやんすね）

荷田君はまたしても何か言っている。

まあ確かにその線は否定が出来ないが。

そしてまさかとは思ったが高科は俺の右隣の席に座りやがった。いや、なんなのこの席？絶対落ち着かないんだが。

ガララ。

「浜野朱里よ。あ、私は男子が嫌いだから、近寄らないでね？」

(…………おいらに春はこないでやんすか)

どうやら荷田君は諦めたようだ。

にしても、何か作為を感じるぞ。さすがにこれは酷い。この様子じゃ浜野も俺の席の近くに座るんだろうなあ。

予感は見事に的中。

今の俺の席の周りは、右隣に高科。左前に浜野、左隣に神条、左後に大江。

さあて、次は誰かな……

ガララ。

「天月五十鈴。よろしくお願いします」

あ、あれは前に夜の森であった子か。

そしてふと荷田君を見ると、ガッツポーズをしていた。
どうやら気にいったらしい。

そして天月は高科の前の席へ座った。

まあ予想はしていたが、なんともまあ……すごい席だ。

一応全員美少女ではあるが、正確になんともクセがある。

荷田君が席を代われ、というような目つきをしていたがやめといった方がいゝと俺は思う。

まあ、兎に角、1年目より大変な2年目が始まることとなった。
無事にこの1年間で俺は生き残れるのか？

第28話 「新しいクラス」(後書き)

念願の10000hitまでと……2週間くらいかな？
とりあえず誤字脱字、文法の間違ひがあつたらよろしく願ひしま
す。

第29話 「槍使いVS拳法」

俺が2年生になってから数日後。

特に休み時間にやることもなく、廊下でブラブラしていた俺に大江が話しかけてきた。

「なあ、西園寺君。今ちよつとええ？」

「何？」

「あのさ、同じクラスになれたやん。あたしは結構嬉しかったけど、西園寺君はどうなん？」

微妙にはにかみながら訊いてきた。

俺としても大江と一緒にするのは悪くは無んだけど、ただ、他の奴らがなあ。

とりあえず質問に返答しようと思ったが、休み時間もそろそろ終わると、周りに生徒がいつぱいいたので、後で広場で返事することにした。

別に生徒に聞かれること自体はいいんだが、そこから高科とかに聞かれるとやっかいなりそうだ。

「まあ、あとで広場で」

「あ、うん……」

放課後。

俺たちは大江が普段朝練をしている広場の方へ向かった。
こいつと一緒にいると警備犬が来ないから楽だ。
実は周りでガサガサという音はしたんだが、その音は俺らが近づく
の分かるとどんどん

遠くに行く。

ちらり、と横を見ると苦笑いで返された。

……こいつ。

やめてあげればいいのに、と考えていたら広場へ着いた。

「なあ、女子と同じクラスになってどう思った？」

大江が訊いてきた。

まあ男ばっかの教室よりは……いいんだが。俺の周りの席が濃いのも
過ぎだろ、と思う。

「ずいぶんと華やかにはなったな。なんというか花が咲いた、とい
うか」

「あー、つまりウチはさしずめひまわりか？」

「いや、杉か松かと」

うん、よく的を射ていると思う。

……仮にも女の子にこれを言ったら不味かったか？

「あー、なるほど。って、それ花とちやうがな！」

一応軽く受け流してくれた。

殴られそうで少しビクビクしてた。

さすがに190cmの松に殴られたらひとたまりもない。

「あー、ともかく本題や。これから話をするときはこの広場ですることにはえへん？」

「ん、何でだ？別に教室でもいいだろ」

「ほら、監督生やら教師やらが男女一緒にいたらうるさいやろ？」

なるほど。

だが、まだ一つ質問が残っている。

「別に俺たち付き合ってるわけじゃないよな？」

「うん。それやけどずっと野球部じゃ疲れるやろ。だから、話をする関係でええがな」

……それならいいけど。

「まああんたは何かとモテそうやから、すぐにウチが必要無くなるかもしれんけどな」

そ、そんなに俺見た目良かったっけな？

とりあえず彼女はいないことは確かだが。

「前も言つたら、俺彼女いないって」

「まあまあ、すぐに出来るようになるよ」

ホントかね？

「ま、それじゃあ今後は日時を指定してここで会うことにするわけだな」

「うん、そうやね……！」

大江が急に後ろを振り向いた。

俺もその方向を見てみるが誰もいない。

……一体なんだ？

「……そこに誰かおるやろ。出てきい」

そう言つて大江は草むらの方を睨む。

すると、その辺りからガサガサという音がした。

「キミ、気配を消していたワタシによく気づいたでシね」

善先生だった。

どうやら俺たちの後をつけていたらしい。

いつのまに？

「いや、あのう……たまたま影が見えたんで」

「隠さずとも言い得シ。それにさっきの目つきといい、朝の修練のことも見たことがあ

るでシ」

ストーカーじゃないのか。

「大江さん。今日はキミにお願いがあつてきました」

「えと、何ですか？」

困ったような顔をしながら、大江は善先生に問いかける。
「というか、この人が大江に何を頼むつもりだろうか。
どうやったら身長が伸びるかとか？」

「組み手をお願いしてもいいでシか？」

……はあ？

「え、善先生。か弱い女子高生にそれはないとちゃいますか？」

「さっき言った通り、朝の修練を見ていたました。それに、このちぎり取られた葉。ま

るで壁のようにちぎり取られていますね」

「あ、あれえ？そんな風にも見えますね」

この感じ。俺場違いなんじゃないか？

どっかに避難した方がよさそうかな――

「お山を下りて10年。久しぶりに格闘家の血が騒ぐでシ！」

そんなもの騒ぐなよ……と思っていたら、いきなり善先生が近付いてきた。

ちよ、俺まだ退避してない……

「西園寺君、危ないから下がって！」

そういつて大江は先生に近付く。

いや、こういう時は男の俺が行くべきじゃないのか？
とりあえず下がってはみるけど。

離れた瞬間、なんかとんでもない攻防が繰り広げられた。

（ガガガガガ！！）

おお、大江の奴先生の攻撃を防いでるじゃないか。

……こうして見ると、まったく俺の入る場所が無いな。

しばらくすると大江が一回ちらっとこっちを見た。

ふうん、意外と余裕あるのかな。

ただ、そう思った矢先に大江の腹に先生の拳が入った。

「！！！」

俺は大江に駆け寄る。

「ゴホッ……ゴホッ……ちょっと……シャレになりまへんわ、先生」

「いや、もうしわけないでシ……」

大江が苦しそうに咳き込む。

「先生は拳法の達人なのに、女の子の腹を殴るなんて！」

「いやいや、別にいいから。こっちこそ先生の本気に答えられなくてすみませんでした。」

ほな、これで」

そう言つて大江はどっかへ行つてしまった。

いや、結構深く入つてたよな。

大丈夫なのかな？追つてみるか。

「おい、大丈夫か？」

タタタタタ……

そして善先生だけが残つた。

「ううむ、わざと隙を見せて殴らせる場所を誘導するとは……なか
なかやりましね！」

そして、善先生と大江の戦いはしばらく続くのであつた……

第30話 「新入部員」

ついに俺たちは後輩を持った。

その前から新生はいたのだが、ここでは『部活で』と言う意味だ。今はみんな監督の挨拶を聞いている。

俺たちが入ってきたときにも聞いた、あの学校の方針と矛盾する挨拶だ。

「――ビシバシいくから覚悟しておけ！」

「はい！」

どうやら終わったようだ。

ただ、俺はそこである人物に目がいった。

監督も同じ方を見ている。俺と同じことを考えたのだろう。

そいつは、ただぼうつと立っていて、監督に返事もしていなかった。

……なんとも態度が悪い。よくあの監督相手に出来るな。

さすがに今日初めて会ったとしてもどんな感じの人かは分かるだろうに。

「おい、そのの。どうして黙っている？」

「すいません。長い話はどうも苦手で、途中から寝てました」

「――！」

命知らずだな、と思う。

それか単に大物なのか。後者なら野球部として嬉しいのだが……

「西園寺君。立ったまま寝れる人っておいら初めて見たでやんす！」
「突っ込むところはそこじゃないだろ……」

まあ確かに珍しいのだが。

……って俺も流されてる場合じゃない。

「ひきた 正田 みつじ 光司か。ふん、その口に見合う実力があるか見ものだな」
「任せて下さいよ」

ふうん。正田……か。どっかで聞いたことがあるな。

そうだ、確か中学で乱闘事件を起こして星英高校の進学を取り消されたハズ——って、

それってつまり、そうとう実力はあるってことか。

そして、実力を試すことになった。

「今から10球投げるぞ」

どうやら正田は外野手のようで、打撃テストを受けることになった。個人的にはピッチャーじゃなくて少しほっとしたが、もしあいつがピッチャーだとして

も、もちろん俺は負ける気は微塵もない。

「にしても、中々生意気そうでやんすね」

「生意気そう、じゃなくて実際生意気なんだろ。監督の話をあんな態度で聞いている時点

で分かっていることだけだな」

俺と荷田君が話しているうちにテストが始まっていた。

カキーン！カキーン！

「へえ、結構やるな」

「きっと、中学生から硬式の練習をしていたんでやんすね。ま、あの星英高校にスカウトされるくらいでやんすからねえ」

ん、荷田君知っていたのか。

結局10球中5本がヒット性の当たりだった。

そのうち1本はホームラン性。

他の1年と比べると実力は全然違うのが分かる。こいつはめちゃくちゃ上手い。

「どうです、監督」

「ああ、正直がっかりした」

えっ！？

「お前もなかなかなものだが、俺は前に天道を見た。アレと比べればお前の実力はそんなにたいしたものじゃあない」

そりゃアイツと比べたら誰でも霞む気がするが。

ま、俺はあいつに勝ってみせるけどな！

「天道？ああ、アイツなら中学の時1回試合しましたけどその時の印象なら俺の方が上」

でしたね」

「なるほど。ならその大口に見合う程度の成長を期待しておくか」

「ええ、任せて下さい」

そういつて俺たちは普段の練習に戻った。

「そういえば、今日から新入生の部活もちゃんと決まったでやんすから、おいらたちの

部屋に新入生がやってくるでやんすね！」

「おいおい……いくら雑用をやってもらうって言ってもムチャクチャしたりするなよ？」

「それくらいは分かってるでやんすよ」

……なんだか信用できないな。

ちなみに、俺と荷田君は今年も一緒の部屋だった。

3年生はいなかったたので、俺たちとしてはすごく楽だが、あとの1年生に頑張ってもら

うしかない。その1年生、御愁傷様。

しばらくして練習が終わり、俺は荷田君と自分の部屋を戻って行った。

前までは寮の1階だったが、今年からは2階になった。

おかげで毎日階段を上り下りの手間は増えたが、なんとなく景色のいい部屋になった。

とくに部屋で何もすることのなかった俺たちは、たわいもないどうでもいい会話をして時間をつぶす。

どんな会話かと言うと、蛇みたいに進む変化球を作ろう、とか、遠

心力をフルに使い回
転しながら球を打てないか、などという本当にどうでもいい会話だ
った。

そのまま話を続けていると、

コンコン。

と、突然ドアをノックする音が聞こえた。
きっと新しい新生がきたのだらう。

ガチャ。

「ちーっす!」

「え? お前が同室の一年生なのか?」

「ええ、そうみたいです。一年間よろしくお願いします」

なんとやってきたのは問題児の疋田だった。

どうでもいいが『疋田だった』って言いにくいな。早口言葉に使え
そうだ。

(西園寺君、ここは同室の先輩として一発ガツンとかますでやんす
!)

荷田君がこっそりと話しかけてきた。
と、言われても……どうするべきか。

(ほら、早くするでやんす!)

自分でやりゃあいいのに。

しょうがない、一応やってみるか。

「よし、今から俺が先輩としてお前に社会勉強させてやろう!」

(うわ、本当に言っただやんす!)

荷田君が何か言ってるが、それは後回しにする。

本来ならすでに殴りかかってやろうかと思ってるところだが、今はそうはいかない。

足田のことをなんとかするのが先だ。

「いや、今は別にいいです」

「え、あ、そう?」

「はい。それじゃあ今から俺はランニングに行ってきますんで」

「ランニング? 今から?」

「もちろんです先輩。すでに甲子園への戦いは始まっているんですよ!」

そう言っと、足田は外へ行ってしまった。

…… 1年間あいつと一緒になのか。

「前途多難でやんすね」

「だな……」

しょうがないので俺たちは先に寝ることにした。

翌日。

「そういえば、クラスでペラっていうのもらったんですけど」

足田が話しかけてきた。

そういえば俺たちも昔北乃先輩に取られたな。

こういう時にとっておけ、ということなんだろう。

足田には悪いが、餌食となってもらおうか。

（なんか悪役っぽいでやんすよ）

……最近荷田君がウザキャラになってる気がするが、そこはまたもや置いておく。

「そうか。それじゃあ部費として——」

「あげませんよ」

え？

「同じクラスの奴が同室の先輩からペラを巻き上げられたって言うから、俺、調べてみ

たんです。そしたら、監督がそんなもの必要ない、と」

こ、こいつ……！

本当に生意気だな。

「ああ、それと。俺、雑用はやりませんので。自分のことは自分で願います」

「ふ、ふざけるんじゃないでやんす！」

荷田君が怒るのはもつともだ。

疋田のこの行為は俺たちの努力と苦勞の1年間を無のするってことだからな。

「ふざけてませんよ。それじゃあ、俺行きますんで」

スタスタ……

荷田君の話を軽く受け流し、疋田はそのままどこかへ行つた。

「西園寺君、昨日と合わせて二度目になるでやんすけど……前途多難でやんすね」

「……ああ」

教室では忙しくなりそうな感じだったから、寮では、と思つたのに……

どうやら、俺は運が悪いのかもしれない。

第30話 「新入部員」(後書き)

いつも通り誤字、脱字があつたら宜しくお願いします。

あ、ついでに評価も……なんて欲張りなことは言えないけれど。

第31話 「それはとある紙切れから」

「ふあゝあ……」

新しいクラスになり、だいたい1ヶ月がたった。

今日はみごとに晴れ、さらに暖かいのでとても眠い。

まあ眠いのは他にも理由があるのだが。

例えば、1時間目に寝ていたら、起きた時に顔に落書きがあったとかだ。

ほかにも授業中に寝ようと思ったら神条が起こしてきたり、邪魔がいつも入るのでいつも入るのはいつ

ものように寝ることができない。

向こうでぐっすり寝ていた越後が羨ましい。

そして今日は部活が無い。

本来なら寮に戻って昼寝といきたいのだが、残念なことに用事が入った。

すっぱぬかしてもいいのだが、面白そうなので行くことにした。

現在向かっている場所は森だ。

用事、といっても誰かと一緒に行くわけでもなく、ここに来いと指示されたただだ。

その場所の地図を書いただけの一枚の紙切れに。

「森の場所を普通地図で表すか？分かりにくかったらありやしない……」

ぶつぶつと1人で文句を言う。

こんなことを誰に言えばいいのか分からないが。

獣道をしばらく歩く。

途中で警備員さんに会いそうになったが、なんとか切り抜けた。

そう言えば、前に高科が言っていたな。

たしかこの森には白いシカ(だったはず)が住んでいると。

今から用事を無視して探してみようか。

高科によると森の守り神らしいし、会えたら御利益でもあるんじゃないだろうか。

そうこうしてる間に地図に載っている場所についた。

そこは、広場のような場所だった。

なんとも不思議な感じがする。ただ、悪い感じではない。

あれか？マイナスイオンとかそんな感じか？

森の中にこんな場所があったのか。

これは地図なしじゃ絶対にたどりつけないな。

でも、一体誰がこの紙を机に入れたのが分からない。

学校にいる時、俺の周りの席の人にこの紙を誰が入れたのか聞いても知らないと言われたし。

高科は知ってるみたいだったが、教えてくれなかった。

「ふふふ、よく来ましたね。ワナと知らずに来るとは、なかなか勇

「気があるようです」

…… ああ、紙を入れたのはお前だったのか。
そりゃ、教えてくれない訳だな。

うん、きっと1時間目に俺が寝ている間に入れたんだろう。

俺は教科書を使わないから机に入れられたことに気づかないのを知っていたんだろう。

それに、俺に落書きをしてる時に入れたのなら、誰も気づかない訳だ。

まあ、とりあえず。

「何を言っているんだ高科」

「呼びだしたら1回くらい言ってみたいと思いませんか？ 男のロマンですよ」

お前女じゃなかったのか。

「それにしても、森にこんな場所があったんだな。よく見つけたな」
「うん。この場所は偶然見つけたの。きれいでしょ、何もなくて」

なるほど。

偶然でこんないい場所を見つけたのか。

どうやらこいつは俺よりラック値が高そうだ。

「あたしね、この場所がこの学校で1番好きなんですよ。どこにだって、何にだって、
大事なものが1つでもあれば、それを好きになることができるですよ。だから、この場

所があるから、あたしはこの学校が好きなんですよ」

そっか。

こいつなら教室とかの方が1番好きそうなんだが、そういう訳じゃないんだな。

「大事なものを守る為なら、あたしは何でもするつもり。自分が傷ついても、それが残るなら……」

？

ということだ？

「おい」

「あ、ごめん！話がそれちゃいましたね」

「いや、いいけど。それで、ここに俺を呼びだして何の用だ？」

まさか前の続きをやるうと思ってるんじゃないだろうな。
前、俺が森に呼び出された時、言われたセリフが

「ナオっちと行く、親切高校探検ツアー、in 森！」

だったからなあ。

その時は練習で行けなかったけれども、まさか今日するのか？

「あ、いやあ……そのう……」

「どうしたんだ？突然挙動が不審だぞ？」

まさか変な事たくらんでるんじゃないだろうな。
もしそうだとしたら俺は今から逃げるぞ。

「えっと……………ですね……………」
「はあ」

いやいや、本当に挙動不審すぎる。

ただ、なんか高科の様子がおかしい。

頬が赤くなっている。あれか、風邪か？

もう冬も明けたというのに今さら風邪か。どうしようもないやつだな。

「一緒に校舎になったじゃないですか！」

「そ、そうだな」

「だから……これまでよりも一緒に居れる時間が増えたでしょ！」

「あ、ああ」

なんでそんな大声なんだ？

喉に気をつけるよ、風邪なんだから。

「だ、だから、できたら、1年生の時よりも、あたしと一緒にこの学校を……………って、

ああ、もう！」

何だかよく分からんが怒られた。

いや、怒られたのか？

怒鳴られたのは確かだが。

一体何が言いたいんだ、こいつは？

眠いんだからさっさとしてくれよ。

お前も風邪だろうから早く布団に入った方がいいと思うんだが。

「で、何なんだよ」

「あたしは、西園寺君が好きなんですよ!」

What's?

一気に眠気が吹き飛んだ。

「一緒に居て、楽しいんですよ!」

なるほど、頬が赤いのは風邪じゃなかったのか。
そつえば来たときは特に赤くなかったもんな。

……こんなことを考えてないと平常心が持たない。

「あたしは馬鹿で、顔に落書きして、周りに迷惑ばかりかけて、
落ち着きがなくて、

うるさくて、顔に落書きしたりする奴だけど、あたしと付き合っ
て下さい!」

「……………」

……ヤバイ、結構動揺してるぞ、俺。

まあこいつが俺の顔によく落書きする奴、ということはよく分かつ
た。

「……………」

「な、何か言っして下さい!」

俺はしばらく黙る。

にしても、なあ。

「……………」

「こ、この沈黙が耐えられませんよ」

ナオがだんだん不安そうな表情になる。

「あ、あのう……………」

「プ…………アハハハハ！」

「えっ？」

「そんな自分のダメな部分ばかりアピールして、普通誰が付き合うんだよ」

「じゃ、じゃあ……………」

普通は、な。

「いいよ」

「へっ？」

ナオがきよとした顔になる。

「だから、いいよ。付き合おうか」

「え…ええええええ！？」

自分から言ったくせに。成功すると思ってなかったのか？
にしてもうるさいな。

ナオはきよとした顔から一変、満面の笑みを浮かべている。

「ええええええ…………やったああああ！西園寺君の彼女になりましたよ

「！」

そう行つてナオはこっちへ走ってくる。
そして、そのまま抱きつかれた。

「2人で楽しい思い出を作つていこうね！これからは2人だから、
楽しい思い出が2倍
ですよ！」

残念ながら少しだけ間違つてゐるな。

「嫌でもナオとなら作れそうだけど、2乗だからな。それを忘れな
いでくれよ？」

「うん！もちろん！」

はあ、どうやら前に大江が言ったことは、未来の予知だったらしい。
これからあいつを超能力者と呼んでやろうかな。

「だけど、ナオに1つだけ言っておくことがある」

「なんですか？」

「自治会の目とかあるから、教室や人目のつくところではできるだ
け大人しくしろよ」

目つけられたら大変だもんな。

あ、こいつはもうつけられてたな。

「わかつてますよ！」

「本当か？」

「うん……たぶんね」

その時ナオの目が光ったような感じがしたが……気のせいだろう。
うん、本人が分かってる、って言ったんだ。そういうことだろう。
……不安だが。

こうして俺は学校生活がより楽しくなることを確信した。
ただ、ナオが何かをしないように気をつけないとな。

第31話 「それはとある紙切れから」 (後書き)

文章を考えるのがへたくそ。

元ネタ(ゲーム)があるのに、これじゃあまだまだ駄目です
ね。ってナオが言ってた。

第32話 「いろいろありました」

「……何ニヤニヤしてるんでやんすか。気持ち悪いでやんすよ」

「あ、そう？ごめん」

「何かあったでやんすか？」

今は寮にいる。

ちなみにニヤニヤしてる理由は、さっき告白されたから。

……ミスった。こんなことを考えたら荷田君にばれるな。
もう遅いけど。

「相手は一体誰でやんすか！早く言え、でやんす！今ならあの新聞部っぽいやつに言わないでおくでやんすから」

きつとナオのことだろう。

確かにあいつに言ったら広まること間違いなしなんだが、残念だったな。

さて、そいつの名前をまだ頭の中で考えてないから今なら荷田君も分からないだろう。

逃げとくか。

それだけ考えると、俺は行くあても決めず外へ出た。

「あつ、どこへ行くでやんすか！あの新聞部っぽいやつに言いつけてやるでやんす！」

……どつぞどつ勝手に。

「しばらく部屋に戻らない方がいいな……」

適当に寮の前をブラブラする。

今から越後の所へ遊びに行こうかと思ったが、あいつらは自主練していたのを思いだした。

しょうがない、どつか適当に歩くか。

なんとなく歩いていると、学校の中庭についた。

なんでここに來たのだろうと自分で思ったが、そこである人物を見つけた。

そいつは、俺に気づくこと無くずっと雲を見ていた。

俺は喋りかけようと思ってそいつに近付くと、ある『音』が聞こえてきた。

グウ。

……どうやら腹が減っているらしい。

残念ながら今俺は何か食べ物を持っていない。

「おい、岩田。ずいぶんとでかい音だったぞ。こっちまで聞こえたよ」

「あれ、西園寺。一体いつから？」

「さっき来たばかりだよ」

グウ。

2回目だ。

よほど腹が減ってるらしい。

まあ、岩田は部活中でも授業中でも腹が鳴っているので、そんなに珍しい訳じゃないが。

岩田は俺から視線を外し、再び雲を見る。

UFO、またはヒーローでも飛んでるのか？

俺も見てみるか。

だが、そこにはいたって普段と変わらない雲の姿があった。

気になったので、岩田に聞いてみる。

「岩田。雲なんて見てどうしたんだ？」

「いや、さ。あの雲コロッケに見えないかい？」

岩田はその雲を指でさす。

なるほど、確かにコロッケに見えなくも無いな。

「で、あれがクリームコロッケ」

「またコロッケか」

「でも、クリームコロッケって普通のコロッケより丸い感じするだろ？」

分からなくはない。

でも、もうちょっと言い例え方が無かったのか。

「そして、あれがカニクリームコロッケ」

「……」

なんだこいつは、突っ込み待ちか？

カニクリームコロッケとクリームコロッケはほとんど一緒だろう。

「それで、あっちが牛肉コロッケ」

「分かった分かった、とりあえずお前はコロッケが今食べたいんだな？」

「うん」

グウ。

そして3度目の音が鳴った。

2度あることは3度あるって言うしな。……あってるよな？

「あああ、もう駄目だ。食堂に行ってくる」

「行つてらっしゃい」

そして岩田は早足で食堂へ向かっていった。

話す相手もいなくなつたし、俺も寮に戻るかな。

……ん？

俺は左を見る。

すると、向こうから田島と荷田君がやってきた。

しかたない、隠れてやり過ごすか。

にしても、まさか荷田君田島にあの事言つてないよな？
もし言つてたら今度0距離で投げ込みしてやる。

「……だからあの雲がザボンガルでやんす！」

どうやらあっちも雲の話をしていらしい。

盛り上がっているのは荷田君だけのようだが。

田島は困つたような表情をしている。

実際困っているんだらうけど。

「どうしてわからないんでやんすか！あっちがザボンガルで、こっちがゲツカマン——」

「だって俺それ見たことないもん……」

「あ、そう……」

どうやら話は解決したらしい。

……どっか違うところに行くか。

今度はグラウンドに来てみた。

そこでは越後が一人で素振りをしていた。
まだやっていたんだな、あいつ。

たまたま近くにボールがあつたので、それを手に取り越後へ近づく。

「よう」

「お、西園寺じゃないか。どうしたんだ？」

「少しブラブラしてるだけだよ」

「そうか、つまり暇だつてことだな？なら、その手に持つてる俺の
ボールで練習を手伝
つてくれよ」

もとからそのつもりだつたんだが。

周りにもボールが落ちていたので、それを拾い集める。
それから俺は越後のトスバッティングを手伝う。

…… やっぱりこいつのフォームはいつ見てもきれいだ。

本人は守備の方が得意らしいが、打撃面も相当なものだと思う。
もう少し筋力をつけたらすぐにでもホームランを量産できそうなく
らいだ。

「なあ、俺のフォームこれでいいと思うか？」

越後はこつちを向かずに話しかけてきた。
話している間にも練習は続ける。

「ああ。特に直すところはないと思うぞ」
「ならいいんだけどな」

その後も黙々と練習を続ける。

.....

45分くらい経っただろうか。

一向に越後は休憩をはさまない。
そろそろ球を投げてる俺も疲れてきた。

こいつは本当に体力があるな。先発の俺も見習わないとな。
それからさらに数十分。

「ふう。そろそろ終わりにするか」

結局休憩なしだった。

あいてて、中腰でやっていたから腰が痛い。

とりあえず俺は立ちあがって1回背伸びをする。
すると、背中の骨がボキボキと鳴る。

子供の頃は、この音で骨が折れてしまうのではないかと思った。
まあそれで骨が折れるんだったら、ジャイ。ンがの。たを殴る時の
指を鳴らす動作の時

に指が大変なことになっているが。
そつえば前に会ったあの外人。

あの人は本当に骨が折れていたのに回復力が異常に速かったな。

「そうだ、西園寺。すごい技ができたんだけど見てみないか？」

すごい技？

とりあえず見てみるか。

「ああ、見せてくれよ」

「よし、しっかり見てろよ」

そう言つて越後はボールを拾つた。

そして、ボールを上投、落ちてきたところをヒットさせる。

……ただ打つただけじゃないのか？

「あの球が地面に着いてからを見るよ」

地面に着いてからどうなるっていうんだ？

あれか？地面にでもささるのか？

ボールはセンターの方まで飛んでいき、地面にポトンと落ちる。

その瞬間、ホームに立っていた俺たちの方めがけて勢いよく転がってきた。

バウンドせずに、だ。

「す、すげえ」

「これはな、打つときに特殊な回転を掛けるとバウンドせずに戻ってくるんだ」

なんともすごい技術。

だけど……

「せっかく外野に飛ばしたのに内野に戻してどうすんだ？」

「はっ、やれやれだぜ！」

どうやら気づいてなかったらしい。

こいつ、本当に野球バカだな。

その後部屋に戻ったんだが、すごい顔して荷田君が待っていた。
足田はいなかったからよかったものの、いろいろ大変だった。

第32話 「いろいろありました」(後書き)

祝10000hit!

同時に2話掲載で行こうと思ったんですが、残念ながらテストが近いのでorz

それにしてもありがとございます!

これからも頑張っていくのでよろしくお願いします!

第33話 「いや、なんであんたがここにいるの？」

「えっと……なんであなたがここにいますか？」

俺は寮で洗濯をしていた。

普通ならばこういうことは同室の後輩がやるものなのだが、残念ながらここちの同室の

後輩は先輩の命令をきかない。

「まあいいじゃない。それよりこういうことは1年生がやるものだったはず。しかも他

の1年生たちはもう終わってるはずだけど？」

「わざわざ時間帶をずらして洗濯やってるんですよ。……1年生に見られたら恥ずかしいから」

そうなのだ。別に1年生じゃなくても官取や岩田など他の2年生に見つかったら笑い事じゃない。

「にしても、なんだかあなたに敬語は似合わないわね。別に使わなくてもいいわよ」

「ならそうするけど」

そっちのほうがこつちとしてもやりやすい。

とりあえず、本当にこの人がなんでここにいないかが不思議だ。

「……とにかくなんでここにいますか？えっと……お、お姉さん」

「ふうん、お姉さんとは言うのね。まあそれは置いて、ここに私がいたら悪い事があるのね」

ひでえ。

なんでここにいるのかを確かに聞いたが、そこから俺に確かめもせず悪い事があると決めつけやがった。

とりあえず今俺の目の前にいるのは、けっこう前に屋上で出会ったあの金髪の女性だ。

今日も黒いコートを着ていて、髪の毛を後ろで束ねている。

情報屋らしいので、今日もどうせ仕事でここに来たんだろうけど、なぜ俺の所に来るのかが分からない。

なんだ？俺の情報でも欲しいのか？そんなことはないだろうが。

「悪い事があるって決めつけるのはどうかと思っぞ。まあ本当のことなだけだな」

「ふうん。何かしら？」

「俺じゃないが、お姉さんがここにいるのは不法侵入だろ」

「ちゃんと許可証はもらってるわよ」

「まじか！？」

何それ、普通に入ってきたのかい。

なんか自分の考える情報屋のイメージと随分違っぞ。

ほら、目標の場所に誰にも見つからず忍び込み一瞬のうちに情報を奪い去る、みたいな。

俺の思いこみかな？

「ただの思いこみは命取りよ」

「考えてることを見抜かれた!？」

「あなた、考えてることが顔に出やすいって言われない？」

言われない。そんなこと言われたこともない。

ただ一人を除いて。

「で、結局あんたはここに何をしに来たんだ？」

「私の質問をスルーね。後でどうなっても知らないわよ？」

「す、すいませんでした」

何なのこの感じ。

俺この人苦手だ。どうも逆らってはいけない感じがしてならない。

「ま、そろそろ答えてあげるわ。分かっていると思うけど仕事よ」

「内容は？」

「普通仕事の内容を教える情報屋がいるかしら」

うん、ないな。

「じゃあ、なんで男子寮にいるんだ？こんなところにまさか情報がある訳じゃないだろ」

「そうね。確かに用事はもう済ませたからあとは依頼者に帰るだけなのだけれど、

たまたまナオに出会って、彼氏さんが出来たとか言ってたから来てみたのよ」

ナオが俺のことを言ったのか？

これでこの人にさらに情報が追加された訳なのか。

こんな情報はとても安そうだが。

どうでもいいことを考えていたらいきなりお姉さんがこつちをまじまじと見てくる。

い、一体何だ？ 顔にご飯粒でもついてたか？

「ちがうわよ。もしそんなことがあったら顔を殴ってるわよ」

「普通に事実を伝えるだけにしてくれ。それにナオから聞いたが暴走族を素手で壊滅さ

せるくらいの実力があるんだろ？ 普通に俺死ねるんじゃないのか」

いや、間違いなく死ぬ。

なんか感覚的に分かる。この人と戦ったら間違いなく殺されるな。

「それで結局なんで俺を見ていたんだ？」

「いや、こんな顔が残念なのがナオの彼氏なのかと思って。ナオが勿体無いわ」

「し、失礼な」

まさかこんなことを言われるとは思わなかった。

俺の心に120くらいのダメージを食らったぞ。

俺の残りHPがどれくらいかは察してくれ。

とりあえずなんか話を変えないとヤバイ。

完璧に主導権を握られている。

そうだな…… あつちが恋愛関係の話を持ちだしてきてるからこつちもそれでいくか。

「そついえばお姉さんのほうはどうなんだ？ 前に好きな人がいると

か言ってたよな。そ

の人とはどうなったんだ？」

「仕事の固定客って言ったわよね。それとも何？独身の私に対する挑戦状か、彼女がい

るっていう自慢？もしどっちかに当てはまるならマリアナ海溝に沈めるわよ？」

「ち、違う！普通の意味でってなんかそれもおかしいし……そうだが、前言撤回で！」

そもそもマリアナカイコウってなに？食べられるの？

沈めるっていたから海とかそっち系かな？

どうせ沈めるなら太平洋とかもつと深いところに沈めたらいいのに。

「はあ、いいけどね。それじゃあ私はそろそろ帰るわよ」

「ああ」

「あなたも何か欲しい情報があったら遠慮なく言っていいいわよ。――

応ナオの彼氏って事

で安くしといてあげるから」

金は取るのか。

そりゃ仕事だからそうなんだろうけど……情報ねえ。

ナオの情報とか頼んでもしょうがないし、何か頼む必要もないか……

……あ！

「それじゃ、またいつか」

そう言ってお姉さんはくると校門の方へ身体を反転させる。

だが、俺はあることを思い出したので、呼びとめる。

「待っていてくれ」

「何？何もないならチャレンジャー海淵の一番下まで行ってもらわよ？」

だからどこなの。

「そうじゃなくて、俺も仕事を依頼していいか？」

「別にいいけど。で、何の情報が欲しいの？」

そう、俺が思いだしたあることとはミーナさんに頼まれたことだ。一応教室が一緒になった時に神条に頼んだのだが、それだけではやっぱり情報としては

不足するかもしれないので、専門家にも頼んでみるとする。

…… あっちも専門家だと思ったが、それは置いておこう。

「ある生徒の情報が欲しいんだ」

「ナオとか言わないでよ？」

「断じて違う。で、とりあえず話すけど」

俺はミーナさんから頼まれた生徒のリストのことや行方不明者のことを話す。

ミーナさんの名前は伏せておいたが。なんとなく。

そしてその依頼を聞き終えたお姉さんはしばし考えている動作を見せる。

しばらくするとこちらに向き直り、

「別にそのくらいの情報ならいいわよ。ただ、これから少し仕事が増なってるから伝えるのは少し遅れるけど」

「別にいいよ。でも、俺が学校を卒業するまでには頼むぞ」

「私は情報屋よ。そんなに遅くなるはずがないわ」

情報屋には出来るだけ早く伝えるってことも含まれるんだな。
ま、どうでもいいか。

「それじゃあ今度こそ行くわよ。妹が待っているからね」

「ああ、それじゃあまた今度」

「ええ」

最後に笑みを浮かべ、俺に背を向けてどっかへ行った。

最後に少し気になることを言ってたな。

妹……いるんだな。

どんな妹なんだろう。同じようにケンカが強そうだけど。
まさか、実はおとなしくて、甘えん坊とかは……ないよな。

さて、とりあえずであの人に依頼を頼んだからこれでミーナさんと
の約束は果たせるな。

あ、考えたら俺に情報を教えてもらっただけじゃなくて、ミーナさんに
直接伝えてもらった
ら良かったな。

ま、いいか。

第34話 「笑顔は可愛いな」

テクテク……

俺は教室を出て屋上へ向かっている。

別段用があるわけでもないが、他にすることもないので屋上に休憩
でもしようかと考えたのだ。

屋上へ続く階段を上がる。

この階段で上がるのも何回目だろうか。

それくらい俺は屋上を利用している。

そういえば2年生になってからはここにくるのは初めてだ。
3ヶ月くらい来てなかったんじゃないか。

階段を上がりきって、目の前のドアノブに触れた時、あることを考
えた。

（……ナオも連れてきて二人でのんびりしたほうが良かったかな）

なんとなくだが、ナオの事だから後ろをつけていそうな気はするが
気がする。

無いとは思うが……無いよな？

一旦考えるのをやめて、俺はドアノブを回す。
そして、ドアを押して外に出る。

うん、今日もいい天気だ。

風もいい感じに吹いてきてるし、空気も都会よりは随分とおいしい。そりゃ山とか森の中とかと比べると負けるが。

「にしてもこんないい天気屋上に来ると、どんなに沈んでいてもあつという間に気分

爽快だな。こんな青空のもとで暗い顔をしている奴は馬鹿だな。馬鹿に違いない。きつ

と越後より馬鹿に違いない」

雲ひとつない晴天だしね。

俺は少し歩く。

ふと左を見ると、そこにはベンチに座った女の子がいた。

たぶんドアを開けた時にドアが邪魔で視界に入らなかったのだろう。

別に女の子がいるのは問題じゃない。

むしろ普通にくれれば会話をして仲良くなろうとも思えるのだが、俺はその女の子

と会話をすることが出来なかった。

いや、厳密に言えば話すことは出来たのだが、話せるような雰囲気ではなかった。

つまりどういうことか？

その女の子は下を向いて、すごいくらい雰囲気を出していたのだ。

「……」

「……」

え？どういうこと？

こんな爽やかな屋上で騒いでる俺が場違い？

「……」

女の子は一向に喋らない。

「こつちを振り向きもしないぞ。もしかして怒っているのかな？お、お邪魔しました。」

俺は駆け足で校舎の方へ戻って行った。

それにしてもあの女の子は一体何をしていたんだろう。
ずっと下を向いていたし。

ま、もう会うこともないか。

……この考えはアスパルチームより甘かった。

それは数日後。

前回と同じように一人で俺は屋上に来ていた。

「今日もいい天気だな。こないいい天気の日屋上に来るとどんな奴でも笑顔になるな。」

こんな青空の下で笑顔にならない奴はとことん暗い奴だな。間違いない。絶対田島より暗そうな顔をしてるに違いない」

前回と同じような事を俺は言いながら周りを見渡す。

そこには前回と同じように、ベンチに座っている女の子の姿がいた。しかもずっとうつむいてる状態まで一緒。

なに？実は自縛霊とかじゃないよね？俺呪われてるとかじゃありませんように。

……失礼な事考えてしまったな。

反省、反省。

「にしてもまたか！またこの子か！」

「……」

やっぱり女の子は振り向かない。

「しかし、なんでこんな顔してるんだ。前は怒ってると思ってたけ

ど、今日はなんだか

俺の存在に気づいてないように見えるな」

「……」

しょうがない、話しかけてみるか。

俺はその女の子に一步近づく。

そして、話しかけてみようと思った瞬間――

パシャ！

カメラのシャッター音と共に、眩しいフラッシュの光でその女の子は顔を上げる。

「えっ？」

「な、なんだ？」

二人とも何が起こったか分からないようで、俺は呆然と立ち尽くす。女の子の方はビックリした様子で、キョロキョロと周りを見る。

「い、今のは俺じゃないからな。さすがに俺でも目から光なんて出せないからな」

言ったものの、女の子はまたうつむいて開けっ放しにしていた扉の方へ走って行った。

「え、いや、君！」

とりあえず俺もそっちの方にいくが、女の子はもう扉の目の前にいた。

だが、そこで不思議な現象が起きる。

ギー……ボタン！

扉が閉まった。

あの子が触れてないのに、だ。

一方女の子は驚いてそこに立ち尽くしている。

何だか良く分からないが、今がチャンスだ！

「なんで？なんで勝手に扉が閉まるの？」

俺は急いで女の子の方に駆け寄る。

「あの！」

「あ……あ……あ……」

何を言ったらいいか分からないが、ここは適当に謝るか。

「本当にごめん！よくわからないけどごめん！」

「へ？」

女の子は驚く。

「とりあえずごめん！」

「……」

「俺の顔が怖かったらごめん！馬鹿でごめん！あと、生まれてきて

ごめ——」

そこまで言った途端、女の子が笑い始めた。

「クスクスクス……」

ん？

笑ってる？

そうか、やっと笑ってくれたか。よかったよかった。

「何で貴方が謝っていらっしゃるのですか？貴方が悪いわけじゃないのに」

「えっそうなの？」

……

しばらく沈黙が続く。

「どうかした？」

「私、芳槻よしづき さらと申します。貴方のお名前をうかがってもよろしいですか？」

考えたらまだ自己紹介してなかったな。

「俺の名前は西園寺。よろしく」

「あなたが？」

え、何が？

「あ、いや、何でもありません。それより、1つ訊いていいですか？」

「別にいいけど」

「高科さんと付き合っているというのは本当ですか？」

高科……ナオのことか。

友達なのかな？

「本当だけど、何で？友達なの？」

「いえ……そんなことはないです。それにしても、恋愛禁止令の噂しらないんですか？」

恋愛禁止令の噂？何だそれ。

始めて聞いたぞ。

「その様子じゃ知らなさそうですね。実は貴方のクラスの神条さんが生徒会長になった

時に、そんなことを言ってたんですよ。特別反省室に送られるって

「ごめん、俺神条が生徒会長をやっていることも初めて聞いたよ」

……

また沈黙が続く。

いや、なんかすみません。周りのこと一切知らなくて。

「ま、まあその話は置いておこう！」

「は、はい。にしても………ナオか」

最後の方がよく聞き取れなかった。

何て言っただろう？

「あ、あのっ！」

「な、何？急に大きな声出して」

いきなり声が大きくなってビックリした。
何だろう？

「わ、私のことはさと呼んただけですか？」
「突然どうしたの？」

「い、いえ……なんとなく。ダメですか？」

「そんなこと無いよ。友達なんだからそれくらいOKだよ。」

いつから友達になったんだか、と言われそうだがそこは華麗にスルー！。

単なる考え事なので気にしないでね。

「あ、ありがとうございます。あ、あの、また屋上に来て下さいますか？」

「もちろん！」

「ありがとうございます。それでは失礼いたしますね」
「ああ」

さらは扉を開けて、階段を下りていった。

そろそろ俺も戻らないと。

昼休みが終わって次の予鈴がなるからな。

……

「なんとなくナオと知り合いかなとも思ったけど、違っみたいだな。ま、性格が逆だし」

あの二人は友達になりそうもないな」

その言葉だけを屋上に残し、俺も階段を下りていった。

だが、そこで一人だけその言葉を聞いてる人がいた。

「……。友達じゃないからねえ」

ぼそっとつぶやいた高科の声は主人公には届くはずもなかった。

第34話 「笑顔は可愛いな」(後書き)

アスパルテームとは甘味料の一種。

……あつてるよね？

第35話 「サッカーのルールって難しいよね」

ただいま休み時間で、チームメイトと遊んでいる。

ちなみにサッカーだ。

「おい、越後！手を使うな！反則だぞ！」

いや、サッカーやってるのにいきなり越後がボールを持ち始めた。キーパーでもなにのに。

「なんだ知らないのか西園寺、やっぱりお前は馬鹿だな。サッカーはキーパー以外でも手を使ってもいいんだぜ？」

……何を言っているんだ、こいつは。

「馬鹿、それはスローインの時だけだ！」

「な、何だって！？そんな馬鹿な！」

こいつと同じチームになったのが馬鹿だった。

「いいから早くこっちにボールを渡すでやんす！」

やってしまったことはどうにもならないので、荷田君にボールを渡す。

ちなみに荷田君は敵です。

「くそつ、次からは気をつけろよ越後！」

「まさか俺に対してサッカーのルールが全部間違ってるとはな。驚いたぜ」

救いようのない馬鹿だ。

しょうがない後は俺が何とかするしかないな。

「見とけよ！この赤いカミソリの実力を！」

「なんかめちゃくちゃ危なそうな名前でやんす！？」

俺はドリブルで相手のディフェンダーを抜こうとするが、抜けなかった。

普通に官取（相手）にボールを取られてしまった。

「なんだ、その名前は伊達か」

言われてしまった。

くそっ、次は抜く……………ん？

屋上に誰か…………あれは、さら？
こっちを見ているな。

「……………！」

あれ？どうしたんだ？

こっちと目が合った途端顔を伏せてしまった。

…………むう。何か俺悪い事したかな？

「西園寺、そっちへ行つたぞ！」

「ああ、悪い！今度こそ見てろよ！この黄色い掃除機の実力を！」
「変わったでやんす！？しかも弱そうでやんす！」

うつせい。

結果、2 - 0 で負けてしまった。

購買で勝ったチームにお菓子を買うことになってしまった。

まあそれは別にいいか。

今、俺は中庭に向かっている。

これからナオと昼御飯を食べる予定なんだが、俺は購買でお菓子を
買っていたので10

分ほど遅れてしまった。

怒ってなければいいんだが。

急いで俺は中庭に向かう。

そして、中庭にあるベンチを見ると——誰もいなかった。

あいつから誘っという遅れるのか。
まあいいけど。

.....

5分経過。

.....

遅いな。

あいつ、何やってるんだ？
早くしないと昼休みが終わるぞ。
実は俺の周りで隠れていたりしないよな？

そう思っただけ俺は周りを見える。
右には——誰もいないな。
左には——

——さらがいた。

いや、いつの間に？

実はこの子も隠密術使えるとかじゃないよな。

「よう、さら」

「西園寺君じゃないですか。こんな所で何をやっているんですか？」

「人を待っているんだよ。中々来なくて困っているんだ。そいつが昼を誘ってきたのに遅いんだよ」

本当に。

これだからナオは困る。

「そ、それは困った方ですね。その方が来るまで私がここに座つても……」

最後の方がごによごによ言つててよく聞こえなかった。まあだいたい分かるけど。

「ああいいよ」

「あ、ありがとうございます」

さらに俺の横に座る。

とは言つても、特に話すことはないんだが……そうだ。

俺が越後や荷田君と遊んでいるときに屋上にいたことを訊いてみるか。

あの時何やってたか気になるし。

「そつえばさ」

「何ですか？」

「俺がサッカーしてる時さらは何で屋上にいたんだ？」

「私はいつでも屋上に居ますよ。初めて会った場所もそうだったじゃないですか」

確かにそうだけど。

「西園寺君は……」

それだけ言つて、さらは喋るのを一旦やめる。

「どうしたんだ？」

「友達がたくさんいらっしやいますね」

友達と言つかチームメイト……いや、

「あいつらは仲間かな」

「やっぱり、一緒にいると楽しいと思いますか？」

そりやなあ。

楽しくなかったら付き合わないし。

そもそもそんなこと考えたことも無かった。

「もちろん」

「裏切られたらどうしようとは思いませんか？」

えっ？

「仲間だと思つていた人に、大好きな人に裏切られたらどうしようって不安に思いませんか？」

……

「無いな。あいつらは仲間だから」

荷田君や官取、越後に田島に岩田。それに疋田たちも。裏切られるなんて考えたこともない。

「だけど、誰だって裏切りますよ。いくら仲間であろうと、友達であろうと、姉妹であ

ろうと、誰だって、自分が一番大事なんです。信じられるわけ——」
「そんな心配していたら友達も出来ないだろ？」

俺はさらの言葉を遮って話す。

「すいません。今の話は無かったことにしてください。私と違って友達が多い西園寺君を参考にしようと思ったんです」

「……」

言う言葉が見つからなかった。

……裏切られる、か。

「そういえば、西園寺君は誰を待っているんですか？」

「ああ、それは——」

その時だ。

「ごつめーん！西園寺君！先生に捕まってしまいました！」

どうやら来たみたいだな。

全く、なんて言ってやろうか。

と、その瞬間。

「では私はこれで。お邪魔ですし」

「別に邪魔だなんて」

さらは急に立ち上がり、俺に背を向ける。

なんだか様子がおかしいな。

変なキノコでも食ったか？

いやいや、岩田とかならともかくさらに限ってそれはないな。

「では、失礼します」

「お、おい」

スタスタスタ……

急に行ってしまった。

本当にどうしたんだ？

ナオの声が聞こえてから様子がおかしいな。

そしてさらが行った後、入れ替わるようにしてナオがやってきた。

「どうかしたの？」

「いや、さっきまでさらがいたんだ」

「えっ？さらりんが？」

さらりんって……

「それで、邪魔になるからってどっかに行ったけど」
「そっか……」

ナオは少しうつむく。

その表情はどこか悲しげで、寂しそうだった。

「どうかしたのか？」

「えっ？別になんでもないですよっ」と

なんにも無いならいいんだが。

「さって、お腹空いたねっ！購買でパンを買ってきたから森の方へ行きましよう！」

「くれるのか？」

「もちろんですよ！いっぱい食べて下さいですよ」

そして、俺たちは森の方へ向かった。

「やら……」

向かう途中にナオが何か言った気がするが、俺には何も聞こえなかった。

第35話 「サッカーのルールって難しいよね」(後書き)

遅れてすみません。

前も言っただけと思うけど、テスト&受験があるので更新は急に遅くなる可能性があります。

……でも見てくださいね？

第36話 「紙粘土」

グラウンドで俺はいつも通り練習をしていた。

2年になったので雑用の時間はほとんど無くなり、変化球練習や筋力アップに励んでいる。

……俺は毎日遊んでるわけじゃないからな？

「誰に言っているんでやんすか？」

突然荷田君に訊かれた。

今さらな話なんだが、これ絶対プライバシー侵害しているだろ。そろそろ逮捕されないかなあ。

まあそんなこと本気で思ってるわけではないが。

「いや、何でもないよ」

「ならいいでやんすけど」

あんまり納得してない様子で荷田君は練習に戻る。

周りを見回すと、あと数カ月後の大会に向けて誰もが練習に励んでいた。

俺もベンチに入る為に練習しないとな。

俺は軽く投げ込みをする。

100球くらいしたところで一回休憩を挟むことにした。

そこで、あることに気づいた。

「フンツ、フンツ、フンツ！」

基宗キャプテンだ。

キャプテンは黙々と自分の考えた練習法を行っていた。

決して俺にさせられたあの無駄且つ無理な練習ではないことを言うておく。

キャプテンは3年生なので、特に誰よりも頑張って練習を行っていた。

まあ3年生全員頑張っているわけだが。

ただ、あることに気がつく。

1年生や2年生はともかく、他の3年生は普段通り練習をしている。

基宗キャプテンだけが独自の練習を行っていた。

監督もどうやらこの独自の練習法を認めいるようだけど。

「なんでみんなと同じ練習をしていないんだ？」

「全くでやんす」

荷田君が急にでてきたのはもちろん無視。

「荷田君はなんでやってるか知らないのか？」

「前に北乃先輩にも訊いたでやんすけど、知らないらしいでやんす」

ふつむ、同学年でも知らないのか……謎だな。

「そんなことより今は練習するでやんすよ！」

「そうだな」

考えてもしょうがない、か。

練習後。

部室には俺と荷田君がいた。

「あああああああ！でやんす！」

俺が荷物をまとめていると荷田君がいきなり大きな声を出した。
どうやらかなりイライラしている様子。

何があつたんだ？

とりあえず俺は話しかける。

「どうかしたのか？」

「いや、最近ずっと模型を作っていないからイライラしてるんですよ」

そつえば荷田君は結構重度のオタクだったな。

「一体何を作りたいんだ？」

「そりゃあいろいろですよ。ザボンガルとかゲツカマンとか…

…」

あ、田島と中庭で話していた奴が。

俺もよく知らないが。

「まあこの学校にいる限りしょうがないな。卒業したら模型を作る職業にでもなったら

どうだ？」

「分かってないでやんすね、西園寺君は」

？

「模型師になつたらどうやって息抜きするでやんすか！」

あ、ああ。そうだな。

よく分からんが。

「それじゃあ息抜きするときに困るでやんすから、おいらはプロ野球選手になって趣味

で模型を作りたいんでやんす！」

「あ、ああ。なれるといいな、プロに」

「頑張るでやんす！」

なんか動機が不純な気がするが……まあいいか。

「とにかく、今は何かを作りたいでやんす……」

「購買に何か売ってないのか？」

多分購買になら何か売ってるに違いない。
プラモデルくらいならきつとあるだろう。

「前に見たけど何も無かったでやんす。せめて紙粘土でもあれば、
でやんす」

何も無かったのか。それは御愁傷様で。
だけど、紙粘土があつたら作れるのか。
中々に技術を持っているんだな、荷田君。

「そうでやんす！無いなら作ればいいんでやんす！」

作れるの？

「さすがに作れないと思うけど」

「昔学校で紙とのりを煮込んだら作れるって言ってたような気がする
でやんす。だから

早速実践してみるでやんす！」

本当に出来るのだろうか。

俺たちは購買で紙とのりを買ってから、食堂へ向かった。

食堂のおばちゃんには悪いけど、料理を作りたいから台所を一部貸
してくれと頼み、台
所を貸してもらった。

なんか失敗しそうな気がする。

荷田君は購買から買ってきた紙と水を鍋に入れ、火にかける。

紙粘土を作るのに火にかける必要があるのか？
普通の水でもいいような気がするんだが。

紙がどろどろになってきたところで荷田君はのりを入れ始める。
すると、だんだんそれっぽくはなってきた。

……あとで鍋をちゃんと洗わないとな。
鍋は食事を作る為のものなんだから、のりをきちんと洗わないといけない。

「どうでやんすか？できそうな感じでやんすけど」

まだ液体状のそれを荷田君はゆっくりかきまぜる。

……飽きてきた。俺は寮に帰ろうかな。
だってずっと同じことしているだけだし。

「じゃあそろそろ俺は帰るよ」

「え、何ででやんすか？どうせだから最後まで付き合ってくれでやんす」

「いや、俺宿題あるから」

「普段誰かから写してる西園寺君が言うセリフじゃないでやんすよ」
う。

まあ確かに間違っではないんだが、多少は自力で宿題を終えたこ

とはある。

ほとんどの答えが間違っていたけれど。

「ま、別に俺が居なくてもいいだろ？後は一人でなんとかできそうだし」

「それはそれでやんすけど」

俺は荷田君に背を向け、台所を出ようとする。

「ま、待ってくれでやんす！」

見苦しいなあ……と思いながら俺は振り向く。
その瞬間俺はあるものを見てしまった。

荷田君が紙粘土を作っていた鍋にぶつかってしまったのだ。

「あっ!？」

「ヤバいでやんす！」

鍋はガシャンと音をたてながら地面にぶつかる。

横倒しになった鍋からはどろどろの液体が流れ出てくる。

……あーあ。どうするんだか。

「……それじゃあ俺はもういくよ」

「ま、待って下さいでやんす！」

そんな荷田君の悲痛な声に対し、俺は笑顔を見せてその場を去った。

後で慰めてやるか。

俺が部屋でくつろいでいると、相当疲弊した様子の荷田君が帰ってきた。

どうやら、こっぴどく叱られたようだ。

……どんまい。

第37話 「練習試合」

「よしっ、行くぞ！」
「はいっ！」

キャプテンの号令のもと、俺たちはホームベースの方へ向かう。
俺たちはホームベースを挟んで相手チームと向かい合った。

今日は5月の最後の週。

平面高校と練習試合の日だ。

心なしか、相手チームの顔がほとんど平面に見えるのは気のせいだろう。

「なあ西園寺」

「どうした越後」

「なんか相手チームの顔さ、学校の名前と同じように平面っぽくね？」

気のせいじゃ無かった。

まあとにかく、練習試合とは言え俺がこの学校に入学してから初めての先発だ。

俺だけでなく他の2年生も試合に出ている。
つまり弱小の高校くらいお前らで簡単に勝って、俺にアピールしろ、ということだろう。

なるほどそれなら俺たちはここで上手くアピールできれば夏季大会や秋季大会にも出してくれると言う訳か。

「よお」

「あ、北乃先輩」

北乃先輩が近付いてきた。

嫌な予感しかしないが、ちゃんと先輩にとる態度をしないと生意気と見られるので一応それなりの対応をする。

「今日お前が発なんだった？」

「はい、そうですけど」

「ふうん。お前、このままスタメン狙おうとか思っていないよな？」

ガッ！

「うわっ！」

思い切り足を踏まれた。

「ああ、悪い悪い。それじゃあな」

スタスタスタ……

いてて、試合する前から怪我って洒落にならないぞ。

「西園寺君！投球練習をするでやんすから早く来るでやんす！」

「うん、分かったよ」

俺は足の痛みを我慢してピッチャーマウンドに立つ。
それからゆっくり右足を上げて荷田君——キャッチャーに向かって
投げる。

もちろんまだ投球練習の段階なので本気は出さない。

少し投げた後に、審判からプレイボール！と発する。

1番打者が入ってきて、バットを構える。

荷田君はストレートのサインを出す。

俺は右足をあげ、思い切り地面に踏みこみ、左腕を振る。
腕から放たれたボールは打者の外角の方にズバツと入った。
打者の方はそれを見ているだけでバットを振らない。

「ストライクッ！」

その後も内角、外角と打者を攻める。

2回目からはバッターはバットを振るがどれもズバツとキャッチャーミットにおさまり、
三球三振に仕留めた。

ふうん。言っちゃ悪いが、確かに弱小だな。

バットを振ってもボールにあたる気配も無かった。

2番打者が入ってくる。

とはいえ、弱小だからと言って手を抜くつもりはない。
もし手を抜いて打たれれば残念ながら俺は今後スタメンになれる可能性が少なくなるか

らだ。

荷田君のサインに従い、俺はストレートを高めに投げる。

ボールを高めに投げて相手の空振りを誘う。

基本的なパターンだ。

もちろん星英高校などのレベルになったら簡単に手を出してはくれないが。

が、相手は弱小高校。毎年1回戦か2回戦で消えるような相手。見事に釣られてくれた。

「ストライクッ！」

その後もカーブを投げたりスライダーを投げたりしてストライクを取っていく。

最初の1回を俺は2三振で終えてベンチに戻る。

「ナイスピッチングでやんす！相手も相手でやんすし、この調子でいけば大丈夫でやんすね」

「うん。次もいいリードを頼むよ」

「任せるでやんす！」

こんな話をしている間にこっちのチームの1番——越後は塁にでていた。

相手ピッチャーはいきなり打たれて動揺しているな。

カキン！

あ、駄目だ。あれはゲッツーになるな。

2番が打った球は残念ながらセカンド正面のゴロで、俺が予想した通りゲッツーになってしまった。

その後も凡打になり、0 - 0で2回表を迎えた。

「さて、いくでやんす」

キャッチャーミットを持って荷田君はホームベースへ歩き出す。俺もグローブを持って、小走りでマウンドの方へ行く。

で、まあ。

この回も特に打たれず、全く前回と同じ二三振で仕留めて終わった。

さて、こっちの打順は4、5、6番か。

詳しく言つと、北乃先輩、岩田、荷田君だな。

相手ピッチャーが投げる。

あの球の速さからして115kmくらいだろうか。

別にめちやくちや遅いわけではないが、天道の球を見た俺たちにとつては遅く見える。

月並みな形容詞になるが、まるで止まっている同然だ。

……元旦に直接ボール見た俺だから言えるのかもしれないが。

で、またしても4、5、6とアウトになる。

おいおい、このままじゃ監督に怒られるぞ。

現在、5 - 0で8回。

結局3回裏から下位打線ながらもなんとかつなぎ、2点をもぎ取った。

4回表には俺が四球とヒットでピンチを迎えたのだが、まあ何とか切りぬけた。

それから5回、6回、7回も特に何も無く、終わった所で俺は降板し、田島と交代した。

結果は7回3被安打8三振。

自分で言うのもなんだが、中々良い活躍だと思う。
あとで先輩から何されるか分からないが。

で、今の状況を詳しく言っと。

8回裏で親切高校の攻撃。

この回で3点を追加し、なお無死2、3塁。
そして3番基宗キャプテンの打順である。

言い忘れていたが、この試合は7点コールドがあるので、たぶんこの回で終わるだろう。

降板した俺には関係の無い話だが。

とりあえず試合観戦に集中するか。

前述の通り、今はキャプテンがバッターボックスに入っている。キャプテンに抜擢されるくらいなんだから、やはり打撃は中々のものだ。

そういえば今日のスタメンを言ってなかったな。遅いと思うが、一応紹介しておこう。

1番	中	越後
2番	左	宇多
3番	遊	基宗
4番	三	北乃
5番	一	岩田
6番	捕	荷田
7番	二	官取
8番	右	疋田
9番	投	西園寺

今は投手が変わって田島になっている。

話を戻すが、キャプテンは打撃だけでなく守備も上手い。

今日も実際何回かキャプテンのファインプレーに助けられている。どうやら今日は調子がよさそうなので、打ってくれるだろう。

それに、相手のピッチャーも相当動揺している。

ビシュ！

相手のピッチャーが投げる。

なんと失投でど真ん中に投げてしまったようだ。
それを見逃さないキャプテンではない。

カキーン！

ボールは空中を速いスピードで飛ぶ。
きれいなアーチを描いている。

そのボールはフェンスの高いところ——所謂ホームランの位置に当たった。

つまり、サヨナラ3ランホームランだ。

こっちのベンチから一斉に歓声があがる。
ホームランを打った当人は特にその歓声に気に留めることも無くベースを回っていた。

打たれたピッチャーはがくしとうなだれている。

帰ってきた基宗キャプテンたちと共に俺たちは再度ホームベースを挟んで向かい合う。

「ありがとうございましたっ！！」

そしてベンチに戻ると監督が立ちあがった。

「お前らなあ……こんな弱小校相手にこんな時間かけて勝ってうれしいのか？」

へ？

「あいてはよれよれの冗談半分でやってる高校なんだぞ？」

ええと、相手がまだ帰って無いのにそんな大声で言っているんですか？

相手の選手の一部がこっちをちらちら見ているんだが。

「とにかく今日は特打ちだ。……返事は！？」
「ハイ！！」

どうやら、勝っても内容が求められるらしい。

……というかこの人ずっと怒ってないと気が済まないんじゃないのか？

とにかく、それから俺たちはグラウンドへ向かって行った。

途中、荷田君が話しかけてきた。

「今日……オチがつかれないでやんすね」

「そんなメタ発言を言わないでくれ！」

どうにも返答をしづらい事を言ってきたもんだ。

ま、再来週くらいにまた練習試合するらしいし、それに向けて頑張るか。

「なんかすごい終わり方でやんすね」

「半分荷田君のせいでもあるからね!？」

俺の声は特に木霊すること無く消えていった。

第37話 「練習試合」(後書き)

Yoridukiです。

……今回よくわからない終わり方ですいませんでした。

第38話 「平和な一日」

「勉強せずに頭が良くなる方法ってないですかねえ」

「あると思うか？」

現在、中庭にてナオと談笑中。

すると、突然こんなことを言いだしてきた。

もしそんな方法があつたのなら今まで俺たちが事がほぼ無駄になる。
あつたのならば遠慮なく使うが。

「……………」

「……………」

数秒二人とも無言の状態が続く。

先に口を開いたのはナオの方だった。

「勉強せずに頭が良くなる方法、ないですかねえ」

「……………ねえよ」

何度聞いてもないものは、ない。

「勉強せずに頭が悪くなる方法なら知っているんですが」

「それ勉強してないだけだろ」

「西園寺君が言つとやっぱり説得力がありますね！」

まあ確かに授業中ほとんど俺は寝ているが。
お前だって馬鹿なのは一緒だろ。

「だいだいだな。今の成績でナオは将来どうするんだよ?。」

こいつのことだからでかい将来の夢でもあるんだろう。
しかもどうでも良さそうな。

「その言葉を、そっくりそのまま返したいのですが、西園寺君はどうするんですか?。」

返してるから。

そっくりそのまま返してるから。

「俺はプロ野球選手になるから頭の良さなんて関係無いんだよ」

ナオは驚き入っている。

本当にプロ野球選手になると言いきるとは思っていなかったのだろう。

「じゃああたしも頭なんて関係ありませんね!。」

何でそうなった。

「プロ野球選手の妻になるからですよ」

「……」

「照れてますか?。」

「照れてなんかないぞ」

正直めちゃくちゃ照れてた。

こいつ分かっててやってるんだろうけど。

「でもまあ、その前にさ……俺たち卒業できるかな？」

「さすがに勉強が重視されないとはいえ、二人揃ってこの点数はまずいですねえ」

実は二人で中庭に来る前に小テストが返されたのだ。

20点満点のテストなのだが、もちろん俺たちが2ケタの点を取る訳も無かった。

それどころか、

「さすがに二人揃って……小テスト0点はちよつとヤバイな」

そう0点だった。

二人合わせても0。

荷田君1人にも勝てない。

「ちよつとどころじゃないですよ」

……もしかして小学生にも学力で負けるかもな、俺たち。

「はあゝ。勉強せずに頭が良くなる方法ってないですかねえ」

今日二度目のこの言葉。

何度言ってもないものは、ない。

「あつたらいいな」

「……はあゝ」

ナオが深いため息をつく。

「まあ、過ぎたことだし他のことでも考えないか？」

「そうですね。ずっとこんなことを考えていてもしょうがないですね」

ナオは気を取り直す。

「それじゃあ赤道の話でもしましょうか」

「なんで赤道？たしか地球のどっかの地名だろ？」

地名じゃないかもしれないが。

とにかく地球のなんかだったはずだ。

「地名かどうかは分かりませんが、地球の赤道って場所はどこも赤い土をしているらしいんですよ」

「なんじゃそりゃ!？」

「すごいな地球、まだまだ不思議がいっぱいあるんだな。いろいろ違います」

「そんな不思議なところにいつか行ってみたいありませんか？」

「確かに。マイナスイオンとかいっぱいあふれてそうだな!」

俺たちは会話を弾ませる。

すると中庭にある人が近付いてきて、地面に倒れ込んだ。

「あ、あれはっ!」

「誰だっ?」

俺たちはそっちのほうを見る。

中庭は食堂のすぐそば。

そして普段ここでよく倒れている人物。
思い当たる人物が一人いる。

「あれって……」

「イワタンですよ！」

誰だイワタンって！

突っ込みたかったが、俺は先に岩田の方へ向かったナオを追いかける。

案の定、追いかけた先には岩田が倒れていた。

動かない岩田にナオが話しかける。

「イワタン、どうしたの？」

「あ……あ……高科さん」

かすれた声で岩田が喋る。

というか、いつも死にかけてるな岩田。

「腹減った……」

やっぱり気分が悪いとかではなく、単純にお腹が空いてるだけのようだ。

なんで食堂がもうすぐなのにここで倒れるんだ。
頑張れよ。

「お腹空いてるんだ？あと、食堂までもうちよつとだよ？」
「も、もう駄目だ。これ以上は腹が減って動けない」

岩田の腹の虫がグウ、と鳴る。

「しかたないですねえ」

そう言つてナオはどこからかお菓子を取り出す。

いや、待て。今どこからとりだした？

「はい、これあげますよ！」

「い、いいの？ 高科さん」

「そのために出したんですから」

それだけ言つと岩田は勢いよくお菓子を食べ始めようとする。
ただ、直前の所でナオが止める。

「ちょっと待つてくださいね！」

パシパシ。

ナオが手をたたく。

「はい、いいですよ！」

ガツガツ、ムシヤムシヤ。

「ふう」

「わっ、一瞬で空っぽですよ！」

食うの速いな。

にしても、俺にはさっきナオが手を叩いた行動が理解できない。

一体どういうつもりだ？

「まだ、足りない」

「さっき1個空けたばかりじゃないですか！まだお腹空いてるんですか？」

「うん」

「仕方ないですねえ。はい、もう1箱ですよ！」

パシパシ。

ナオは再度手を叩いてから岩田にお菓子をあげる。

バリバリ、モグモグ。

「く、食い過ぎた岩田……にしても、ナオは何でお菓子をあげる前に手を叩いているんだ？」

「いやあ、こうしていたら手を叩くだけでイワタンが来てくれるようになるかなって」

笑顔でナオは答える。

こいつなんとも恐ろしい事を。

それに、岩田は人間だからな？カバとかじゃないからな？

「そんなわけないだろ」

俺がこう言つと、ナオは手を叩いた。
まさか……

「なんかくれるの?」

「反応してやがる!しかもベースランニングの時より早い!」

本当にくるのかよ。

「岩田……お前にはプライドってものがないのか?」

「プライドじゃお腹は膨れませんよ!」

「お前が言っなっ!」

まあつまり。

今日はナオと平和な一日を過ごしたと言っことだ。

第38話 「平和な一日」(後書き)

ナオ 「今回は会話文が多いですねえ」

西園寺 「前は少なかったからな。まあ作者がこつこつものを調節するのが苦手だ
からどうしようもないな」

ナオ 「ほんと下手ですよな」

yoriduki「悪かったな」

第39話 「練習試合2 前編」

前の平面高校との練習試合から数週間が過ぎた。

前回言った通りに今日は練習試合がある。

今日の相手はあの天道がいる星英高校が相手だ。

「おい、西園寺。……今日はお前を先発にした意味、分かっているな？」

「はい！」

「この試合、味方が点を取るまでなんとか耐えろ」

監督はそれだけ言って他の選手の所へ向かう。

そう、平面高校の時の結果が中々良かったので今日も俺は先発になっていた。

先輩方には悪いが、今日は何としても勝ちたい。
練習試合だとしても、だ。

きつとあいつは前に外であったことも覚えてないのだろう。

あいつは俺と目が合っても何の反応も示さない。

それが証拠だ。

まあいい。

今は練習試合に集中しよう。

もし今日活躍できたのならば、7月の大会にもベンチ——いや、スタメンになれるかもしれない。

そしたら夏の公式試合で勝負することができる。

「さあ、行くでやんすよ西園寺君」
「ん、ああ」

俺たちはホームベースの方へ向かった。

「お願いします!!」

互いに挨拶をする。

強豪校ともなると挨拶ではなく、むしろ叫びのようなものだった。部員も星英の方が多いので実際声量も向こうの方が圧倒的に多い。が、試合は声量などで左右されるわけではない。

気迫はあるかもしれないが、やっぱり物を言うのは実力。あと何かあるとしたらその時の運だろう。

ここで一応今日のオーダーを紹介しておく。

1 番	中 越後
2 番	左 手束
3 番	遊 基宗
4 番	三 北乃
5 番	一 中田

6 番 右 疋田
7 番 二 大浦
8 番 捕 荷田
9 番 投 西園寺

前の試合と違うのは、岩田と官取がベンチで、3年生の先輩が入ったということだ。

……疋田が入ってるのは気になるがまあいい。

「プレイボール！」

審判の声がグラウンドに響く。

1 回の表。

先攻は親切高校。

相手の先発はもちろん天道。

天道は右足をあげて肘をしながら振る。
俺と同じ左投げだ。

ズバン！

……速い。

それに、悔しいがフォームもとんでもなく綺麗。
あの正月の時にボールを受けたから分かるが、天道の球は伸びがとんでもない。

綺麗なバックスピんがかかっているストレートだった。

こうやって俺たちが見ている球より、打席に立っている越後は誰よりも速く見えているのだろう。

だがいくら速いと言っても、俺たちは打たないといけない。
そのことは全員が重々承知していた。

天道は2球目を投げる。

ククッ！

ズバン！

越後の手前で内角を深く決る。

ストレートと変わらないようなスピードで投げられたその球は――
シュート。

ちょうどストライクかボールか微妙なところを衝いてくる。
結果はストライクだったのだが。

天道は3球目を投げる。

ククッ！

ズバン！

またしても越後の手前で曲がる。

やっぱりストレートと変わらないようなボールだった。

だがそれはシュートとは違い、越後の体から逃げていくような変化をした。

高速スライダー。英語で言うとHard Slider。

これは、シュートと似たような球速且つ変化量。

それを天道が140km/h前後の球速で使い分けてくる。

伊達に俺たちも練習してきたわけではないが、さすがにこれを打つのは厳しい。

150km/hの速球を打つよりもはるかに難しいのだ。

野球経験者なら分かってくれるだろう。

もちろん俺たちはあいつの球種を念入りに調べてはいる。
だが百聞は一見にしかず。

打席に立つと全然違う。

越後はバットを振っていた。

140km/h前後のボールを見て即座にまたシュートと思いこんだ。

まさかあんな速いスライダーが来るとは予想してもいない。

いや、あんなスライダーは見たことが無い。

それなら分かるはずもない。

3球3振。

「くそっ！」

越後は自分のバットを地面に叩きつける。

大丈夫だ、まだ次の打席がある。

そう思ってベンチへと帰ってきた。

2番打者にヒットを託して。

2番打者は手束先輩。

……残念ながら俺はこの人のことをあまりよく知らない。

ただ、練習の様子を見ている限り失礼だがこの人が天道の球を打てるとはとても思えない。

ズバン！

150km/h台の剛速球が外角、内角と投げ分けられる。

こんな速球を投げられる天道は間違いなく天才だ。

ズバン！

「ストライク！バッターアウト！」

またしても3球3振。

だからと言ってここでまた完封されるわけにはいかない。

「キャプテン頼みますよ！」

「ああ」

基宗キャプテンはバッターボックスに入る。

1球目。

ビュッ！

天道が投げる。

初球にもかかわらず、キャプテンはバットを振る。

だがそのバットは球に触れることは無かった。

ボールの遥か上を振っていた。

キャプテンは高速スライダーもシュートも警戒していた。

練習試合だと言うのにまさか3球種も見せてくるとは思わなかった。

それが強豪校のエースともなれば。

では何だったのか？

『上を振っていた』

これは基宗キャプテンが振る場所をミスったのではなく、ボールが自分から下に曲がつ

た——いや、落ちたのだ。

天道の持ち球の3つ目、フォーク。

直球より回転数が少なく、下に落ちていく。

本当は回転数が少なくスピードも遅ければ見極められることも少なくて無い。

したがって回転を多くしてSFF——高速フォークを投げるか横回転を混ぜたりすること

とがあるのだが、そこはやはり持ち前のスピードがある。

しかも球の握り方や投げ方までストレートと非常に似ているのでとても判別しにくい。

フォーク、シュート、高速スライダー。

これが天道の持ち球だ。

それでもやっぱり分かっていても打てない。

カキン！

キャプテンはボールになんとか当てたが、ボテボテのショートゴロだった。

平面高校の選手ならエラーをしてくれるかもしれないが、星英高校がそんなミスをするはずがない。

「アウト！」

これで3アウト。

攻守交代だ。

「いくよ荷田君」

俺はマウンドに立つ。

軽く投球練習。

調子は前よりは悪いが、さほど落ちてる感じもしない。

星英高校相手に俺の球は効くのか。

いや、効かなかったら困る。

……違うな、『効かせる』が正しいか。

相手の1番が打席に立つ。

荷田君はストレートのサインを出す。

まあ確かにいきなりスライダーを投げたりするつもりはない。

内角、高め。

ビュッ！

相手は外角を打つような構えだったので、ボールは相手の顔面すれすれを通った。

「ストライク！」

さて2球目。

荷田君はさっきと同じストレートのサインを出す。

今度は外角にだが。

ビュッ！

外角低めに投げられたボールはストライクゾーンぎりぎりの所を通る――

と思ったのだが。

カキーン！

残念ながらそのボールはキャッチャーのミットにはおさまらず、俺の横を通った。

綺麗な、ピッチャー返し。

セカンドとショートの間を抜ける。

「……」

いきなりランナーを出してしまった。

そういえばそうだ。

あっちのチームには天道がいる。

俺くらいの速球なんて慣れているんだろう。

なら、あと頼れるのは変化球とコントロール。

あくまでも速球はタイミングを外すもので使う。

2番目のバッターが入る。

荷田君に目で合図をする。

どうやらあっちもそれなりに分かっていたようで、今度は変化球のサインを出してくる。

あっちも1回でいきなり手の内を見せてきた。

正々堂々と言う訳ではないが、ならこっちも変化球を見せてやる。

ビュッ！

ククッ！

スカッ！

思い切りバッターはスイングしたが、俺の投げたカーブには当たらず

ない。

もう一回カーブを投げるか。

ビュッ！

ククッ！

スカッ！

またも空振りしてくれた。

どうやら俺のカーブは効きそうだ。

……また間違えたな。効きそうじゃなくて効かせないとな。

その後も俺はカーブとスライダーを使い分けて2アウトを取った。

2死1塁。

別段マズイわけでもないが、いいわけでもない。

なぜならば、次のバッターは――

そのバッターが打席に立つ。

大丈夫、練習試合だ。

肩の力を抜いてしつかり投げれば、負けない。

確かに4番で強打者だが仮にも相手はピッチャーだ。

負けるわけにはいかない。

打席に立っているのは、そう――天道だ。

第39話 「練習試合2 前編」(後書き)

Yoridukiです。

遅くなつてすみません。

最低でも1日おきで更新できるように頑張ります。

第40話 「練習試合2 後編」

アイツ相手に何を投げるか。

ストレートか？

確かに天道のチームメイトは天道の球に慣れてるかもしれないが、天道自身は自分の球

で練習できるはず無いので、一応いけるはずだ。

コースさえ間違いないければ。

俺は中学校の時に経験している。

天道は力が無さそうで力がある。

いくらストレートでも簡単に持ってかれる可能性があるから以外に危ない。

なら、スライダー？

これならいきなり強振で持ってかれる可能性は低いかもしれない。

ゴロも狙うことができる。

ただ、投げ方はストレートとは少し変わってしまうからばれる可能性がある。

あと残るはカーブ。

これも投げ方はストレートと少し変わるのではれる可能性がある。

だが、カーブの場合打たれることは無いはず。

俺の1番の得意球だからだ。

……いくら考えてもしようがないか。
ここは荷田君のサインに任せてみよう。

荷田君が出したサインは、外角に投げてボールになるような逃げるスライダーだった。

（なんか逃げるような感じで割に合わないが……正しいか）

俺は指示通りに投げる。

荷田君の指示通りに外角にいつてくれたボールを天道は見逃す。

「ボール！」

だめだ、今の俺じゃ何を投げても打たれる気がしてならない。
だからと言って諦める訳にもいけない。

俺は意味もなく手に持っていたボールを強く握りしめる。

荷田君が次に指示したのはカーブだった。

ボールからストライクに入ってくるようなカーブ。
決して悪くない選択肢だ。

ビシュ！

ボールを投げる。
が、直感で分かった。

（マズイ！）

これは打たれる。

間違いない、打たれてしまう。

決してボールはスッポぬけた訳ではない。

とても逸れたわけでもない。

カキーン！

天道はボールを引っ張り、ライトオーバーの打球を放った。

その隙に1塁ランナーは2塁、3塁と回ってホームベースの方へ回ってくる。

走者が1番打者だけあって足がとても速く、こっちの外野の肩じや間違いない間に合わない。

天道は2塁まで回ってストップした。

——完璧に見切られていた。

まさか俺の得意球があんなにやすやすと打たれるとは思ってもなかった。

そして1点を与えてしまった。

……いきなり監督の言われたことを守れなかったか。

最低、この回は1点で切り抜けないと。

相手の5番打者が右のバッターボックスに入ってくる。

2死2塁。

得点圏にランナーがいて、ピンチな状況ではある。

今度こそ、押さえる。

俺は気持ちを切り替えて5番打者の方に気を向ける。

ビシュ！

ズバン！

相手はボールを見逃す。

きつと次から打ってくる。

なら次に投げる球はこれだ、相手の内角高めのスライダー。

スライダーならば相手の内側に曲がるので、打とうとすればつまづてくれるはず。

どうやら荷田君のサインも俺の考えと全く同じところなので、考えたことは一緒なのだろう。

ビシュ、ククツ！

カキン！

やや鈍い音とともにボールは二塁の方へ飛ぶ。
予想通りつまづてくれた。

二塁手はこれをしっかりとキャッチする。

「アウト、チェンジ！」

3アウトになり、俺たちはベンチへ戻る。

「気にすること無いでやんすよ。おいらたちが頑張つて点を取るで

やんすから」

「……頼むよ」

天道相手に5点も取ってくれたら投げる方も気が楽なのだが、この感じじゃ良くて1、2点くらいだろう。

「……」

俺は天道のピッチングを見る。

主にストレートを中心として、変化球でつめる。
こっちの4、5、6番はすぐに3者凡退になってしまった。

(さて、もっと気を引き締めて行かないとな)

俺は再びマウンドに戻る。

ここから俺はだんだん調子に乗ってきて、三者凡退に抑える回が続く。

無論相手の方もそうで、ほとんど投手戦になった。

2回 1 - 0 変わらず。

3回 1 - 0 これも変わらず。

4回 ……………

ところどころヒットはでたが、本格的に動きに変化が出てきたのは7回だった。

「フォアボール！」

俺は2回連続で四球をしてしまった。

無死1、2塁の状況。

相手は4番、またしても天道。

……今の俺にこいつが抑えられるか？

結構疲弊してきて、球威も最初ほど無くなってきた。

危ないが、ここは敬遠――

「ピッチャー交代」

突如ベンチにいた監督から告げられた言葉。

それはちょうど俺と天道の対決が壊される言葉だった。

まあ……相手はなんとも思っていないだろうが。

「監督、俺は投げれます！」

「確かにここまでは良かったが、1回のこともあるし、それに、お前もう疲れてるだろ。」

さっきから球威が落ちて、球のキレが無くなってる」

「でも！」

俺は監督に交代を取り消してもらえるよう頼む。

自分でもなぜそんなに天道の対決に固執するのは分からなかった。

「だめだ。ベンチに戻れ」

俺はしぶしぶベンチに戻る。

……次は、勝つ。

そう思いながら、俺は田島にボールを渡した。

後はベンチで今日のことを振りかえっていたので、あまりよく覚えていない。

結果として天道がヒットを打ったことくらいは覚えているが。

「ありがとうございました！」

結局俺たちは点数を取れず、2 - 0で完封負けをした。
まだ全然力が足りなかった。

「おい、お前ら。地区大会優勝筆頭候補の星英様になら負けてもいいと思ってるんじゃないだろうな？」

「そんなことは全く思っていません！」

「なら、しっかり勝ってこい！……今日は全員倒れるまで特打ちだ。分かったな？」

「はい！」

こうして。

俺の高校での最初の天道との勝負は、俺の黒星で飾ることになった。

第40話 「練習試合2 後編」(後書き)

yoridukiです。

途中話がぐだぐだになってすみません。

これから情景描写とかを何とかできるよう努力します。

第41話 「資料」

キンコーンカーンコーン。

長い長い授業の終わりのチャイムが鳴る。

星英高校との練習試合から2日後。

俺は学校で数学の授業を受けていた。

にしても、数学は小学生のころからどうにも苦手だ。

生物や歴史などはまだいいんだが、頭を使うことになるとうちにもやる気がなくなる。

高校の数学なんてもつてのほかだ。

中学生の時に習った時の三平方の定理ですら意味分らないのに、俺に高校の数学をや

らせることは豚に真珠を見せるようなものだ。

そうそう、アリをずっと見ているというのは実に良い。

そういう行為はいくらやっていても飽きない。

とりあえず休み時間になったからこんなことを考えるより、寝るか。

「おい、ちよつといいか」

誰だ、俺の睡眠を妨げる奴は。

見上げるとそこには神条がいた。

「前に話した生徒のリストの件なんだが」

「生徒のリスト？」

「自分から言ってきたのに覚えてないのか？」

生徒のリスト……生徒のリスト……あ、そういえば前に頼んでたな。

「いや、思いだした。どう？いけたか？」

「ああ。渡しておくぞ」

俺は神条から赤いファイルを貰う。

「いいか、くれぐれも悪用するなよ？」

「まさか。そんなことしないって」

ミーナさんは戦争にも関係してるかも、って言ってたからな。

もしかしたらこの情報を悪用したら俺は抹殺されるかもしれないからな。

……ないな。

「とにかく、私は渡したからな」

「何それギャグ？結構下手だな」

「い、いや、決して『私』と『渡し』を掛けてるわけじゃないからな！？」

神条は少し顔を赤らめながら必死に反論している。

普段は生徒会長と言うことで、恐れ多いのだが、こうなってしまつと普通にかわいい。

こんなことを思ったのがナオにバレたら殴られるが。

……どうして俺はこう地雷を踏むようなことばっかり考えるのだろう。

「とにかく！それじゃあ私はいくからな！」

なんか慌てた感じで神条は教室から出て行った。

よし、勝った。

俺は廊下に出てガッツポーズを決める。

あ、廊下に出たのは次移動教室だから。

「なにをされているのですか？」

「うわ、さら！？」

後ろからいきなりさらに声をかけられた。

……どうやら今の俺の行為を見られていたらしい。

うっわ、やばい、めちゃくちゃ恥ずかしい。

顔赤くなったら嫌だなあ。

「クスクスクス……なんでガッツポーズされていたのですか？」

「き、気にしないでくれ。もっと言うと今のことを忘れてくれ」

ナオに見られなくてまだマシだ。

とりあえず今はここから早く抜け出したい。

「そうだ、今から俺移動教室だから！」

「そうなのですか？寝ないで頑張ってください」

俺はさらと別れて移動教室の方へ向かった。

……俺は勉強できない奴とは言ったが、いつの間にさらの中で俺は勉強中よく寝ている

男子になっただんだ？

不思議だ。

「はあ、やっと授業が終わった……」

今日の授業をすべて終え、俺は寮に戻ろうとしていた。
途中で岩田が倒れていたり、田島が音楽室でピアノを弾いていたが
そこはいつもどおり
なので置いておく。

そういえば田島11月……いや、10月くらいかな？その頃にピアノのコンクールがあるとか言っていたな。

あんまり聴いたこと無いけど上手いんだろうな。
今度足を運んでみるか。

もう何回も通った道に戻って寮に向かう。

そこで俺はある人を見つけた。
その人はこっちに合図を送りながら角を曲がって人気のない寮の裏の方へ行った。

その合図の意味を教えてもらってないから本当の意味は分からなかったが、たぶん、つ

いて来い、という意味なのだろう。

俺も後をつける。

角を曲がった所でその人はいた。

やはりその人は俺を待っていたのだろう。

まあ、俺もその人を待っていたのだが。

「随分と寮に戻ってくるのが遅かったわね。人を待たせるのが好きなのね」

「だから勝手に決めつけるなよ。で、今日は学校で授業が長引いたから帰るのが遅くなつたんだ。というか、それ以前に今日来るとか打ち合わせしてないからわからないし」

俺はその人——お姉さんと挨拶を交わす。

いいかげんちゃんと名前を教えてもらわないとならないな。

「で、どうだった？」

もちろん、俺が前に頼んだ調べ物のことだ。

「まさか私が失敗するとも？もちろんちゃんと持ってきたわよ」

「そ、そうか」

どうやら自分の實力には自信があるらしい。

「とりあえず資料を渡しておくわよ」

「ありがとう」

一応渡された資料に目を通す。

さすがに情報屋だけあって神条がくれた情報とは比べ物にならないほど細かく、要点

をきれいに纏めてあった。

そこで俺はあることに気づいた。

この人たちには全員共通点がある。

それは――

・全員、性格が豹変している。

・1回以上行方不明になったことがある。

この2点だ。

下の方はミーナさんから聞いたことがあるが、上の方は初めて聞いた。

性格が豹変――具体的に言うと、急に真面目になった。

一体この学校では何が起きているのか。

「で、その資料は誰に渡すのかしら？」

「ああ、それはミーナさんに……って、何でそれを!？」

なぜ誰かに渡すということがバレてるんだ。

「だってあなたがこんな資料を使う訳ないじゃない」

「あ、そりゃそうか」

まあ確かにそうだな。

「まあ私には関係のない事だけど。とりあえず扱いには気をつけた方がいいわよ」

へ？なんで？

「はぁ……その顔を見るに分かってないわね。あなた、この学校のこと正確に知ってるの？」

「オオガミとかジャジメントとかいう会社が関連してる可能性があるんだろ？」

確か戦争もしていたりする会社だとかミーナさんは言っていた。

食料や衣服などいろいろなことに手を出している会社と言うのは俺でも知っている。

「ええ、そうよ。ただ、あなたはその会社の実態を知らない」

「実態……？」

「そつ。これはあなたに言っても意味のない事だから言わないけれど」

それは遠まわしに俺のことを馬鹿って言ってるのか？

「そこまで言っただのなら言ってくれよ。気になるだろ」

「聞いたかったらその資料を渡す人物にでも聞きなさい。これ以上は追加料金を取るわよ」

そもそも俺金すら持ってないんだが。

代金をどうやって支払うかはまるで考えていなかった。

……どっかの島にでも送られたらどうしようか。

「で、他に何もなければ私はもう行くけど」

「え？料金は？」

「あなたが持つてないことくらい分かるわよ。それとも何かしら、あなたが何かしてくれるの？」

い、いや、何もできないが。

それでもお姉さんは情報を教えてくれたのに俺は何もできないのはなんだか非常にもどかしい。

そんなことを言ってもはぐらかされるのは分かってはいるのだが、悪い気がしてならない。

「何もしないんだが……お姉さんの名前を聞かせてくれないか？」

お姉さんに尋ねる。

「……なんでそんなことを訊くのかしら。お姉さんでいいって言うたと思うのだけれど？」

「もう会うことは無いと思うんだが、一応ちゃんと名前を知っておきたくて。いくらな

んでもさすがに名前を知らないのはどうかと思ったんだ」

よくよく考えたら俺だって自己紹介をしていない。

俺のことは知っているんだろうが。

「……リンよ」

「リンお姉さんか。俺は西園寺だ。知ってると思うが」
「もちろん」

なんとも不思議だ。

今までこうやって話をしていたというのに、お互い自己紹介をしないままだったのだ。

「さて、それじゃあ私はもう行くわね」

リンお姉さんは振り向く。

ヒラリ。

その時何か一枚の紙が落ちた。

……写真？

俺が手にとって見てみると、そこには緑色の髪の毛の女の子がいた。年齢は……俺より少し上と言ったところか。

その女の子の隣にはリンお姉さんと、見知らぬ男がいた。一体誰なのだろう。

それはともかく。

「リンお姉さん！写真落としてるぞ！」

写真を落としたことに気づいてないまま歩いていたリンお姉さんを呼びとめる。

お姉さんは写真のことに気がつくやや駆け足で戻ってきた。

戻ってきたリンお姉さんに俺は写真を返す。

「……この写真に写ってる人たちは？」
「……」

リンお姉さんは口ごもる。
そして。

「私の……大切な人たちよ。片方は、私の妹」
「似てないんだが？」
「そりゃそうよ。血はつながってないんだもの。」
「……」

複雑な事情があるのか？

「なったの。妹に。私が姉に、その男の人が兄になったの」

……よくは分からない。
ただ、リンお姉さんの話し方からして、この妹をとて愛している
ことが分かった。

「今度こそ行くわよ。大切な妹と用事があるから」
「ああ」

リンお姉さんは歩き出す。

「それじゃあ」
「ええ。それじゃ」

俺たちは別れた。

資料を持って俺は寮に戻る。

自分の部屋について、バックに資料を入れてからあることを考えた。

「大切な人……か」

ふと考える。

本当に大切な人とは誰なのか？

「……こんなこと考えてもしょうがないな」

俺はベットに寝転んで二度寝をすることにした。

第41話 「資料」(後書き)

yoridukiです。

なんか長くなりました。

……もしかしてこれくらい長いほうがいいのかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9481x/>

俺と野球と奇跡 （パワポケ10）

2011年12月5日20時54分発行